

男の娘 魔王の

クロニクル



峯みると

不幸を治す薬は、ただもう希望より他にない。

(ウィリアム・シェイクスピア)

薄暗い石壁に囲まれたこの部屋は、ひんやりとして澄んだ空気で満たされている。

僕は、この部屋が好きだ。

春夏秋冬、常に快適なこの部屋は、僕の唯一の居場所だし、いつだってケイオスが側にいてくれる。

ケイオスは僕の友達だ。

歌ったり、凄く面白いお話を聞かせてくれたり、ゲームの相手をしてくれる。

でも、ちょっと言葉遣いが堅苦しいかな。もっと気軽に話してくれると満点なのに。

食事もお風呂も洗濯も、いつも誰かが用意してくれる。

僕はいつもいつでもここにいて、何もしないで生きてきた。

もう覚えていないほど昔からそうだったから、その事になんの疑問もなかったんだ。

勇者が、ここに来るまでは――

人は自分が幸福であることを知らないから不幸なのである。

(フョードル・ドフトエフスキー)

その日、僕のお城は慌しかった。

いつもは静寂に包まれている僕の部屋にも、何かが爆発しているような轟音や、金属のぶつかり合うような音、そして怒鳴り声が、遠くから聞えてくる。

なんだろうと思いバルコニーから眼下を眺めてみると、僕が見た事も無いような大勢の人間が、お城に雪崩れ込んでくるところだった。

人間は皆、鎧兜を身に纏い、手に手に剣や槍を持ち、雄叫びを上げて突進している。

あ！ あの馬に跨っているのは『騎士』っていうんだったなあ。

ケイオスに教えてもらったから、間違いない。

彼らは特に、強くて誇り高いんだ。僕が密かに憧れている存在だ。

そんな彼らを、僕の仲間たちが押し返そうとしているようだ。

僕の隣で同じようにその様子を見下ろしていたケイオスが、「むう」と唸って踵を返す。

僕はケイオスに問いかけた。

「なんで彼らを素直に通さないの、ケイオス？」

「これはそういうゲームなのです」

ケイオスは振り返りもせずそう言うと、そのまま部屋の大扉から出て行った。

「なんだか楽しそうだなあ。みんな、僕に会いに来てくれたんだあ」

つい口をついて出た独り言に、頬が緩んだ。

僕は、ワクワクしながら自分の椅子へと勢い良く座った。

「そうだ。この部屋って、彼らから見たらどうなんだろう？」

僕は部屋を見回した。

ほぼ正方形のこの部屋は、僕が全力で走っても、端から端まで二十秒はかかる。

積み上げられて壁を構成する黒っぽい石は、一つ一つ、全てが人の顔のような表情を持っていて、一日中見ても飽きないくらいだ。

天井は僕が十人くらい肩車しても届かないだろうし、そこから何枚も引き降ろされている真っ赤な分厚い布は、端に金色のひらひらがくっついていて、凄く豪華だ。

ここは僕にとっては自慢のお部屋だ。

だけど、ここについての感想って、ケイオス以外に聞いたことが無いからなあ。

と、この部屋唯一の出入り口である大きな両開きの扉が開いて、そのケイオスが顔を出した。

ケイオスは一礼するとつかつかと僕の前まで歩み寄る。

ケイオスの、無駄無く流れるような所作に、僕はいつも見惚れてしまう。

「魔王様。ただ今、我が城に、勇者が潜入致しました」

ケイオスは僕の座る大っきな椅子の前で傳くと、いつもよりも更に堅い声色でそう言った。

「そっかあ。楽しみだなあ。ね、ケイオス。ゆうしゃって、僕の友達になってくれるよねえ？」

僕の問いかけに、ケイオスの肩がピクリと小さく波打った。

ケイオスは頭の両側から伸びる、長くて渦巻いた黄色い二本の角を揺らして顔を上げた。

白い顔と、清水のような青い髪。いつもは美しい彫刻のように崩れない表情が、悲しげに歪んでいた。

僕はそんなケイオスの瞳を見て、なぜだか急に不安を覚えた。

これ以上は無いと思える黒さの、足まで隠れる法衣を翻して立ち上がると、ケイオスは僕にこう告げた。

「魔王様。残念ながら、あなた様と勇者は、友達にはなれません」

それは“否定”の言葉だった。

僕は、僕の期待を裏切る言葉を、あまり聞いたことがない。

耳がおかしくなったのかな？

そう思い、僕は再度問いかける。

「ごめん、ケイオス。僕、今の、良く聞えなかったみたいだ。いい？ もう一回だけ訊くよ？ 僕、勇者と友達に……」

「なれません」

今度は、言い終える前に否定をされた。

それは氷のように冷たく、僕の胸に突き刺さる。

びっくりして見たケイオスの様子も、いつもの無表情には戻っているものの、なんだか全く隙が無い。

こんなに失礼な態度をとるケイオスは、今までの僕の記憶には無い。

勇者と出会える日を、僕はずうっと心待ちにしていた。ケイオスだって、そんなの知っているはずなのに。

僕は毎日毎日、この部屋にある魔水晶で、勇者たちの行動を見ていたんだ。

何を話しているのかまでは分からなかったけど、楽しそうに語り合ったり、激しく言い争いをしていたり、皆で歌を歌ったりしている彼らを、僕は羨ましく思っていた。

僕の話し相手って、ケイオスだけだったから。

一生懸命に僕の世話を焼いてくれるケイオスに不満は無いけれど、ああやって沢山の友達とも、僕は喋ってみたかった。

毎日毎日、危険な戦いや冒険に明け暮れる彼らを、僕は毎日毎日、ハラハラしたり、ドキドキしたりしながら応援していた。

実際、「もうダメだ！」って叫んじゃった事だって、何度もある。
でも、いつも彼らはそんな時、仲間と奇跡を起こしては切り抜けてきていたんだ。

彼ら勇者の一行は、そんな危険を冒してまで、僕に会いに来ようとしてくれていた。

命の危険を顧みず、時には仲間の犠牲すらをも乗り越えて。

僕はそんな彼らに、いつも心震わされ、泣いたり笑ったりしてきた。

もう、僕も勇者の仲間なんじゃないかって、そう思えてしまうくらいに。
だから、いつも応援していた。

——なのに、友達には、なれない？

勇者や勇者の仲間って、僕に会いたいんじゃないの？

友達になる為じゃなかったら……。

じゃあ、彼らは一体、何の為にここに来るの？

幾多の苦難を、屍を踏み越えてまで——

いつの間にか自分の尖った靴を瞬きもせずに見ていた事に気付いた僕は、ケイオスに訊ねようと顔を上げた。

けど、
「あ、う……？」

ケイオスは、先ほどと全く同じ態度を保ち、毅然として立っていた。怖い。

話しかけちゃいけない雰囲気だ。いつものケイオスじゃ、無いみたい。でも、訊かなくっちゃ。そんなの、全然分からない。全く納得出来ないよ。

「な、なんで友達になれないの、ケイオス？ 勇者たちって、僕に会いたいんじゃないの？ 仲良くなりたいんじゃないじゃなかったら、彼らは一体、何の為に、僕に会いに来るんだよう？」

初めて出した大声は、この部屋の石壁に跳ね返り、何度も鼓膜を揺らして来る。自分で自分の声に驚く。僕の声は、低くて、重い。僕はこの声が好きじゃない。

「……それは、魔王様が聞く必要の無いことです」

「ただ。信じられない。ケイオスが、僕に……僕の希望に、背くなんて！
「ただ今の報告は、魔王様のお覚悟が為。質問を受け付ける為ではありません」

「覚悟？ 覚悟って、なに？」

法衣から差し出した、長い爪の生えた右手を胸に当てると、ケイオスは頭を下げた。

「私はこれより、勇者パーティーの迎撃に向かいます。ここに勇者たちが来ることはありますまい」

げいげき？ なにそれ？ そんな言葉……。

人間同士の、戦争でしか聞かないよ！

「彼らは、死にます。従って、ここには来られません。魔王様には、さぞ悲しいことだろうとは存じますが、ご容赦下さいますように」

「なっ……」

僕が抗議しかけるのを、ケイオスは片手を挙げて遮った。

「私がここに、もう一度戻れたのであれば、いかような処分も受けましょう。殺していただいても構いません。ただ、勇者は私が殺します。この命に代えても、です。決して魔王様には近付けない」

ケイオスは言いながら漆黒の法衣を翻し、僕に背を向け歩き出す。広がる法衣はほどなく後ろに靡き、この部屋の出口に向けて、僕から徐々に遠ざかる。

「……お覚悟を」

それは、自分に向けてでもあったのかも知れない。苦しげに響く言葉を

残し、ケイオスは僕の視界から消えていった。

僕はその後姿の残像に、底知れない不安を覚えた。

ねえ、ケイオス。“戻れたならば”って、どういう意味？

「そうだ。魔水晶で……」

真っ赤な布で覆われた、髑髏やら蝙蝠の羽やらで飾られた椅子から降りた僕は、部屋の片隅の、大理石で出来た小さな丸テーブルに置かれている、魔水晶へと駆け寄った。僕は一点の曇りも無い、真球のそれへと手を翳す。「ケイオス！」

青白い光を発して魔水晶が映し出したものは、勇者とケイオスが、この城内の廊下で戦っている所だった。こんなに荒々しいケイオスを、僕は知らない。

ケイオスから発する目も眩む稲光が、勇者たちに襲い掛かる。勇者はそれを、美しい輝きを放つ丸い盾で弾いていた。勇者の後ろから、仲間の一人が火炎を飛ばす。それを受けたケイオスが後退る。その隙に、勇者が剣を振り下ろす。ケイオスはそれを、間一髪でかわしてゆく。

ケイオスが放つ沢山の雷が、勇者の仲間の一人を撃った。それを白い法衣に包まれた仲間が助け起こす。白い法衣の男は、傷ついた仲間に魔法をかけた。すぐに倒れていた仲間が元気に立ち上がる。

勇者の仲間は四人いる。対するケイオスは一人。五対一だ。

なんで戦うの？ どうしたの、ケイオス？ そんな必死な顔、見たこと無いよ！

「ひどいよ！ 皆で寄って集ってケイオス一人を！ ケイオス！ ケイオスッ！」

みるみるボロボロになってゆくケイオスに、僕はあらん限りの声を出し、叫び続けた。

あんなにされたら死んでしまう。僕にだって、それぐらいは分かる。死んじゃったら、もう会えない。もう、二度と話せない。いやだ！ ケイオスがなくなるなんて！ 僕、ケイオスに「ありがとう」って、言って無い！ 今まで一度も、言って無い！

「待ってて、ケイオス！ 今、僕が助けに行くからね！」

僕は部屋の出口に向かい、硬い石床を蹴った。わずか二十歩ほどで辿り着けるはずの出口が、やけに遠く感じる。

もどかしい。もどかしいよ！ くそうっ！ それでも出口はもうすぐだ。巨大で重厚な扉だけど、僕にだって開けられるはずだ。

僕はライオンの頭を象ったドアノブに手をかけた。

「あっっ！」

突然、ドアノブを握った手に、猛烈な痛みが走った。僕は反射的に手を放す。

とてもじゃないけど、握ったままではられない！

「な、なんで？」

分からない。僕はこの部屋を出ようと思った事が無い。だから、このドアノブだって、握ったことなど無かった。僕は魔水晶へと視線を投げる。そこに映っているケイオスは、もう今にも力尽き、倒れそうに見えた。

「ケイオス……！ なんでこんなに痛いのか分からないけど、これを、このドアノブを回さなくっちゃ、この部屋から出られない！ ケイオスを助ける為には、痛いなんて我慢しなくっちゃ！」

僕は自分にそう言い聞かせ、意を決してドアノブへと手をかけた。

「うあっ！」

再び襲い掛かる激痛。

でも、この手は離さない！ 絶対に、離さないっ！

「あっ！ 手、手がっ！」

手からは白い煙が立ち上り、尚且つ勝手に離れてゆく。手が、勝手に開いてゆく。自分の意思に、関係なく。

「なんで！ どうしてなんだよお！ くそっ！ いう事をきいてくれ！

僕の手よ！」

痛くても、もう使えなくなっても構わないんだ！ お願いだ！ 僕の手よ、頑張っ！ 会うんだ、ケイオスに！ もう一度会って、「ありがとう」って……「ありがとう」って、伝えるんだ！

「がん、ば、れええっ！」

叫ぶと同時に、部屋が真っ赤な光で満たされた。光は魔水晶からだ。魔水晶が、光の洪水を引き起こしている。

「ううっ」

右手に左手を添え、ドアノブへと押し付けつつ光を見る。目を開けていられないほどの光に、網膜が焼け付く。

しかし、それはすぐに収まった。

魔水晶が光を鎮め、その後の廊下の光景を映していた。僕はそれを見て絶句した。声も出ない。力が抜け、ドアノブに弾かれた僕は、部屋の床に尻餅をついた。

「ケイオス……」

ケイオスは、勇者の剣に胸を貫かれていた。

剣は壁にまで達し、ケイオスを磔にしている。ケイオスの目は、閉じていた。その白い顔は、まるで眠っているようだ。

その前では、勇者が膝を付き、肩を激しく上下させていた。勇者の仲間、皆倒れ、ピクリともしていない。頭を、胸を掻き毟り、大きく開いた勇者の口は、何かを叫んでいるようだ。苦しげな彼の姿を見て、僕は突然理解した。

これが、“死”というものなんだ、と。

勇者の仲間四人を、ケイオスが道連れにしたのだと。勇者が泣いている。僕も泣いていた。魔水晶に、すがるようにして泣いていた。僕たちは、今、同じ気持ちでいるんだろう。大事な友達を失った勇者の気持ちは、きっと僕と同じはずだ。この気持ちを何と呼ぶのか、僕は知らない。こんな気持ちになったのは、生まれて初めてなのだから。

どれくらいの間、そこにいたのか。

勇者はフラフラと立ち上がると、ケイオスを磔にしていた大剣を無造作に引き抜いた。支えを失ったケイオスが、糸の切れた操り人形のように、床に崩れ落ちてゆく。勇者はそれを一顧だにせず、廊下を先へと進みだした。溢れていた涙は、もうなかった。彼の頬に、その形跡だけを残している。

彼の瞳には、強い光が宿っていた。

僕はその様子を、涙で曇った視界で見続ける。

勇者は、ここに来るのだろうか？ 彼は今、何を考えているのだろうか？

僕はまだ、彼と友達になりたいのだろうか――

「うわあっ！」

突然、部屋の扉が砕け散った。破片が散乱し、その一部が僕を叩く。

「……やっと、辿り着いたぜ……」

もうもうと舞う塵埃の向こうには、その表情に鬼気を宿した勇者が立っていた。

「勇者だあ……」

いつも魔水晶ごしに見ていた彼が、目の前にいる。不思議な感覚に、浮き上がるような気分になった。でも、すぐにケイオスが脳裏を過ぎり、その気持ちを打ち消した。

「お前が『魔王ディアボロ』だな！」

それは乱暴な呼びかけだった。僕はこんな風に自分の名前を呼ばれた事が無い。

ちょっと怖いけど、返事をしなくちゃ。

「うん。キミは、『勇者ウィル』だね？」

僕は立ち上がって答えた。

ちょっと小さな声だけど、この部屋は音が響くし、大丈夫だよね？

「ん？ ああ、そうだ。知っててもらえて何よりだ」

勇者の口端が大きく吊り上がり、それにつれて目つきも鋭くなった。目に眩しい銀の甲冑に包まれ、紅蓮のマントを翻し、金色の大剣を担いだその姿は、僕がいつも憧れていた勇者そのものだった。

天に逆立つ真っ赤な髪と、炎のような真紅の瞳。細めなシルエットなのにしなやかな強さを感じさせる、均整のとれた体形。

「ふん。“勇者”ってのは自分で言い出したわけじゃないから領けねえが、ウィルってのは間違いねえ。俺は、ウィル。ウィル・ハーバーライト、だ」

強い口調。芯のある、低い声。凄く強い気持ちを、僕は感じた。

ウィルに会ったら話したかった事が沢山ある。訊きたいことだって、いっぱいあった。けど、いざ目の前にしてみると、どれも口から出てこない。頭の中でいろんな事が混ざり合って、言葉に出来ない。

そんな思いに固まっている僕に、ウィルの言葉が衝撃を与えた。
「初めましてなのに、いきなりで悪いがな。早速、お前にや死んでもらうぜ」
ウィルはそう言って、剣の切っ先を僕に向けた。
死んでもらう？ それって、僕を殺す、ってこと？ いつもケイオスが
言っていた、冗談ってやつかな？ でも、ウィルの顔、ちっとも笑ってない。
顔が、怖い。

「な、なんで？ なんで、僕が……？」

あまりのことに眩暈がした。
「なんで、だと？ 『僕』だって？ 俺が思っていた『魔王』と、えらくイメージが違うな。お前、本当にディアボロか？」

コクコクと頷く僕に、ウィルは更に驚くような言葉を口にした。
「まあ、姿形はイメージ通り。ごつくてでかくて醜悪で、まさしく『魔王』
としか言いようが無い恐ろしさ、だけどな」

「えっ……？ 僕が、醜悪……？ 僕が、怖い……？」

僕は慌てて顔を手でなぞった。
僕が大きいのは、ウィルを凄く見下さないといけないくらいだから分かるけど。魔王としか言いようが無い？ それって一体、どういう事？

「なにをそんなに驚いていやがる。すっとぼけやがって。俺の戦意を削ぐのが狙いか？ 魔族ってのは狡賢いもんな。その王様ともなると、やっぱり演技力も並外れてやがるぜ」

ウィルはそう言いながら床に唾を吐いた。
なんだろう、この違和感。全然意思が伝わらない。言葉は同じはずなのに、全く“心”が、通じない！

ウィルと僕の間には、まるで見えない壁があるみたいだ。目の前にいるのに、物凄く遠くに感じる。

「勇者様！」

「ここでしたか、ウィル殿！」

「おお、こ、これが魔王！　なんと禍々しい怪物だ！」

僕が絶句していると、破れた扉の向こうから、次々と人間たちが入って来た。入ってきては僕を見上げる二十人ほどの人々。皆、ボロボロだ。壊れた甲冑に折れた剣。あちこちから血が出てる。荒い息遣いと共に放たれるのは、僕に対する呪いの言葉。彼らから僕に届くものは、“憎悪”と“悪意”しか無い。

苦しい。苦しいよ……っ。

「へっ。とうとうアーク公国の正騎士様たちまでが辿り着いてきやがった。覚悟するんだな、魔王ディアボロ！」

ウィルは左手で鼻を擦ると、右手の剣を僕に向けた。

ここで、ようやく僕は気が付いた。

自分が、嫌われていることに。

皆、僕に会いたかったわけでも、友達になりたかったわけでもなかった。彼らは、僕を倒すため、ここに来たんだ！　でも、理由が分からない。僕が一体、何をしていたというんだろう？　そうだ。ケイオスが言っていた。「分からない時は、訊くことです」と。

「ま、待って！　皆、ここに何しに来たの？　なんで、僕は憎まれているの？」

「はぁ？　ふざけるなぁっ！」

「うっ」

部屋中に轟いたウィルの怒声が、僕の肩を竦めさせた。

「この国に蔓延る魔物どもを操っているのは、お前だろうがっ！」

えっ？　『魔物』？

聞き覚えの無い単語に戸惑っていると、ウィルに大声で怒鳴りつけられた。

「あの魔物どものせいで、どれだけの人間が死んだと思っていやがる！」

女子供はおろか、大の男だって、うかうか外も出歩けねえ！　畑を耕すにも、商いをするにも、いつもビクビク怯えながらだ！　昼も夜も、やつらは容赦なく俺たち人間を襲う！　妻を、家族を、恋人を……大事な人を失う辛さが、お前に分かるかっ！」

凄い声だ。お腹にビリビリ響いてくる。でも。

「そ、それが僕と、何の関係があるんだよお！」

僕は力いっぱい叫んだ。

その後の皆の反応に、僕はただただ驚いた。皆、僕を見つめて動かない。

ウィルも剣を下げ、表情を無くしていた。

静かだ。この反応は、何？

「……ウィル殿。最早、話すことなどありますまい。相手は、『魔王』。人を誑かすなど、容易いこと」

「そうだな。もしかしたら、魔軍参謀ケイオスを討たれたことで怖気づき、戦いを回避しようとしている、という事も考えられるよな」

白く長い髭を伸ばした初老の騎士に同意すると、ウィルは剣を握りなおした。

「ち。俺だって、ここまで来るのに仲間を何人も失ってんだ。今更、『何かの間違いでした』なんて、ごめんだぜ」

誰も、僕の言う事を信じていない？

言葉の意味は完全に理解出来ないけど、態度や行動からそう感じた。

「お喋りはここまでだ！　いくぜ、みんな！」

「おおおおっ！」

ウィルの掛け声で、人間たちが剣を一斉に振り上げた。

その切っ先はどこに振り下ろすの？　僕？　僕、なの？　苦しい。また、視界が滲んでくる。この気持ちは、何？　誰か。誰か、教えてよお！「うわあああっ！」

沢山の剣が僕の体に突き刺さる。

「止めて！　止めてえっ！」

痛くて痛くて叫んでも、僕への攻撃の手は全く緩まない。槍も矢も、何度も何度も飛んでくる。

「誰が止めるか！」

「おおっ！　平和の為、死んでもこの剣を止めはせぬ！」

「飛び散る魔王の血に気をつけよ！　触れると溶けるぞ！」

僕の血が、床に、壁に、ついには天井にまで飛散した。初めて目にする僕の血は、付着した所で白煙を上げた。僕は体を丸めて床に蹲り、皆が止めてくれることを祈っていた。

いた、い……。いたい、よお……。

「なぜ無防備に攻撃を受け続けるのだ、この怪物？」

「それより、どれだけ斬れば死ぬんだ、コイツはっ」

「考えるな！　無心に我武者羅に切り刻め！　魔王だって斬れば血も出る、弱りもする！　不死の生物などいないんだ！」

ウィル。ひどい、よ。それが分かってて、まだ僕に斬りつけるの？　僕は、キミが大好きだったのに。

僕は、そんなキミに殺されるんだね――

僕の意識が悲しみに沈んでゆこうとした瞬間、思いがけない事が起こった。

「うおっ！」

「なんだ、この光はっ！」

「眩しい！ 皆、気をつけろ！」

突如、真っ白な光が部屋に満ちた。

「これは？ 魔水晶？」

薄目を開けて必死で見ると、光は魔水晶から溢れていた。透明な球体に過ぎなかった水晶は、光に溶けるようにその姿を変えてゆく。

「その気持ちは、『悲しい』、そして、『悔しい』というのだ。魔王」

「えっ？ ま、魔水晶、なの？」

光が収まった後には、いつか絵本で見た、天使に似たものが立っていた。

「なんだ、あの女は？」

勇者ウィルが、大きく目を見開いた。

人生とは面白いものです。何かひとつを手放したら、それよりずっといいものがやってくるものです。

(ウィリアム・サマセット・モーム)

「全く、愚かな人間共め。そして、無知すぎる魔王め。ああ、イライラする。イライラして仕方が無いぞ」

透き通るような肌が覆う細い体を、真っ白でふわふわとした布が、胸と腰の辺りだけを隠している。小さな顔にかかる、絹糸のようにキラキラとした長い髪を払いのけ、ガラスのような瞳が僕を見つめている。その背中からは、純白の翼が広がっていた。

「ば、馬鹿な……。正気か、貴様？」

「え？ あ！ ケ、ケイオス！」

聞き慣れた重い声の主は、死んだと思っていたケイオスだった。ケイオスは、破壊された扉の所で、壁に背を預けて立っている。お腹を押さえている手からは、ポタポタと青い血が滴っていた。

「やはり。まだ生きていたか、ケイオス」

天使はそう言って鼻で笑うと、

「ふん、正気か、だと？ 正気であれば、私が姿など現すものか。おかしくなったからここにいる。そんな事も分からんのか？ 貴様がそんな有様だから、人間などに遅れを取るのだ」

ケイオスの生存を喜ぶ隙も与えられず、翼を持つモノが冷たい言葉を紡いでいった。

見た目は美しいのに酷そうなヒトだ、と思う。

「なんだと？ あれだけやって、まだ生きてんのかよ！」

「落ち着きなされ、ウィル殿！ ケイオスなど、あの負傷では、最早戦う力などありませんまい。生きていだけでありましょう。それより、あの白い女が気になります。人間では、よもあるまいが……。魔族にも見えぬ」

すぐにでもケイオスに斬りかかろうとするウィルを、白髭騎士が押し留めた。何が起きているのか分からず、人間たちは僕とケイオス、そして白い翼を持つモノを何度も見遣り、混乱している。

それは、僕も同じだった。

「だ、誰？ 魔水晶、なの？」

僕は素直に訊ねた。

「ん？ ああ、そうだ。私は、クリス」

そう答えると、翼を大きくはためかせ、

「私は『第一世界』の天使長、クリス・クロスという者だ」

両手を腰に、胸を張った。

「なんだ、『第一世界』って？ 天使長、だと？ ここは魔王の居城だぜ。天使ってのは、神様の使いじゃねえのかよ？」

明らかに異質な空気を放つクリスに対しても、ウィルにはまるで臆する様子がない。僕はそんな彼を、いつも凄くと思う。どんなに巨大な敵が現れても、彼はいつも変わらないんだ。

「勇者ウィル・ハーバーライトか。は。何が『勇者』だ。笑わせる」

宙に浮かび、ウィルを見下ろす視線には、明らかに怒りがある。僕を叱る時のケイオスよりも、遥かに怖いと思った。

「んだと？ なんなんだ、てめえ。魔王討伐の邪魔をするってんなら、てめえも一緒にブチ殺すぜ」

ウィルから殺気が立ち昇る。構えた剣が煌いた。

「身の程知らずとは幸せなことだな。好きにするがいい、ウィルよ。私の姿を見た以上、貴様らに助かる道は無い。必死で抵抗することだ」

「な！ ま、待て、クリス！」

ケイオスが一步足を踏み出した。

「待つ理由は無い」

冷たい壁を思わせる言葉を発すると、クリスの背にある純白の翼から、無数の光り輝く羽が四散した。

「うおっ！」

「ぐあっ！」

「ぎゃあっ！」

それらはクリスを取り囲むようにしていた人間たちを、悉く貫いていった。鉄の鎧もまるで役には立っていない。ばたばたと倒れ行く人間たちの中で、最後まで立っていたのはウィルだった。

「ほう。さすがは『カイロスの盾』だな。私の羽を受け、傷一つ無いとは」

ウィルは左腕に嵌っている小さな丸い盾で、クリスの攻撃を防いでいた。でも。

「が、その盾の弱点は、小さすぎる所だ。今のような広範囲、そして同時に迫る脅威は、完全に防ぐ事が出来ない」

「うぐ……」

ウィルは両膝を折ると、床に這い蹲った。盾に守られていた頭や胸には大きな怪我が無いけれど、それ以外の足や肩から、沢山の血が流れ出ている。

凄く。あんなに強いウィルを、一瞬で。このヒト、何者なんだろう？

「苦しかろう？ だがな、この馬鹿が感じた痛みは、その程度ではない。体の痛みだけでは無い。心の痛みにしても、だ」

クリスはそう言いながら僕に視線を送った。

馬鹿って、僕のことなの？

「な、なん、なん、だ？ お前は、一体……？」

「知る必要は無い」

苦しげに床から顔を上げるウィルに向け、また翼が煽られようとしている。

またあの羽を飛ばす気だ！

「むっ。なんの真似だ、馬鹿者め」

気付けば、僕はウィルの上に覆いかぶさっていた。

「や、やめてあげてよ……」

僕は恐怖に耐えながら、言葉を搾り出した。

「なんだと？」

クリスの高く美しい声が、僕の鼓膜を揺らした。その声は、きれいなのに怖かった。

「ウ、ウィルは、ここまで、凄く頑張ってるんだ。友達もたくさん亡くしたし、いっぱい泣いたりしてた。キミは、それを知ってるの？」

「無論だ」

無感情な声だ。やっぱり、怖い。

「勿論、理由だって知っている。貴様こそ、ソイツが何をしに来たか、本当に分かっているのか？」

僕は無言で頷いた。

「ならば、なぜ庇う？ 貴様はソイツに殺されてもいいというのか？」

僕はぶるぶると首を振った。

「では、そこをどけ。大体、貴様が本気で戦えば、そんな人間など一ひねりなのだ。が、そうする気がなさそうなので私が出た。私は、貴様を助けてやろうとしているのだ。それくらいは分かるだろう？」

僕はぶるんぶるんと縦と横に首を振り、ウィルをきつく抱き締めた。ウィルの荒い息遣いが耳元で聞える。

「どっちだ、その反応は？」

「ど、どくのはイヤ。キミが僕を助けてくれているのは、分かるよ」

クリスはしばらく僕を無言で見つめ、

「はあ」

と大きなため息をついた。

「ま、魔王……？」

横顔に、ウィルの視線を感じる。

「では、好きにするがいい。その傷では、どうせもう長くはない。ケイオス」

クリスに呼びつけられ、ケイオスが足を引き摺りながら近付いて来た。

「私はここから、この馬鹿を連れ出す」

「本気か？ 何をしようとしているのか、分かっているのだろうな、クリス？」

ケイオスの頬に汗が伝う。その血走った目に、僕は言い知れない不安を覚えた。

「はっはっは！ 当然だ！ 私はな、もうあのクソジジイ……と、言っても通じんか。あの“神”には従えん。このやり方は、間違っている。もー、我慢できんのだ！ 貴様とて、そう思っているのだろう？ ケイオス」

「クリス……」

ケイオスの赤い瞳が潤んでいる。

なんの話をしているんだろう？ 僕を、連れ出す？ この城から？

「ふ。ははは。よし。お前に任せよう。どうせ私も直に死ぬ。魔王様に仕

えて二百年。お前が魔王様を解き放ってくれるのであれば、もう、思い残すこともない。すっきりとした気分で旅立てるといふものだ。はははははは」

ケイオスは口から溢れる血を拭おうともせず、愉快そうに笑う。そして、「魔王様。不肖ケイオス、勝手ながら先立たせて頂きます。長い間、お世話になりました」

と、ウィルを抱えたままの僕に、笑顔に向けた。

初めて目にするケイオスの笑顔。

それは、凄く優しいものだった。

「ケ、ケイオス」

僕はケイオスへと手を伸ばした。

「勇者よ」

ケイオスは、なんといいか分からずに伸ばした僕の手をしっかりと握ると、ウィルへと声をかけた。

「魔軍参謀、ケイオス……が、そんな、優しい、声を、出せる、なんて、な。てめえの操る魔王軍にや、散々な目に遭わされてきたって、いう、のに、よ」

強がっているのか、にやりと笑みを浮かべるウィルの声は、途切れ途切れだ。

「ここまで辿り着いたのは、お前が初めてであり……私を倒したのも、そう。お前は、良くやった。胸を張って逝くがいい」

「ち。あの世で自慢したって仕方ねえ、ぜ。俺には……」

「あ！ し、知ってるよ、ウィル！ 妹でしょう？ 妹に、凱旋した姿を見せたかったんでしょ？」

この辺りのウィルの気持ちについては、以前ケイオスに説明してもらっている。

ウィルにはたった一人の肉親である妹がいる。その子は、アーク公国の辺境『アルクデスタ』で、ウィルの帰りを待っているはずだ。ウィルは驚いた表情を浮かべ、僕を睨み付けた。

「なんで、てめえは、俺の事を、そんなに知って、いやがる？ なんで、俺、を、庇う？」

「えっ？ あ、ぼ、僕は……」

「その馬鹿は、貴様と友達になりたかったのだ。貴様の事が、大好きなのだ」

しどろもどろになる僕の代わりに、クリスが答えてくれた。

「なんだって？」

「笑わせるだろう？ 自分を殺そうとしている貴様を、その馬鹿は心待ちにしていたのだ。水晶珠であった私を通じ、いつも貴様らの行動を観ていたのだ。貴様らの事で、毎日毎日、一喜一憂してな。それを間近で見ている私は、その都度呆れていたのだが」

ウィルはクリスの話を聞き終え、「そうか。だから、抵抗しなかったのか」と、呆然として呟いた。

そして、

「俺は、ひどい事をしたんだな……」

そう言って、項垂れた。

「知らなかったんだから、仕方がないよ」

「え？」

僕は俯いたウィルを覗き込むようにして言葉をかけた。ウィルの見開いた目が、僕を映す。巨大な角と、大きな口から飛び出す牙を持つ僕が、そこにいた。散々斬られて出来た傷も、いつの間にか、すっかりきれいに治っている。

これが、僕？

「はあ。それがその愚かな人間を庇う理由か」

クリスは僕の思いを理解してくれているようだ。でも。

「ふん。姿が禍々しいからと、一方的に『悪』とするのが、貴様らだ。例えば事前に教えられたとて、容易には信じまい。それが“人間”なのだからな」

衝撃に脳が痺れて、クリスの言葉もよく聞き取れない。

ナニコレ？ こんな姿じゃ、怖がられて当然だよ！

僕は、怪物だったんだ！

自分の姿を映せる鏡という物の存在は、魔水晶で見て知っていた。興味を持った僕は、今まで何度と無くケイオスにおねだりしていたんだ。でも、ケイオスはそれを絶対にくれなかった。

ケイオスは、自分の姿を見た僕がショックを受けるって、分かっていたんだ！

「この馬鹿をこんな姿にしたのも貴様らだ。そんな事も知らず、『魔王を倒せば平和になる』、か？ 馬鹿がっ！ どいつもこいつも馬鹿ばかりだ！

もう、こんな『第二世界』など、どうなっても知るものか！ 私はこの馬鹿を連れ出す！ この馬鹿を、“幸せ”にせねば気が済まぬ！」

クリスは動揺する僕に気付いた様子も無く、ただただ気持ちを吐き出している。僕の為に怒ってくれているのは、なんとなく分かった。でも、僕がこんな姿になったのは「人間のせい」って、どういう事？

「がはっ！」

「あっ！ ウィル！」

疑問が渦巻き始める僕の頭を、ウィルの吐血が遮った。

「大丈夫、ウィル！ しっかりして！ 妹が待っているんでしょう？ 死んじゃあダメだっ！」

僕はウィルの背中をさすった。他にすべき事を知らないんだ。

でも、鎧が邪魔だ。外さなくちゃ！

「ああ。どうやったら外せるの、これ？　まずい、まずいよ！」

慌てる手がただ彷徨う。僕はケイオスに助けを求めた。

「助けて、ケイオス。ウィルを、助けて」

「無理でございませぬ、魔王様……。申し訳ございませぬが、その者の怪我を治せるならば、まず自分の治療をしております」

そうか。僕は馬鹿だっ。

あ。じゃあ、クリスは？

もしクリスに治療する力があれば、二人とも助かる！

「クリス？」

「誰が名で呼ぶ事を許した？　私に助けを求めても無駄だ」

冷たい視線に絶対的な“拒否”を悟った。

「ううっ。どうしたらいいんだ。どうしたらっ……」

僕は自分の無力を痛感し、絶望に身を振った。

「はっ。はは……。まさか、倒しに来た魔王に介抱されるたあな。いいんだ、魔王。もう、いいのさ」

ウィルは僕の腕を握ると、血に汚れた口を歪め、笑おうとしているようだ。

「何がいいんだよ！　死んだら終わりでしょ？」

「まあな。でもよ、もう助からないって分かれば、それでも終わり、さ。最後まで生きようとするのも悪くない。が、俺には今より数分、命を延ばすことよりも、大事なことがあるからさ」

呼吸の音が少し高くなってきた。ヒューヒューと鳴る喉が、僕を切迫した気持ちにさせる。覚悟を宿したウィルの瞳に、僕はもう、何も言えなかった。ウィルは、僕に何かを伝えようとしている。そう感じた僕は、ただゆっくりと頷いた。

「なあ、魔王。殺しに来るとして勝手なのは承知なんだが、頼みたい事がある」

「何？　いいよ。なんでも言って、ウィル」

「安請け合いを」と言いたそうなクリスの苦い顔が、視界の端に入った。

「妹を、シャルルを、頼む」

「……へ？」

僕はたじろいだ。確かに「なんでも言って」とは言ったけど。

それは頼まれても、どうしたらいいのか分からないよ！

「任せておけ。魔王様なら、きっとなんとかかしてくださる」

「え？」

力強く言い放つのは、ケイオスだった。

「そうだな。この馬鹿ならば、きっとどうにかするだろう。とりあえずは、この城から出るところまで、私が間違いなく見届ける。安心して死ぬがいい」

追い討ちするかのような言葉は、クリスだった。

なに？ そのサディスティックな笑み。
顔に「ざまあみろ」って書いてあるよ！

「ち。てめえに言われても素直に安心できねえが……。仲間も全員逝っちゃったしな。託せるのが魔王だけとは、笑える、ぜ。うぐっ」

「ウィル！」

ウィルの口から、大量の血が吐き出された。目も虚ろだし、体が冷たくなってきたみたいだ。

どうしよう、どうしよう！ 僕に今、出来ることは？

「しっかり、ウィル！ うん。うん！ 妹は、僕に任せて！ シャルル、だよな？ きっと、きっと僕が、なんとかするから！ 伝えることがあれば言って！」

やっぱりこれしかないよ！

助けられないなら……。せめて、せめてこれぐらいはしてあげたいよ！

「は、はは。これが、魔王？ こんなに優しい魔王なんて、あるのかよ？

俺は、俺は一体、なんのために、ここまで……」

ウィルは自虐気味に笑うと、腕に嵌っていた丸い盾を外し、僕に渡した。装飾の美しい、銀色に輝く小さな丸い盾だ。

「これ？ カイロスの盾、だっけ？」

僕はこの行動に対するウィルの真意を訊ねた。

「ああ。それは親父から受け継いだモンだ。シャルルにそれを見せれば、きっとお前の言う事を信じてくれるだろ」

小刻みに震えながら話すウィルを、クリスもケイオスも身じろぎもせず見つめている。

「シャルルに、こう伝えてくれ。『ごめん。先に逝く。お前は、元気で……』、がは、げふ」

「ウィル！」

「……幸せ、に、なって……くれ……」

そこまで話し、ウィルの瞳が静かに閉じた。

握っていた手の力が抜けて、僕の手をすり抜ける。

僕の腕の中でウィルの顔が力なく横を向き、だらりと下がった。

「ウィル？」

僕は呼びかけた。

「ウィル」

僕はウィルを揺すってみた。

「ウィル————！」

僕は大声でその名を叫んだ。

ずしり、と腕に重みがかかった。

瞬間、僕は理解した。

この重さが、“死”なのだ、と。

ぼとぼとウィルの顔に落ちているのは、僕の涙なのだろう。

僕はウィルを濡らすのが嫌で、彼を胸に掻き抱いた。

辛い。

苦しい。

これも、“悲しい”？

こんなに嫌な気持ちがあるなんて。

「立て、魔王。悲しんでいる暇などない」

「えっ？」

唐突な声に顔を上げると、腕を組んで僕たちを見下ろすクリスがいた。

「悲しんでいる、暇が、無い？ そんな。ひ、ひどいよ、クリス。暇だから悲しむわけじゃあ、ないでしょう？」

クリスの言葉に、余計に涙が溢れた。

「……魔王様。お気持ちお察ししますが、今はクリスに従ってください。こやつとて、こんな事を、言いたくて言っているわけでは、ありません……」

ケイオスが荒い呼吸を繰り返しながら、僕の側へと膝を付いた。

「ケイオス。でも。だって」

「だってではない。直にクソジジイもこの異変に気付くだらう。そうなれば、貴様はこの城から出られなくなる。シャルルにも会いには行けんぞ。いいのか？ ウィルと約束したのだから？」

う。そうなんだ。

でも、なんでだろう？

なぜ僕は、ここから出られないんだらう？

扉の取っ手にも拒絶されているようだった。

「ああ。そんなに不思議そうな顔をするな。ここから出たら説明してやる。今は、一刻も早くここから脱出することだ」

そう言うと、クリスは白くて大きな翼を一振りし、僕の腕を掴んだ。拍子にウィルが僕の腕から零れ落ち、床に転がる。

「ま、待て、クリス。外の世界に行くのに、魔王様はその姿のままでは都合が悪かろう？」

今にも飛び立たんとしているクリスを、ケイオスが腕を伸ばして引き止めた。

「む？ なるほど、そうかも知れん。私としたことが、迂闊だった。しかし、だからどうする？」

「私に任せてくれ。どうせ死ぬ身だ。魔王様が溜めた《穢れ》は、このケイオスが引き受けよう」

「なんだと？」

ケイオスの発言に相当驚いたのか、クリスの目が大きく見開かれた。

なんだろう？ 《穢れ》って？

「では参る。『過去より現在、人世に渦巻きし《穢れ》たち。寄り代離れて我に寄れ。全ての《穢れ》よ、ケイオスに来たれ』！」

「うわあっ！」

次の瞬間、ケイオスの手が僕に翳されると、辺りに真っ黒な闇が飛び出した。

なんだ、これ！

ぼ、僕の体から、沢山の《闇》が流れ出て行く！

うわ、わ。引っ張られる。ケイオスに、引っ張られる！

「わあああああああ！」

自分の体の中身を引きずり出されるような感覚に、僕は思わず声を上げた。

「ケイオスッ！ 馬鹿がっ！」

クリスは白い翼で身を包み、《闇》を弾いているようだ。

その腕はしっかり僕を掴んでいる。

でも、足は床を離れて、ケイオスの不思議な力に引かれている。

倒れていたウィルや騎士たちが宙に浮き、回りながらケイオスに吸い寄せられていく。

「ぐお、あ、うあ、あああああ！」

「ケイオスーーーーー！」

ケイオスはみるみる体を膨らまし、巨大な風船のようになってゆく。

ケイオスはそのままあつと言う間にこの部屋を満たし、そして、

「がっ」

短い断末魔の声を上げた後、小さな黒い点となって消滅した。

「ケイオスッ……」

クリスは苦しそうにその名を呟いた。

ケイオスはどうなったんだろう？ 一体、どこに行ってしまったんだろう？ クリスは、ケイオスの何なんだろう？

歪むクリスの表情を、僕はそう考えながら見つめていた。

それにしても、部屋の雰囲気はかなり変わったように思う。外の光が真っ直ぐに入ってきているのか、今まで薄暗かったこの部屋は、相当明るくなっている。今までここが暗かったのは、僕から飛び出した、あの《闇》のせいだったんだろうか？

「あれ？」

ふと、体が揺れているような感覚がして、僕は辺りに配っていた視線を床に投げた。耳を澄ませば、低く重い音が小さく聞こえる。

「まずいな。もう気付かれたか」

クリスにもそれが分かったらしい。さっきより更に怖い顔になっている。

「急ごう。手をよこせ、魔王……っ！」

「ん？」

クリスの差し伸べられた手が、ピタリと止まった。

ど、どうしたんだろ、クリス？ そんなに大きくなった目で見られたら、僕、どうしたらいいのかわからないよ。

「……ディアツ……！」

「わ？ わ、わわっ？」

戸惑っている間に、僕の体はクリスに抱き締められていた。

真っ白な翼が僕を包む。

すべすべとしたクリスの頬が、僕の頬に擦り寄ってきた。

あれ？ 僕はクリスよりかなり大きかったはずだけど……？

僕、すっぼりとクリスの胸の中に収まっているような気がする。

おかしいな？

「ディア。ディア。会いたかった。私は、ずっとお前を見ていた。変わりゆくお前を……」

え？ え？ どういう意味？

な、泣いてる、の？ クリス？

こうしている間にも、床に伝わる振動とお腹に響いてくるような音は、刻一刻と大きくなっている。

「いいんだ。私を覚えていなくても、忘れ去られていたとしても。それでも、私はお前を……、お前だけを……」

「ク、クリス？ あの、なんだか良く分からないんだけど……。ごめんね。でも、何か、まずそんな雰囲気だよ？ いいの、かなあ？」

勇気を出してそう言うと、クリスの体が一瞬ビクリと波打った。

そして、

「そうだ。こうしている場合では無い。……何を動揺しているのだ、私は……。行くぞ、ディア」

「あ、れ？ あれれれれえ？」

僕はふわりと小脇に抱えられ、クリスと共にバルコニーへと踏み出していた。

前はいつだったか思い出せないほど久しぶりに感じる爽やかな風が、僕の髪をさらさらと靡かせる。

なんか、髪が短くなっているような気がする。

「飛ぶぞ。しっかりつかまれ」

髪のことなどすぐにどうでも良くなった。

クリスは僕を抱えたまま、真っ黒な石造りのバルコニーの、胸の辺りまである柵に足をかけ、

「わ、わああっ」

真っ白な翼を大きく開くと、そのまま外に飛び出した。

眼下には不自然にうねった木々の生い茂る城の庭。遠くにはなだらかな山が連なっている。その手前には、人間の街。白い壁と青い屋根が密集しているのが、アーク公国の城下街だ。

青い屋根の集まりがだんだんと盛り上がる中心には、沢山の青い尖塔が聳える、石灰岩で造られたお城が建っている。

緑の山々をバックにした白と青のその世界は、僕の憧れだ。羽ばたくクリスの翼越しに見上げると、真っ青な空に白い雲が、ゆっくりと流れている。

僕は初めて浴びる日の光の眩しさに目を細めた。風の匂いと太陽の匂い、そしてわずかに緑の匂いも混ざっている空気を、僕は胸一杯に吸い込んだ。

「ち。ケイオスがあれだけ頑張ったというのに、もうこれか」

「え？」

クリスは振り向いて舌打ちしていた。

僕も後ろを振り返る。

「あっ！ な、なに、あれ？」

そして、思わず訊ねていた。

今飛び出した僕のお城が、真っ黒な《闇》に飲まれていこうとしている。地面から湧き出ているのか、空気から滲み出ているのかも分からないけど、それは大量に、そして急速に増えている。

「スピードを上げるぞ。このままでは、我われまであの《闇》に飲まれてしまう。そうなれば、ケイオスの犠牲が無駄になる！」

ぐん、と後ろに引っ張られる感じがした。速度が上がったんだ。

僕は後ろから目が離せないでいた。《闇》が、どんどんこっちに迫っていたからだ。

「あの城の《結界》は、敷地内までだ。城壁の上空さえ抜けられれば！」

クリスの飛ぶスピードがまた上がる。翼の羽ばたきが激しくなる。《闇》の広がりも速くなった。

《闇》は、もうすぐ後ろに迫っている。

怖い。あれに飲まれたら、どうなるの？

おかしいよ。あのお城は、今までずっと、僕が住んでいた所のはずなのに。

一番上にある僕のお部屋は、お気に入りの場所だったはずなのに。

一度光に溢れた外の世界に出てみたら、もう帰りたくなくなっているなんて。

いやだ。

もう、《闇》は、いやだ。

助けて、クリス。

僕、もう、あそこには帰りたくない。

帰りたく、ないんだ。

「クリスう。後ろ、後ろに」

「分かっている。心配するな」

クリスの不敵な笑顔に安心した。

でも、僕の足が。

今、《闇》に、捕まった！

僕の足に、《闇》が纏わり付いている。

クリスの足や翼にも、染み込むように《闇》がある。

クリスのスピードが落ちた。

がくん、と僕の足を引く力が強くなった。

途端に、僕は泣きたいような衝動にかられた。

「クリスッ！」

「心配するな、と、言った、だ、ろお、おおおおおっ！」

叫ぶ僕に、クリスも吼えるように応えた。

クリスから、凄い力を感じる。クリスは、全力を振り絞っているみたいだ。

「抜けた！」

「わっ！」

急に体が軽くなった。

激しい風が吹き付けて、僕は思わず目を閉じた。

「見ろ、ディア」

しかしクリスに顔をぱしばしと叩かれて、後ろを見るよう急かされた。

「う、うわあ！」

煤けた蔦がびっしりと外壁に絡んでいるお城が、真っ黒に染まっていた。槍のように尖った屋根を持つ塔が三棟あるけど、どの塔のどの窓からも《闇》が勢い良く噴き出していた。越えた城壁を境に、城を中心として、《闇》が内側で渦を巻いている。

暗い。そして、黒い。

あれが今まで僕のいた所。

《ギルトサバスの城》と呼ばれる、僕の城だ。

「どうだ、ディア。自分の城を、外から眺めるのは初めてだろう？」

「う、うん」

僕は頷いた。

「信じられないよ……。あんな怖そうなところに、今まで僕がいたなんて……」

そして、素直な感想を口にしていた。

「だろうな。だが、事実だ」

クリスは柔らかく微笑むと、僕を小川のほとりにそっと降ろしてくれた。

足の裏にひんやりと、それでいて優しい感触がある。

飛んでいるとき靴を落としちゃったんだ、と僕は思った。

見下ろせば、小さな白い花を咲かせた草が、沢山生えている。それは小川に沿って広がっていた。

空からは小鳥のさえずりが聞こえてくる。

腕を開いて顔を上げると、太陽の光がぽかぽかと僕を照らしている。

気持ちいい。

これが、外の世界。

「嬉しそうだな、ディア」

クリスが僕の頭を撫でた。

最初見た時は凄く冷たい感じがしたのに、今は別人みたいだ。

それに。

「ねえ、クリス。なんで僕を『ディア』って呼ぶの？」

「ん？ ああ。はは。それがお前の本当の名前なのだ、ディア。そしてその姿は、私の知る、昔のディアだ。私は、もうお前を『ディアボロ』とは呼べない。その姿に戻ったなら、な」

「僕の、姿？」

「気付いてないのか？ お前は、相変わらず、のんびりしているな。ほら、その小川で自分の姿を見してみるがいい。鏡ほどではないが、水も自分の姿を映してくれる」

「えっ？ そうなんだ！」

僕の心は浮き上がった。ずっと欲しかった鏡の代わりに、すぐそこにあるんだ。

でも。

「……やめとくよ、クリス。だって、僕、凄く怖い顔、してるし……」

もうあんな自分は見たくない。

「なに？ あっはっは。心配するなったら」

「あ！ や、やめてよ、クリス！」

クリスは僕をまたしても抱きかかえ、小川の中に足を入れた。

自分の姿を見るのがいやで、目をぎゅっつつむる。でも、つむる直前、ちらりと白い翼が見えた。

これは、クリスが映っていたんだね。やっぱり僕も映ってるんだ。

「大丈夫だったら。ほら、見てみろ」

「うー」

クリスにぺしぺしと頬を打たれ、僕は恐る恐る目を開けた。

「……え？」

緩やかに流れる小川の水面には、自分で言うのも気が引けるけど、愛くるしい顔をした《人間》が映っていた。

着ているのは、確かに僕が身に付けていたものだ。

後頭部から肩、胸まで覆う紫色に染められた革の外套から、ケイオスの着用していたローブに似た漆黒のマントが広がっている。グレーのシャツに光沢あるマフラーもそのままだ。でも、それらは全てだぶだぶで、全然サイズが合っていない。いつの間にか、ズボンなんてなくなってる。細くて白い足が、シャツの裾から伸びている。

これが、僕？ まるっきり《人間》じゃないか。

揺れる水面をよくよく覗いてみる。

すると、やっぱり僕は《人間》ではないことがすぐに分かった。

短めの金髪を掻き分けて、頭から二本の角が生えていた。

くるりとカーブした、茶色くて短い角だ。

「ふむ。角は消せなかった、か。ケイオスの《許容量》では、そこまでが限界だったようだ」

耳元で僕と一緒に水面を覗き込むクリスの、残念そうな呟きが聞こえた。

「しかし、それ以外は昔のままだ。……昔のまま、女の子のように……かわいい……」

次の言葉は嬉しそうに聞こえたけど、耳には妙に熱い吐息がかかった。

僕はなんとなく、少しだけ体を震わせたのだった。

恐怖はつねに無知から発生する。
(ラルフ・ワルド・エマーソン)



振り返れば《闇》に包まれた《ギルトサバスの城》が遠くに見える。

巨大なお城だ。普通の《町》なら、五個や六個は、城壁に囲まれた敷地内にすっぽりと入ってしまうんじゃないだろうか。

その城の周りだけは、まるで夜のよう暗さだ。中にいたときには、ちゃんと朝、昼、晩が区別できたのに。外から見ると、なぜ区別出来ていたのかが分からなくなる。

あの城は……一体、なんなのだろう？

「ふう。やはり外界はいいな。空気がうまい。気分がいい。全く、あの城は最悪だった。そうだ、たまには翼でも干そう。あの《闇》が残っているのは、カビが生えてしまうかも知れんしな」

僕の隣では嬉しそうな顔をしたクリスが、大きく広げた翼をふよふよと扇いでいる。風通しを良くしているんだろうか？

それにしても、と僕は思う。

良く見れば、クリスは随分と露出の多い格好をしている。頼りなさそうな薄くて白い布が、胸と腰の辺りにあるだけだ。足には、膝まで蔦のように絡みついた靴らしきものを履いている。靴底だけはなめし皮で出来ているみたいだ。銀色に輝く長い髪と、同じ色の大きな瞳。背中からは、自分の体全てを包めるほどに大きくて、真っ白な翼がある。

きれいだなあ。僕はクリスにしばし見惚れた。そして、遠くに目を移した。

彼方に連なる山々の稜線までは、ずうっと緑の大地が広がって、いまいる小川も延々と伸びている。ところどころに森や小山があるけれど、さほど視界の妨げにはなっていない。

そして僕は、この長閑な風景をバックにして、クリスが遊ばせる翼にまた見入っていた。

でも、落ち着いてくると、様々な疑問が湧いてきた。

まず気になるのはケイオスだ。

僕はクリスの正面に立ち、その美しい顔を見上げた。クリスの背が僕より頭一つ分は大きいことに少しだけショックを受けたけど、そんなことはどうでもいい。

「ん？ どうした、ディア？」

「ねえ、クリス。ケイオスは？ ケイオスは、どうなったの？」

「ケイオス、か？」

クリスはちょっとだけ顔を横に向けると、

「ケイオスは、死んだ。いや、『消滅』した、と言うべきか」

抑揚の無い声で、そう言った。

僕には意味が分からない。

「それってどういうこと？」

「完全に、この世界から『消えた』ということだ」

やっぱり意味が分からない。僕は首を捻った。

「分かった。詳しく説明してやろう。今のディアには、とても納得できることではないだろうからな」

クリスは扇いでいた翼をたたみ、僕に真っ直ぐ視線を投げ掛けた。

「ケイオスは、ディアの引き受けていた《穢れ》を、自分に移した。《穢れ》とは《闇》のエナジーなのだが、あれにはかなりの『質量』があるのだ。『重力』と言い換えてもいいだろう。従って、集め過ぎれば『空間』すらもその重みで潰してしまう。並みの者ではその重力に耐え切れず、ケイオスのように……『空間』ごと、潰されてしまうのだ。そして……潰れた『空間』がどうなり、どこに行くのかは……私にも、分からない」

「じゃあ……ケイオスは……？」

「潰れて、空間ごと潰れて……どこか、こことは別の空間へと、消えてしまったことになる……」

聞き終わらないうちに、僕の中で何かが弾けた。

「そんなバカなっ！　じゃあ、もう会えないの？　ケイオスには、もう会えないって言うの、クリスッ！」

「う、おおッ！　落ち着け、ディア！」

僕の体から『何か』が飛び出し、凄まじいまでの暴風を巻き起こした。小川の水が巻き上げられ、一緒に土や花、魚なんかも僕を中心に回りだした。クリスは翼を盾にして、僕の暴風を凌いでいる。翼はばたばたと音を立て、羽が何本も抜けていく。クリスは歯を食い縛り、僕からの『圧力』に耐えている。

クリスが苦しそうにしている。

でも。

でも、どうしたらいいのか分からない。

悲しみ？　怒り？　寂しさ？

クリスに名を教えられたばかりの、僕の中のいろんな感情が混ざり合う。

抑えきれない。抑えきれないよお。

「ケイオスーッ！」

僕は叫んだ。

「うおおおおおおお！　なんてヤツだ！　あれだけの『力』を失って、なおこれだけのことが出来るのか！」

クリスも叫んでいる。

土がめくれ上がる。ごろごろと転がっていた岩が、木の葉のように宙を舞う。

それは広がり、広がり、どこまでも広がっていった。

頬を伝って、何かが流れ落ちてゆく。

「あああああああ————！」

喉が、破れる。

そう感じたところで、僕の意識は途切れた。

目が覚めると、小さな小さな光が、沢山たくさん連なって、まるで大河のように、キラキラ、キラキラと揺れていた。

「空……？　夜空……？」

声に出してみた。すると、凄い違和感があった。

喉がからからに渴いていて、しゃがれた声が出たからだ。

「気付いたか、ディア？」

「クリス」

僕を覗き込むクリスの顔の向こうには、いっぱい星が瞬いている。

頭の後ろが温かい。ぷにゅぷにゅとした柔らかいものが、僕の頭を支えているみたいだ。

なんだろうと思い手で触ってみると、

「ひゃん」

という、かわいらしい声でした。

え？ これってクリスの声みたいだけど？

僕はそれを気にも留めず、さらに柔らかいものを触る。

「ひゃ、ひゃあん」

すると、またしてもクリスのものらしい、変な声が聞こえた。僕はやっぱり気にしない。神経が、柔らかいものに集中しているからだ。

なんだろう、これ？ すべすべしてて、気持ちいい。

「ど、どこを触っているのだ、この馬鹿っ！」

「いたっ」

顔を真っ赤に染めたクリスに、僕は頭をぽかりと叩かれていた。頭をさすりながら首を横に向ける。そこで、僕はクリスに膝枕をしてもらっていたことに気付いた。触っていたのは、クリスの太ももだったみたいだ。そこまで考え、僕は慌てて身を起こした。

「わわわっ！ ご、ごめん、クリス！」

ふわ、という感触が体を掠めた。

僕の体は、クリスの翼に包まれていたんだ。

「ふ、ふん。いいさ。元気になったなら、それでいい」

クリスは僕から目を逸らすと、照れ臭そうにそう言った。

逆に、僕は冷静さを取り戻した。

そうか。

僕はあれから、気絶でもしていたんだろう。クリスは、僕が気が付くまで、ずっと膝枕をしてくれていたんだ。きっと、翼で包んでくれていたのは、風邪をひいたりしないようにだ。

月明かりに照らされた地面は、僕たちを中心にして、すり鉢のように抉れていた。僕らは、その底に当たる位置にいるようだ。随分深い場所にいる。

土の断面が縞模様になっているのは、いつかケイオスに教わった、「地層」というものだと思う。

地層からは、所々から水がちよろちよろと流れ出している。

「あ、ありがとう、クリス。ごめんね」

「いいったら。あんなってしまっても仕方がない。私も、もっと話し方に気をつけるべきだったんだ。すまない、ディア」

「や、やめてよ、クリス。そんなに申し訳なさそうにしないで。僕こそ、自分にあんな力があるなんて知らなかったから。大丈夫だった？ 怪我とかしてない？」

「ああ、大丈夫だ。《魔王》でなくなったお前の力では、私をどうこうすることなど出来ない。ふふ。ディアは、相変わらず優しいな」

「えっ？ そ、そう、かな？」

クリスに優しく微笑まれ、僕は恥ずかしくなって頭を掻いた。

優しい、かあ。でも、「相変わらず」って、どういうことだろう？

僕は、いつから「変わってない」んだろう？
ケイオスなら、きっと知っているんだろう。
でも。
ケイオスは、訊いたら答えてくれただろうか……？

「ケイオス……。うっ」

思い出したら、また悲しい気持ちになった。

「ディア」

そんな僕を、クリスが胸に抱き寄せる。

「元気を出せ、ディア。お前がそんな風では、ケイオスも安心できないぞ」

「……………」

僕には答える気力もなかった。

「いいか、ディア。ケイオスは、自ら望んでああしたんだ。最期、お前の役に立てて、ヤツは嬉しかったに違いない。お前の身代わりに《穢れ》を引き受け、お前を自由にするきっかけが作り出せた。ただそれだけで、アイツは満足しているはずだ。アイツはそういうヤツなのだ」

「なんで？ どうして、そんなことがクリスに分かるの？」

僕の素朴な疑問に対するクリスの答えは、予想外のものだった。

「分かるさ。なぜなら、ケイオスは私の兄。私とケイオスは、兄妹なのだ」

「えっ？ ええっ？」

兄妹？ ケイオスとクリスが？

そういえば、なんとなく、顔とか知性的な雰囲気とか、少し似ているような気もするけれど。

「まあ、人間でいうところの『兄妹』とは、ちょっと意味合いが違うがな。

『分身』と言った方が、しっくりくるのかも知れない」

「分身？」

まさか、ケイオスとクリスが、そんな関係だったなんて。

待って。

じゃあ、僕のためにケイオスが犠牲になったことを、クリスは、本当は怒っているんじゃないだろうか？

「そう、なんだ。僕には、あまり意味が分からないんだけど……。じゃあ、クリスも、ケイオスが消えちゃって、いなくなっちゃって、やっぱり……悲しいんだよね？」

もしそうなら、僕はクリスに責められなくっちゃならない。それでクリスの悲しみを、少しでも和らげてあげなくっちゃならない。何を言われたって構わない。ケイオスが消えたのは、僕のためだったんだから。

そう考えて、僕は思い切って訊いてみたんだ。

なのに。

クリスの返答は、またしても僕の予想を、ものの見事に裏切ったのだった。

「ん？ ふふん。なんだ、私を心配してくれているのか？ 未曾有の悲しみの中、そこまで気を遣うとは、お前はどこまで優しいのだ。私ならば心配ない。ケイオスがいなくなった今、私はむしろ、清々しているくらいな

のだから」

クリスは、涼やかな笑顔を浮かべてそう言った。

「えええっ！ な、なんで？」

驚いた。僕は本当に驚いていた。なので、声が上擦っていた。

「ケイオスが、ディアを愛していたからだ。対して、私もディアを愛している。お互いに、ディアを独り占めしたいと思い、《ギルトサバス》にまで付き添って来ていたくらいにな。ケイオスが消えた今、私はディアを独り占めだ。ふはははは」

うわあ。口の両端が、大きく吊りあがってる。なんて邪悪な笑顔なの、クリス。

僕は若干後ずさった。

これ、本気なのかな？ 僕を元気付けるための嘘なのかな？ どっちなんだか分からない。クリスは、分からないことだらけだ。

ところで。

「ねえ、クリス。『愛してる』って、なに？」

「へ？」

笑っていたクリスの口が、かぼっと開いたまま固まった。

あれ？ 僕、なにかおかしいことを訊いたのかな？

そう思い、僕が不安に感じていると、

「ディアっ……！」

「むぐ」

クリスが苦しそうに僕の名を呼び、唐突に抱き締めてきた。

「ああ、かわいそうなディア。永きに渡り《穢れ》の毒気に晒されてきたせいで、『愛』の意味さえも忘れてしまったというのか……」

「？ ？ ？」

クリスの言っている意味が、僕にはまるで理解出来ない。

「いいさ。それも仕方の無いことだ。悪いのは、全て人間だ。いや、あの『クソジジイ』のせいだ。むしろ、ジジイの責任の方が大きい。おのれ、あのクソジジイ……！」

クソジジイ？ 誰のことだろう？

「よしよし、そんな不安そうな顔をするな、ディア。何も心配はいらない。『愛』の意味など、そのうちにちゃんと分かってくる。私とすれば、きっと」

じゅるり、とクリスが舌なめずりをした。僕を見つめる目が熱い。

なんか怖い。

僕の笑顔が引き攣った。

「さて。こんなところにおいても仕方が無い。夜のうちなら、《アルクデスタ》までひとつ飛びしても、誰に見られることもないだろう。さあ、行くぞ、ディア」

「え？ う、うん」

そうだ。僕には、ウィルとの約束があるんだ。ケイオスのことは悲しいけれど、いつまでも泣いてばかりはいられない。僕は屹度顔を上げ、クリスの差し伸べられた腕に捕まった。細いのに、力強いクリスの腕。それは僕を誘う灯台の光にも思える。

ぶわ、と純白の翼が広がった。辺りに砂塵が舞い上がる。月明かりを受けた翼は、仄かな輝きを放ち、僕の目には幻想的に映った。

ゆっくりと、僕たちは上昇を開始した。目指すところは、《アーク公国》の辺境にある田舎町、《アルクデスタ》。勇者ウィル・ハーバーライトの妹、たった一人の肉親である、シャルル・ハーバーライトの住む町だ。僕はぶかぶかの服を風に揺らし、ウィルから預かった《カイロスの盾》をしっかりと抱え込んだ。

どんな子なんだろう、シャルルって。

会ったら、なんて言おう。

ウィルのことを、どう話せばいいのだろうか？

すり鉢状になった地面の底から、地上へと昇る。僕は、これからの行く手に不安と、それより大きな期待に、胸を膨らませていた。

「グファファファファ！ 出たぞ！ 撃て！」

突然、大きな声がした。男の人の、野太い声だ。

「なにいつ！」

クリスが驚愕の叫びを上げた。すぐ目の前には、矢があったからだ。四方八方から、僕らを目指して、一直線に向かってくる。

「むんっ！」

クリスが翼をぶるんと振った。クリスの翼から発せられた突風が、全ての矢を吹き飛ばした。

「うおおっ！」

「なんだこれは！」

「やはり、人ではなかったか！」

同時に、驚きに彩られた無数の声が上がった。

「不意打ちとは、無能で無礼で汚らわしい、人間らしい行動だな。答えろ！」

「貴様らは、何者かっ！」

さらに上昇したクリスは、地上にある複数の人影を見下ろし、凜とした言葉でそう告げた。人影たちは、抉れた地面のその丸い縁を、取り囲むようにして立っている。手には、今、僕たちに向かって飛んできた矢を撃ったのであろう《ボウガン》がある。

鉄の鎧すら突き破るほどの威力がある矢を撃てる《ボウガン》は、弦を張るのに専用の機械を使うため、次射にはけっこう時間がかかる。彼らのうちの何名かは、その準備に慌てている。僕はぬいぐるみみたいにクリスの両腕に抱えられ、その様子を見ていた。

なんなんだろう、この人たちは？

なぜ、僕たちを攻撃してきたんだろう？

ほどなく、僕らを見上げる一団の人間たちから、一人の大男が進み出た。「グファファファファ！俺たちは《アーク公国魔導探査部隊》だ！通称である《セレクトア（選別者）》と名乗った方が、分かりやすいかもしれねえな！グファファファファ！」

他の人間が頭をすっぽりと覆うヘルムを被っている中、そう答えた大男だけが、素顔を晒していた。

銀色の短めな髪が生えた頭をガリガリと搔きながら、もう一方の手は鈍く光る甲冑の胸をどんと叩いている。

大きな目。大きな口。大きな体。全てが無骨な輪郭で出来ていて、どこからどう見ても粗暴としか言い表せない男の人だ。背負っているのは、地面に引き摺りそうなほどに巨大な剣だ。

この人も、《騎士》なんだろうか？

いろいろと特徴のある風貌だけど、僕は特に目が気になった。

銀色の瞳孔が、縦長になっている。獣じみた瞳に、僕は興味を持った。

「ほう。《セレクトタ》か。それは確か、放置されている《魔導士》どもを探し出し、味方に引き入れるか、さもなければ捕らえて処刑するという、勝手極まりない組織だったな」

「グファ！ 人聞きの悪いことを言うなよ、お嬢ちゃん。『保護している』って言って欲しいもんだよなあ。ま、意味は一緒だけだな。グファファッ！」

「ふむ。そういう貴様も、《魔導士》だな。人間にしては、かなりのレベルにあるようだが……。貴様、名はなんという？」

この大男に興味を持ったのは、クリスも同じだったようだ。じやなきや、クリスは名前なんか訊きそうにないし。多分、すぐに反撃して終わらせているんじゃないだろうか。

「へえ。おめえも相当やりそうだな。見かけからしておかしいが、《魔物》の類じやなきさそうさ。ヤツラは会話なんて成り立たねえしな。グファ！」

「あんなモノと一緒にするな。生意気な口をきくヤツめ。今すぐ殺してもいいのだぞ？」

「まあまあ。そう焦るなよ。俺は『ウィンザレオ』ってんだ。一応、この部隊の指揮を任されてるもんさ」

ウィンザレオと名乗った大男は、クリスの脅しにも臆することなくにかつと笑う。いきなり攻撃しておいて、なんて言い草なんだろう。僕はちよっと呆れてしまった。

「いやな。魔王の討伐軍に選ばれなくて、俺もむしゃくしゃしていたからよ。ここから少し離れた所で、その辺にいる魔物どもを片っ端から狩りまくって、暇つぶしをしたのさ。お陰で部下は何人か死んだがな。グファファ」

そして、僕は更に呆れた。

暇つぶしで、仲間を死なせたって言ってるの？

この人、信じられないよ。

「そしたら、いきなり凄い音と衝撃が発生したから見に来てみれば、おめーらがいたってわけだ。どうにも只者じやなきさそうさだって思ったからな、とりあえず不意打ちしてみた。グファファファファ！」

ウィンザレオという男はそこまで言い終わると、腰から提げていた小さな樽を外し、口元に運んだ。そして樽の中身を喉に流し込み、「ぷはー」と一息ついている。中身はお酒らしい。

今って一応、戦闘中になるんじゃないの？

このウィンザレオって人間は、相当剛毅な性格らしい。

「ふふん。おかしい人間もいるものだな。ウィンザレオ、と言ったか。貴様、騎士ではないのか？」

「騎士？ あんなもん、堅苦しくてやってられん。俺はただの兵隊さ。そもそも、なぜ騎士どもが貴族の下で戦っているのかが理解出来ん。そのう

ち、騎士は貴族から独立して、実力で覇権を奪ってゆくだろうが、今はとてもやれないぜ。俺みたいな人間は、その前に処刑されちまうだろうからな。グフアフアフア！」

その時、僕は気が付いた。

僕らに向けられているボウガンが、全て、すっかり準備の整っていることに。

この無駄話、もしかして時間稼ぎだったのかな？

心配になり、胸の中からクリスを見上げる。

クリスは、目だけで頷いた。

よかった。気付いてる。

「さて、と。そろそろ本題に入ろうかね。……おめーら、一体、何者だ？」

ぎらり、とウィンザレオの縦長な瞳孔が凶悪な光を放った。

「人間ごときが詮索するか。不愉快だな」

クリスの声は氷点下だ。僕は背中が冷たくなり、ぶるっと震えた。

「グファファ。一応、仕事なもんでね」

対して、ウィンザレオは変わらずぬるい。

「答えねばどうする？」

「仕事だって言ったろ？ それなりの行動に出るだけさ」

二人の相性は良すぎるのかも知れない。打てば響くような問答だ。

そして、クリスが動いた。

「好きにしろ。どちらにせよ、死にゆく者に答える言葉など持ち合わせていない」

「クリス！」

音もなく、またあの光り輝く羽が舞い踊った。

「おお。こりゃきれいだ。グファファ」

ウィンザレオは僕らの周りを旋回する無数の羽の乱舞を見上げ、笑う。まるで花見をしているかのような風情だ。背中の大剣を抜く素振りもない。

なんでウィンザレオは、あんなに余裕でいられるの？

これ、勇者ウィルでさえも、あっという間に倒しちゃった羽なのに！

「舐めおって」

旋回していた羽が突如方向を変え、地上へと降り注ぐ。光の尾を引く羽たちは、白いラインを残して人間たちに襲い掛かった。

「撃て！」

ウィンザレオが号令をかける。

「ぎゃ！」

「が！」

「げふ！」

が、それは遅すぎた。

甲冑に身を包んだ人間たちは、ボウガンを構えたままで、全身を羽に貫かれていく。

「う」

僕はウィルを思い出し、思わず顔を背け、目を瞑った。それでも瞼の裏には血を噴き出させて倒れてゆく人々の姿が浮かぶ。悲鳴が聞こえてくるせいだ。僕は耳を塞ぎ、頭を振った。

「ふん。他愛もない」

ひとしきり羽を降らせたクリスは、もうもうと土煙を上げる地上を見下し、人間たちを皆殺しにしたことを確信している。それは満足げな声だった。

やっぱり……クリスは、怖い。

僕は目を閉じ、耳を両手で塞いだまま、そう考えていた。

「くだらん時間を使った。さて、行こうか、ディア」

「う、うん」

クリスに優しく頭を撫でられ、僕は手の力を緩めた。

そして目を開けると、信じられない光景があった。

「ひゃー。危ない危ない。いやいや、危うく死ぬところだったな、これは。グファファファファ！」

土煙の晴れた大地に、ウィンザレオが立っていた。

「あーあ。俺の便利な部下たちが。こりゃー、城に戻っても言い訳できねえなあ。それどころか、首を斬られるかもしれねえ。グファファファファ！」

大口を開けて笑っているのは、かすり傷一つないからだ。

「うそ……！　なんで……？」

僕は思ったままを口にしていた。

「馬鹿な。こいつ、一体……？」

クリスも驚いている。

クリスは空中で進みだした体を止めて、ウィンザレオを睨んだ。

「すげえな、お前。名前だけでも教えてくれよ？」

ウィンザレオは一切変わらずそこにいる。

周りには、沢山の仲間が、血を流して倒れているのに。

なぜ、怒らないの？　なぜ、悲しくないの？

「ふうん。白い翼を持つ者か。お前、『教会』にある、天使ってやつ絵に似ているな」

答える気のなさそうなクリスをウィンザレオはしげしげと見ている。

「……………」

クリスは答える代わりに、ウィンザレオに向けてまた羽を飛ばした。

「おとと」

それをウィンザレオは見えなくなるほどのスピードでかわして見せた。

羽は虚しく空を切り、地面を裂いた。クリスはそれを見てにやりと笑う。

「そうか。貴様、『獣人』だな。それも、桁外れな」

「グファファファファ！　すげえな！　もう見抜かれたのかよ！」

ウィンザレオは何が嬉しいのか、豪快に笑う。僕にはこの男の人が、何を考えているのかまるで分からない。全然なんにもおかしくない。おかしくないのに。

気付けば僕も、口元が緩んでいた。

直後、ウィンザレオは意外なことを口走る。

「なあ、おめえら。俺と、組んでみる気はねえか？」

僕らに向けて伸ばされた手は、とてもごつくて大きなものだった。

「組む？ 貴様と？ それに、なんのメリットがある？」

意外に思い、僕はクリスの顔を見た。

言葉とは裏腹に、目が輝いているようだ。

「王様になれる」

即答だった。

ウィンザレオは不敵な笑顔を僕らに向け、目を爛々とさせている。

「王様になど、興味はない。ディアはどうだ？」

「えっ？ 僕？」

急に話を振られ、僕はぷるぷると首を振った。

「そ、そんなの別になりたくないよ。それより、シャルルの所へ行かなくちゃ」

もう王様なんて懲り懲りだ。

「シャルル？ それ、ウィルの妹の事か、もしかして？」

「知ってるの？」

ウィンザレオは力強く頷いた。

「まあな。ウィルのヤツとは、よく一緒に戦ったからよ。家だって知ってるぜ？」

「家？」

そういえば、僕はシャルルの住んでいる所も知らない。

「クリス？」

クリスは首を振っている。クリスも知らなかったんだ。

僕をどこに連れていこうとしていたの、クリス？

「な、なんだ、その目は、ディア？ シャルルの家など、近くまで行って、その辺の者に訊ねればいいだろう？」

「あ？ そいつは無理だぜ、天使ちゃん」

「誰が天使ちゃんだっ！」

クリスがむきになっている。

なんだかおかしい。でも、笑ったら怒られそう。

僕は吹き出しそうになる口を、両手で押さえた。

でも、すぐに放さなければならなくなった。

「で、でも、どうして無理なの？」

クリスがむすっとしているの、僕が訊くしかない。

クリスは人に何かを訊くのは苦手そうだ。

「あいつんち、近くに誰も住んでねえんだ。山奥にあるから何も知らずに行くとも迷うし、魔物がうようよいやがるからよ。へたすりゃ死ぬぜ」

普通に話すウィンザレオの口調に、僕は返ってぞっとした。

「むう……」

クリスは一つ唸ると、ふよふよ翼をはためかせ、僕と共に地上に降りた。

どうしたんだろう？ 何を悩んでいるんだろう？

「グファファ。そう悩むなよ、天使ちゃん」

「……天使ちゃんと言うな」

あれ？ クリス？ 元気がないけど？

「何しに行くのか知らねえが、俺が送って行ってやろうか？ こんなに頼りになるボディガード、そうそういねえんだぜ。グファファファ！」

「え？ ホント？」

「待て、ディア。貴様、その代償になにを望む？ まさか、ただの善意でそんなことはしないだろう？ 貴様はそんなに出来ている人間ではないはずだ」

飛びつこうとする僕を、クリスが腕で制した。

そういえばそうだ。仲間が死んでも平気にしてるし、この人、怖い人だったんだ。

とても信用出来ないよ。

「まあな。なに、そっちの用が済んだら、今度は俺の用事に付き合ってくれればいいだけさ」

「用事？」

無精ひげの生えた顎をさするウィンザレオに、僕は問い返した。

「ああ。なに、簡単な用事さ。妙に疑われるのはめんどくせーから話しておくが、《アルクデスタ》から一週間ほど歩いた向こうに、《ドラムフォルス》って山脈があるだろう？」

「《ドラムフォルス》だと？ なるほどな。そこに、何をしに行くつもりだ？」

何が「なるほど」なのか、僕には分からなかったけれど、クリスもそこに何をしに行くのかは分からないみたいだ。

でも。

薄々は分かっているのかな？

言外に、そんなニュアンスを感じる。

「何しに、だって？ 《ドラムフォルス》っていやあ、一つっきやねえだろうが？ グファファファファ！」

「……貴様は、相当な馬鹿者のようだな。面白い。よかろう。連れて行くだけでいいのだろう？」

「ああ。俺を降ろした後は、好きにしてくれて構わねえ。あとは、自分でなんとかするさ。グファファファ」

「よし。交渉成立だ」

「おう。よろしくな、天使ちゃん」

ウィンザレオのセリフにクリスの眉がぴくりとしたけど、二人はがっちり握手した。

何がどうしてこうなったの？ 僕には何も分からない。僕、分からないことだらけだ。て、落ち込んでても仕方ない。「分からない時は、訊くことです」って、ケイオスが言ってたんだ。今度も、ちゃんと訊かなくちゃ。「ね、ねえ、クリス。《ドラムフォルス》って？」

「ん？ ああ、《ドラムフォルス》とは、ここ、グランデール地方の最西端にある火山地帯なんだが、そこに辿り着くには、マグマの大河を渡らねばならん」

「あ。じゃあ、クリスに、その河を？」

「そういうこった。さすがの俺でも、飛び越すには大きすぎる河なんでな。空を飛べるヤツを探してたのさ」

僕の予想は当たっていた。そうか。ウィンザレオは、クリスにそこまで運んでもらいたいんだね。

僕はいつの間にか、このウィンザレオという大男を信じていた。さっきから酷いことばかりしているけど、『嘘』だけはついていない。そう思ったからだ。

「ふうん。で、そこに、何があるの？」

「なんだ、知らないのか、お嬢ちゃん？」

「僕、男です」

「なに？ うそつけ。そんなかわいい男、いるわけねえだろ」

「本当だとも。ほら」

横目で僕を見るウィンザレオに、クリスは僕のシャツをまくってみせた。僕の下半身が露になっている。

そうだ。

僕。

ズボンも下着も、全部脱げていたんだ。

「……本当だ。アソコだけは、めちゃくちゃ男らしいな。グファ」

ウィンザレオは、心底感心している。

じろじろと眺め回され、僕の中にふつつつと湧き上がる気持ちがある。

それにつれ、体がぷるぷると震えだす。

耐え切れなくなった僕は、

「ク、ク、クリスーッ！ な、なんてことするんだよーっ！」

叫びながら、シャツの裾をカ一杯引き下げた。

「ははははははは。一発で信じてもらうには、いい方法だろう？ はははははは」

「違いねえ！ グファファファファファ！」

「笑い事じゃないよ！」

怒る僕に、二人は更に笑い出す。

ここから、僕ら三人の旅が始まったのだった。

この時、僕にはまだ、知る由もなかった。

このウィンザレオが、後に『獅子王』と呼ばれることになることを――

もう夜も遅いので、出発は改めて、明日することに決まった。ウィンザレオは地面にそのまま寝転がり、僕はクリスの翼に包まれて、眠りにつこうとしていた。

眠る前に、僕はさっきの続きをクリスに訊ねた。

「ねえ、クリス。結局、《ドラムフォルス》には、何があるの？」

クリスはすぐに答えてくれた。

「ドラゴンだ」

「え？」

「《ドラムフォルス》の洞穴には、《ゲオルギウス》という竜が棲む。ウィンザレオは、その《ゲオルギウス》に用があるのだろう」

「な、何の？」

「さあな。まあ、普通に考えれば、退治しに、だろう」

「退治って……。僕、ケイオスに聞いたことがあるよ。竜って、とても強いんだ、って」

「うむ。まず、勝ち目はない。挑んだところで、死ぬだけだ。私の見たところ、多分、ウィンザレオも敵うまい」

「……死にたいのかな、ウィンザレオ？」

僕は首を激しく捻っていた。

「はは。人の中には、稀にそういうヤツもいる。強いヤツと戦いたい。ただ、その為だけに生きているようなヤツが、な」

僕は口を開けたまま、向こうを向いて寝ているウィンザレオの背中を見つめた。背中 of 剣がそのままだ。あれじゃあ、横向きにしか眠れない。

「ふ。見ておくがいい、ディア。あれが“武人”という人種だ」

「“武人”……」

なぜ、ウィンザレオは戦うんだろう？

今まで、どれほどの戦いを生き抜いてきたのだろう？

「人間って……」

眩いた僕の声は、星の瞬く夜空へと吸い込まれていった。

朝になった。

顔がなんだか暖かいことに気付き目を開けると、朝日が僕を照らしていた。

体はすっぽりとクリスの翼に包まれたままだ。

「起きたか」

横を向くと、クリスのぱっちりとした目が僕を見つめていた。

クリスは、もうとっくに目覚めていたんだろう。

もしかしたら、眠っていなかったのかも知れない。そんな気がした。

「うん。おはよう、クリス。ありがとう」

「う？ ああ、おはよう」

なんとなくお礼を言うと、クリスは照れ臭そうに挨拶を返してくれた。

「おう、お姫様も起きたか」

太くて安心感のある声でした。聞き慣れないから思い出すのに少し時間がかかったけど、それはウィンザレオの声だった。また「お姫様」なんて言って。僕は男だって言ったのに。

そこで僕は、いつの間にか屋根らしきものがあることに気付いた。これは、丸太？ 僕らを囲むように皮がついたままの生木が四方に立ち、組まれた屋根の丸太を支えている。

「あれ？ 僕ら、野宿していたはずだよな？」

眠っている間にすっかり変わった環境に驚き、僕は飛び起きた。僕を包んでいたクリスの翼が広がった。力は全く入っていなかったようだ。

「んー？ ああ、最初はな。俺は地面に寝てても平気なんだが、おめーらは違うだろ？ 夜中にちっと目が覚めたんで、ついでに軽く作ってみた。グフアファ」

「ついでについて……」

木々が組み上げられている丸太小屋は、隙間が一切見当たらない。僕の頬に当たっていた朝日は、小屋の入口からだけ差し込んでいた。入口の向こうには、あぐらをかいて座っているウィンザレオがいる。彼は火を起こし、細い木に突き刺した何かを焼いているようだ。そのまた更に向こうには、得体の知れない“何か”が、沢山転がっていた。

「よし、焼けたぞ。ほれ、起きたなら出て来いよ、おめーら。朝メシにしようぜ」

にいと笑うウィンザレオの手には、こんがりと焼かれた何かの肉があった。

「いい匂いだね」

「頭に気をつけろ、ディア。出入り口が低いからな」

香ばしい匂いにつられ、僕は小屋から外に出た。

クリスも、僕の後について出てくる。

「ほらよ。やるから食べ。その辺に余った丸太があるから、それに座ればいい。おっと、こいつを忘れちゃいけない」

言われるまま、側に横たわっていた丸太に座る。

ウィンザレオが差し出す肉を受け取ろうとしたけど、それは一旦止められた。

「塩、塩。塩をかけた方が、肉は断然うまくなるからな」

ウィンザレオの腰に巻かれたベルトには、小袋とか小さな樽とか、いろんな物が提げられている。そんな袋の一つを外すと、ウィンザレオはその中身を一掴みして、ぱぱっと肉に振りかけた。

「ほう。貴重な塩を人にふるまうとは。貴様はなかなか太っ腹だな」

クリスが少し驚いている。

ここグランデール地方は、内陸の国だ。海を持たないこの国では、塩は大変な貴重品であり、貨幣の代わりとして、取引にも用いられる。昔、戦で塩の供給路を断たれた際には、同じ重さの金と交換されたりもしていたくらい、塩は貴重なものなんだ。塩分が不足すれば、人は死ぬ。

「時に塩は、金より価値を持つのです」と、ケイオスが言っていたのを思い出した。

「ほらよ。熱いから、気をつけろ」

「ありがとう、ウィンザレオ」

僕は肉を受け取った。人数分焼かれていた肉は、クリスにも渡された。

そういえば、クリスってごはんはどうしていたんだろう？ お城にいるときは、ずっと水晶珠だったわけだから、何も食べていなかったんじゃないのかな？

「ところで、あの『魔物』どもは、全て貴様がやったのか？」

肉を受け取ったクリスは、ウィンザレオの向こうを見ている。

「『魔物』？ あっ！」

視線を追うと、人に近い形をしているものの、角が生えていたり、こうもりのような翼を背中に持つ“何か”が、小川に沿って何体も倒れていた。

「まあな。夜中にうるせーもんだから、とりあえず全部ぶちのめしといた。グファファ」

ウィンザレオはそう言うと、肉に豪快に齧りつく。

クリスは若干呆れたような表情を浮かべた。

じゃあ、「夜中に目が覚めた」のは、こいつらのせいなんだ。

で、ついでにこの丸太小屋を？ 凄い。全然、気付かなかった……。

「やっぱ、まずかったか？」

「え？」

ぼうっとしていると、ウィンザレオに声をかけられた。

「どういう意味？」と、僕は問い返す。

「だっておめー、『魔王』だろう？ こいつらは、おめーの仲間じゃねーのかよ？」

「！」

「おっとと」

びっくりして僕の手からこぼれ落ちた、木に刺された肉を、ウィンザレオが受け止めた。

「落としちゃったら、もったいねえ。ほれ」

「あ、うん。ごめん」

再び手渡された肉を持ち、僕はぺこりと頭を下げた。

クリスは肉を手にしたまま、何も喋らない。

「なんで、僕が魔王だって分かったの？」

「グフアファ。随分簡単に認めるなあ」

咀嚼中にも関わらず豪快に笑うウィンザレオ。口の中のものが少しだけ飛び出したけど、僕は気にしないようにした。

「なんで分かったか、だって？ ここは魔王の居城の懐だぜ。連れているのもとんでもないヤツみてーだし、される会話も高度で、人間と比べても遜色ない。『悪魔』は知能が高いがな、そんなに強そうなのを従えているヤツは、見たことも聞いたこともない。第一、おめーの頭には角だってあるしな。間違いなく、人間じゃあねえだろう？」

「角？ あ！」

僕は頭に手をやった。

そういえば、僕はこの角、まるで隠してなかったんだ。

とりあえず『人間じゃない』のは丸分かりだよ、これ！

「意外だったな。魔物を殺したことで、貴様がディアを気遣うとは」

クリスは僕の隣に腰掛けて、肉をいろいろな角度から眺め回しながら、ようやく会話に入ってきた。

「グファ。まあ、自分でも意外なんだがな。このお姫様、まるで底が見えねえからよ。興味が出た、ってところかな。グファファファ」

「ふん、なるほどな。ただの戦バカではなさそうだ」

互いの目を覗き込み合う二人の間には、ぴりっと張り詰めた空気と、がちりとした信頼感のようなものが漂っている。

「ウィンザレオよ、結論から言おう。ディアが『魔物』を殺されたからといって、怒ったり恨んだりすることはない。その辺は安心するといい」

「へえ。不思議な話しだな。魔物ってのは、魔王の手下であり、仲間なんじゃねえのかよ？ やっぱ、そんな感傷的な理由で怒るのなんて、魔王にや当てはまらねえってか？」

「違う」

クリスは首を振った。

「何が違うんだ？」

「貴様が知る必要はない。それよりも、だ。ウィンザレオ。貴様、ディアが魔王だと、最初から気付いていたな？」

ウィンザレオは口角を吊り上げ、肩をすくめてみせた。

カチャ、と背中の大剣が音を立てた。

「だったらどうだっていうんだ？」

「油断のならん男だ。そもそも、こんな開けた土地で眠るなど、豪胆を通り越して、ただの阿呆だ。常に戦に身を置く者が取るような行動ではない」

「そうかもな。で？」

ウィンザレオはクリスの言葉に、静かに耳を傾けている。

何が言いたいんだろ、クリス？

僕は二人の顔を交互に見遣った。

「つまり、わざわざ危険な場所で、我われを無防備な状況下に置こうとしていた、ということだ」

「えっ？ それって、どういうこと、クリス？」

話しの風向きがおかしい。僕はそう思い、クリスに訊ねた。

「ふふん。天使ちゃん。俺が、何の目的でそんなことをする？」

がぶ、とウィンザレオは肉にかぶりついた。

「尋常な手段では我らに敵わぬとみて、寝込みを襲おうと考えたのだ。違うか？」

「ちょ、ちょっと待ってよ、クリス！ ウィンザレオは、僕らのために、こうして丸太小屋も作ってくれたし、朝ごはんだって用意してくれていたんだよ？ それに、この人が、そんな戦い方するなんて思えないよ！」

「そうかな？ 人間など、強い欲望の前では、簡単に自分を捨てられるものだ」

「そんな……！」

クリスは、人間のことなんて、全く信用していない。

僕はそれを痛感した。

「グフアファ。一理あるねえ、天使ちゃん。人間なんて弱えもんだ。そんなこともあんだらう。でもよ。仮にそうだととして、俺がそこまでする理由はなんだ？」

ウィンザレオの口が、ぐっちやぐっちやと鳴っている。その目は、楽しみに細められていた。

「貴様、勇者ウィル・ハーバーライトとは、共に戦ったことがある、とっていたな？」

「ああ、言った。それは事実だからな」

「では、ウィルのあだ討ちだらう。魔王討伐軍が《ギルトサバスの城》に攻め入ったことは、この辺りで暇つぶしをしていたということから、貴様は知っていたはずだ。そして、魔王がここにいる。貴様はそれが指し示す事柄を、瞬時に悟っていたのだらう」

クリスはウィンザレオに強い視線を向けた。

「ウィルが、敗北したことを。すでに、この世にいないことを」

チチ、と小鳥のさえずりが、どこかから聞こえた。さらさらという小川のせせらぎが、やけに大きく思えた。ふと、ウィンザレオがクリスから目を逸らした。

「そうか。やっぱり死んだか、ウィルのヤツ。ま、しゃーねーな。あいつ、弱くせに、勇者なんか祭りに上げられちまってたからな。逃げることも出来ず、やるしかなかったんだらう。グフアファ」

肉が生焼けだったのか、ウィンザレオは再びそれを焙りだした。

「怒らないのか、ウィンザレオ？ ウィルとは、それほど親しい間柄ではなかったのか？」

「んー？ どっちかっつーと、親友だったな」

「えええっ？」

肉の焼き加減を確かめながらそう言うウィンザレオに、僕は思わず声を上げていた。

「悲しくないの？」

僕にはウィンザレオの気持ちが分からない。僕は、あんなに泣いたのに。「悲しい、って一よりか、ちよいと寂しい、かな。んでもよ。あいつは、命を奪いに行ったんだ。それなら、逆に奪われたって、文句は言えねーだろ？ あいつだって、そこんところは納得してるはずさ。だから、俺がどうこう言う問題じゃねーんだよ。卑怯なだまし討ちとかされてなきや、だけどな」

ウィンザレオは肉を噛んだ。「アチ」と短く上がった声が、少し元気なく思える。僕は、そんなウィンザレオから目が離せずにいる。分かりやすいけど、分からない。納得出来そうで、出来ない話だった。

「ふむ」と唸るクリス。

「なあ、お姫様。ウィルは、勇敢だったか？」

ウィンザレオの瞳に陰を見つけ、僕は一瞬言葉に詰まる。

でも。

「うん。凄く、凄く勇敢だった。ウィルは、間違いなく勇者だったよ」

それは、ちゃんと言わなくちゃ。

僕はこの言葉に、ウィルに対するありったけの気持ちを込めた。

「そうか。それを聞けば、きっとシャルルも喜ぶだろうな。グフアファ」

「シャルルも……？」

豪快に笑い、「肉が冷めるぜ。食べ食べ」と僕らに促すウィンザレオ。

僕はこくりと頷いて、肉を口に運んだ。

クリスも無言で食べ始めた。

焼いただけの、なんの動物のものかも分からない肉は、程よく塩が効いていて、やけにおいしく感じられた。

ところで。

ウィルを死に追いやった直接の原因って、クリスが作っているんだけど。

ウィンザレオは、僕がウィルを殺したって思っているんじゃないだろう

か？

僕がクリスにちらりと投げた視線は、さっと逸らされた。

言わない気だね、クリス？

「さ、さあ！ 今日中には、シャルルの元に辿り着こう！ そうと決まれば、のんびり食事などしている場合ではないぞ、ディア！ さあ、食べろ！ 早く早く！」

「もがががが！」

纏わり付くジト目に耐えかねたのか、クリスは一人で不自然に盛り上がりつつ、僕の口に肉を詰め込んできた。

「グファファファファファ！ おいおい、そんなにしたら、お姫様が死んじゃうぜ。グファファファファ！」

僕らのそんな様子に大笑いしているウィンザレオ。この人の笑いには、なんの他意も感じられない。僕はそう思った。

空は真っ青に澄んでいて、鳥が仲良く飛び回る。常春の柔らかな風が撫でてゆく。心がどこまでも広がって、どこにだって届きそうな気がした。

そう。シャルルにだって、届くんだ。

この時の僕には、そんな予感だけしか無かった。

一時間後。

僕らは、勇者ウィルの妹の住む町、《アルクデスタ》に到着した。

「は一、は一。け、結構飛んだな。意外と遠いではないか……」

クリスは《アルクデスタ》と書かれた板切れの打ち付けられた巨木に手をつき、荒い息を吐いている。

「なんだ？ バテてんのか、天使ちゃん？ 意外と体力ねえな。そんなんで、俺を《ドラムフォルス》にまで連れて行けるのかよ？」

「うるさい！ 私がこれほど疲弊しているのは、貴様が重すぎるせいだぞ！」

やれやれと肩を竦めるウィンザレオに、クリスが怒る。クリスはウィンザレオと彼の肩に掴まった僕を、ここまで空を飛んで運んでくれていた。ウィンザレオはその間、クリスの足を掴んでいたけど。

凄い握力と持久力だなあ、ウィンザレオ。僕なら、五分ともたなかったと思う。

「それにしても、だ。なぜ、町の入口で降りるのだ？ シャルルの家は町の奥にあるのだろうか？」

「あー。ま、そう慌てるなよ。大体、天使ちゃんみたいなのが空飛んで町に入ったら、大騒ぎになるのは確かだろ？ それに、お姫様の服だって、なんとかしなくっちゃな」

「え？ 僕の服？」

言われて自分の姿を確認する。重々しかった革の外套と黒いマントは脱ぎ捨ててきたから、今の僕は、シャツ一枚羽織っている姿だ。ウィルから預かった《カイロスの盾》は、僕の腰に、後ろ向きに装着している。ウィルの腕には丁度良かった、盾を固定する皮のベルト。僕には腰でぴったりだった。

ウィルの腕、凄く太かったんだな。それとも、僕が細いの？

それより、頭の角が丸出した。

このままじゃ、きっとシャルルも警戒するだろうなあ。

「……ふむ。ディアの格好か……。言われて冷静に見てみれば……」

クリスは僕をじろじろと眺め回し、

「“変態”にしか見えないな」

と、酷いことを言っただけだ。

「へ、変態!? 僕が!？」

「そうだなあ。今にも『見て見てー!』とか言って、シャツをめくりそうだよな」

「僕、そんなことしないよ！」

ひどいよ、クリスもウィンザレオも！ 凄くショックだよ、それ！

でも、今の僕は、そんなことしそうな格好をしているのか。

「はー」

僕は溜め息を吐いて座り込んだ。

「グファファ。そんなに落ち込むなって、お姫様。だから、こうして町の入口で降りたんだからよ」

「どういうこと？」

「無いんなら、買えばいいだろ」

「そっか！」

ウィンザレオの提案に、僕は元気を得て立ち上がった。

“買い物”かぁ！ 一度やってみたかったんだ、それ！

「買うと言っても、我われはお金など持っていないぞ」

「えええええええ！」

クリスの言葉に、僕は再び座り込んだ。

「分かりやすいお姫様だな。心配すんな。金なら、俺が持ってるからよ」

バン、とウィンザレオに背中を叩かれた。

「いてっ。え？ そうなの？」

痛いけど、凄く嬉しい！

立ち上がる勢いがつきすぎて、僕はびよこんと飛び上がった。

両手は無意識に上がっている。

「喜びすぎだ、ディア」

「う」

呆れ顔のクリスに窘められ、僕は手をふにやりと降ろした。

「グファ。そうと決めれば、さっさと行くぜ。ほれ、天使ちゃんも翼を引っ込めな。出来るんだろ？」

「ん？ ああ、そうだな」

クリスの翼が光の粒になってさらさらと消えていった。ウィンザレオは先頭に立って歩き出す。歩く度、ウィンザレオの上半身を覆う鉄製の甲冑と背中の大剣が、ガシャンガシャンと音を立てる。

僕は急いで後を追った。

歩幅が広いウィンザレオについていくのは大変だ。看板のある巨木はなだらかな丘にぽつんと一本生えており、僕らはそこから町に続く一本道を進んでゆく。周りには高く伸びた草が青々と茂っている。道だけはそれが無かった。

人が二人、ゆったりと並んで歩ける道には真ん中に轍があり、割と頻繁に馬車が通ることを示していた。

しばらく進むと、二階建ての櫓（やぐら）が見えてきた。櫓の前には高く聳える木製の門が立っていて、その前には全身を甲冑で固め、槍を持った戦士がいる。

あれはきっと門番だ。

門の前で、荷馬車を引いた商人風の人たちも、なにかいろいろ訊かれています。

門番って、不審者を町に入れないようにするのが仕事だと思うけど。

僕ら、入れてもらえるのかな？

そんな僕の心配など関係なく、ウィンザレオは堂々と門番の目前にまで歩を進めた。

そして、

「よう。久しぶりだな。俺だ。ウィンザレオだ。ちょっと入れてくれや」

と、ウィンザレオは門番に気軽に声を掛けた。

言われた門番は、

「あ！ 久しぶりだな、ウィンザレオ！ しばらく見なかったが、どうしてたんだ、お前？」

満面の笑みで、そんなウィンザレオを迎えた。

「グファファ。アーク公のところで、《セレクトタ》をした。が、昨日辞めてきた。飽きちまってな」

「ははは。お前らしいな。で、後ろの二人は？ 連れか？ ……おい。なんだ、その二人は？」

ウィンザレオと和やかな挨拶を交わした門番は、僕らを見るなり顔色を変えた。

「う……」

まずい雰囲気、体が硬直する。

クリスは？

僕はクリスの様子を横目で見ると、クリスは興味なさげに空を見ていた。

ぴん、と僕の勘に引っかかる。

クリス。

面倒なことになったら、この人、平気で殺しそう……。

クリスはきっと、すでにあらゆる場面を想定し、自分の取るべき行動を決めている。クリスのことだから、多分、どんな場面でも“力づく”なんだろうけど。

でも、ウィンザレオは落ち着いて門番に対してはいる。

「ふふん。この二人はな、《アルクDESTA》の偉大なる領主『ガードナー卿』への貢物さ」

「おお、ガードナー卿への。……しかし、貢物？ 恥じらいなど無縁そうな

白い女もおかしいが、そっちの小さい女の子なんて、頭に角が生えているじゃないか。確かに素晴らしい美しさではあるが……。もしかして、魔物じゃないのか？ もし魔物なら……」

「あ」

僕は慌てて角を手で隠した。

忘れてた。

まずい？ まずいよね、これ？

「恥じらいが、無縁？」

クリスは不機嫌そうに眉をぴくりと動かした。

わああ。こっちもまずい！

前に通過を許可された商人風の一団も、僕らの方を興味深そうに見つめている。

一瞬、時間が止まったように感じた。

そんな張り詰めた空気を、ウィンザレオがあっさりと破った。

「角？ グファファ！ 馬鹿言ってるじゃねえ。これはな、ウンコだ！」

「ウンコ？」

門番の顔が、予想外の答えにとんでもなくひしやげた。

「ウ、ウンコ！」

僕はびっくりしてその下品な言葉を叫んでしまっていた。

「ぶふーーーっ！」

クリスが僕の後ろで吹き出した。そしてお腹を押さえて体を折り曲げ、肩を激しく上下させながら笑い始めた。

「おいおい、ウィンザレオ！」

「嘘じゃねえって。こいつら、サーストーン地方の原住民族でな。処女はこうしておかしな男が寄り付かないよう、乾燥してかちかちに固まったウンコを頭に乘せて、純潔を守るって風習があんだよ」

「……ほー。確かにそれなら、迂闊には近づけないかも知れないな」

ウィンザレオのあり得ない嘘に、門番は感嘆の声を上げている。

納得されちゃったよ！ なんか悲しいよ、これ！

僕の角が、ウンコにも見えるってこと、これ!?

「では、そっちの白い女は？」

「こっちは売女（ばいた）だ。格好を見りゃ、分かんたろ？」

「ば、売女だとっ!？」

さらっとウィンザレオにそう言われ、クリスは怒りをあらわにした。

売女って、なんだろう？

僕にはクリスの怒る理由が分からなかった。

「なるほど。それならばやたらと肌を晒しているのも納得だ。ふーむ。これならば、卿もきっとお喜びになるだろう」

門番は大きく頷くと、一步さがって道を開けた。

問題なく通れたのはいいんだけど……。

この敗北感は、なんだろう？

僕とクリスはしょんぼりと肩を落として門を通過した。

街に入ると、さっきの門番兵とのやりとりで落ち込んだ気分なんて、どこかに吹き飛んだ。

「うわあっ！ 凄い！」

僕は自分の目で初めて見る人間の街に、ただただ驚いていた。大きな撥ね上げ式の門扉を抜けると、真っ白な外壁と青い円錐形の屋根を沢山突き出させたお城が遠くに見える。幅の広い石畳の道がそのお城まで真っ直ぐに伸びていて、無数の人や馬車や荷車が、せわしなく行き交っていた。

道の左右にはこれも真っ白な外壁を持つのっぺりとした建物がずらりと並ぶ。窓が五つくらい縦に並んでいるから、五階建てなんだろう。建物の二階以上からは道の真上にまでいろんな看板がせり出していて、空がほんの少ししか見えないくらいだ。

一階の並びにはお茶やスイーツやパンのお店があり、道にまでテーブルを出している。そのテーブルには、親子連れや恋人同士、一人でくつろぐ老人の姿もあった。他にも雑貨屋さんや青果を扱う店が並んでいたりして、威勢のいい客引きの声が朗らかに飛び交っている。

「グファファ。すげえだろ。辺境とはいえ、この《アルクデスタ》はアーク公国の都に西からの様々な物資を送る要衝だ。人種も言葉も混ざり合い、いつもごった返してるのさ。俺は澄まして気取った首都よりも、この方が気に入ってんだ」

言葉も発せずにきよろきよろとしている僕の頭にぽんと手を置き、ウィンザレオが笑う。

「ふむ。よく栄えているな」

クリスも感心している。

あまりあちこち見ないようにしているみたいだけど、なんとなくそわそわしているような気がする。

「ここがこの街のメインストリートでな。真っ直ぐ行けば城まで行ける。無用心な作りした街に思えるかも知れねえが、これが罠だ。気をつけて歩かねえと、底に槍が仕込んである落とし穴に引っかかって即死だぜ。グファファファ」

「ええっ？ 嘘でしょ、ウィンザレオ」

ウィンザレオについて歩きながら、僕は地面を警戒した。

……本当だ。所々、人が不自然に避けて通っている。

なんとなく石の色も違うし、きっとあれが落とし穴なんだろうな。
「平和な街に見えるのに……。やっぱり、こうして攻め込まれた場合に備えてるんだ。なんだか悲しい話だね」

戦争なんかしているより、こういう街をたくさん作った方が楽しいのに。僕は笑いながら次々に行き過ぎる人々を見送り、そう思った。
「ふん。人間はな、お姫様。“死”への恐怖がなければ、退屈しちまう生き物なのさ」

吐き捨てるようにそう言うウィンザレオの顔に、表情は無かった。

僕らは手近な服屋さんに入ると、お店の人の見繕いに任せて一通りの服を揃えた。

シャツ一枚という姿で歩いていた僕は、これでようやく道行く人たちに憐れんだ視線を送られなくてすむ。

と、思っていた。

お店の若い女の子に選んでもらった服は、首まで隠す淡いピンクの『ワンピース』というものだった。丈は膝までである。その上に、深い青色のベストを重ねて着せられた。

裸足に驚いた店員さんは、びっくりして靴も履かせてくれたけど、これはベストと同じような色の短い革ブーツだ。そして、頭にはきのこの傘みたいな白い帽子。これは最初に決まった。

「角が生えてますけど、お客様！」

と驚く店員さんに、ウィンザレオがまた、
「これはウンコだ」

と説明したら、「きゃあああああ！」と悲鳴を上げられて、これを被せられた。

激しく落ち込んだけど、もうこれで安心だ。

と、思っていたのに。

「ねえ、クリス」

僕はクリスに声をかけた。気になることがあるからだ。

クリスは真っ白な長めの外套を一枚、ウィンザレオに買ってもらった。お陰で今はもう、ほとんど肌が見えない。クリスも相当じろじろ見られていたから。

特に、男性に。

しかも、スケベな目で。

自分でも、さすがにこれは肌を出しすぎらしい、と気付いたようだ。

「ん？ どうした、ディア？」

クリスは白い外套を翻して振り向いた。かっこいい。

「僕のこの服さ。もしかして、女の子用じゃないの？」

店を出てから、すれ違う人の中から「かわいい」って呟かれたり、男性

には「うわ！ めっちゃ好み！」なんて、思いっきり叫ばれたりもした。

こんなの、男である僕が言われるのはおかしい。

「さあ？ 私は、人間の着るものに詳しくないからな。どうなんだ、ウィンザレオ？」

クリスは前をずんずんと進んでいくウィンザレオに問いかけた。

「んん？　なんだ、今頃気付いたのか？　そんなの、女用に決まってるだろが。グフアフアフアフア！」

「ええええええっ！　な、なんで教えてくれなかったのっ？」

大笑いしているウィンザレオに、僕は駆け寄り問い詰めた。

「ああ？　お前、されるがままだったからよ。てっきりそれが気に入ってるのかと思ったぜ。グフアフアフアフア！」

「ああ、なるほど」

クリスがポンと手を叩いた。

「なるほどじゃないよ、クリス！　どうするの、これ？　今からシャルルに会いに行くっていうのに、これじゃ僕、女装趣味の変態だって思われても、言い訳できないじゃないか！」

このままじゃ、第一印象最悪だよ！

そんな空気の中で「実は、ウィルが……」とか話したら、「ふざけるな」って殺されそうだよ！

「ま、いいじゃねーか。女の子で通せばよ。どうせシャルルんところに行ったら、用事が済んだら、すぐお暇すんだからな」

「えっ？」

「えっ？　ってなんだよ、お姫様？　お前、どんだけシャルルんところに居座るつもりだったんだ？　その《カイロスの盾》だけ渡したら、もう用事は終わりだろ？」

「……………」

僕は何も言い返せないまま、無感情なウィンザレオの瞳を見上げた。周りの喧騒も聞こえない。僕は考えていた。

そうなのかな？　ウィルは僕に、「シャルルを頼む」って言ったけど。それって、「面倒みてくれ」ってことじゃないのかな？　一人ぼっちになっちゃうシャルルを元気付けてあげてくれって、そういうことじゃないのかな？

「……グフア。ウィルのヤツに何を頼まれたのか知らねえが、シャルルのことなら、何も気にしなくていいんだぜ」

腕を組んでぶつぶつと呟いていると、ウィンザレオが僕の考えを察したように語り出す。

「気にしなくていい？　どういうこと、それ？」

僕はウィンザレオに尋ねた。

「シャルルはな……。なんつーか、『何も無い』ヤツなのさ。何も無い者には、何も必要ない。無闇に近付かない方がアイツの為だ。その方が優しいと、俺は思うぜ」

ウィンザレオは困ったように頭を掻いた。

「なにそれ？　全然意味が分からないよ」

「だろうな。悪いけど、あんまり俺から詳しく話したくないんだよな。シャルルが話してくれればいいが……。でも、訊かずに帰るのが一番いいと思うがな、俺は。グフア」

言葉を濁すなんて、ウィンザレオらしくないな。
そう思いクリスを見ると、やっぱり微妙な顔をしていた。

僕らは《アルクデスタ》の街を抜け、裏の門から山に出た。出る分には、門番も特に何も言ってこない。何度か分かれ道を選んで、急に険しくなった山道を登る。二つの道が交差する場所で、ウィンザレオがこんなことを言った。

「おっと。道が交差している所は、真ん中を歩けよ」

「えっ？　なんで？」

「交差点にはな、処刑された罪人が埋められているからさ」

「ええええっ！　じゃあ、端を歩いた方が！」

僕は慌てて端っこに寄った。

「いや。それが罰なのさ。死してなお、人に踏みつけられるのが、そいつの罰だ。散々踏まれた後、ようやくそいつは逝けるんだ。だから踏んでやるのさ。それに、端を歩くと悪魔に出会う。その悪魔はどんな望みも叶えてくれるが、代わりに命を奪うのさ」

そう言いながら、ウィンザレオはドスドスと念入りに交差点の土を踏み固めた。

いくらなんでもそこまでしなくてもいいんじゃないかな。

と思ったけど、僕もウィンザレオに習い、踏み固めた。

「そうか。でも、じゃあさ、もし悪魔に出会ったら、何も望まなければいいんだね」

「そうすると『望みが無いなど、死人と同じだ』って言われて、魂だけ、すぐにその場で抜かれるらしいぜ」

「ええええ！ もう出会ったら死ぬしかないじゃない、そんなの！」

「そういうこった。グファファファファ」

「くだらん。先を急ぐぞ。日が暮れてしまう」

クリスは溜め息をつき、僕らをさっさと追い越した。

直後、

「望みを言え」

と、正面から、冷たく暗い声がした。

「なにっ？」

「えっ？」

「グファ」

それは真っ黒な人影だった。でも、そのシルエットは間違いなく人間じゃない。頭から伸びる二本の長い角がある。背中にはコウモリのような翼がある。全てが黒い中、大きく開いた口とただ丸いだけの目が、真っ赤な色を持っていた。

「へえ。おもしれえ。まさか本当に出てくるたあな」

「面白くないよ！ これってクリスのせいじゃないの？ 真ん中歩かないから！」

「なに？ 言いがかりはやめてくれないか、ディア。私は真ん中を通ったぞ。ただ、空中だっただけだ」

「飛び越してもダメじゃないの!？」

わあわあと言い合う僕らに、

「望みはないのか？」

と、悪魔は答えを急かした。

ゆらり、と一步近付いてる。

なにこれ？ 影が空中に浮かんでるみたいだ。

「ほれ。望みだとよ。おもしれーから、何か頼めよ。グファファファファ」

ウィンザレオに脇を肘で小突かれた。

何が面白いの？ 頼んでも頼まなくても殺されるんでしょ？

と、ここで一つ閃いた。

「あ！ そうだ！」

「お？ なんかあんのか、お姫様？」

「くだらん。こんな雑魚など、さっさと蹴散らせればいいだろう。時間の無駄だ」

鋭い目つきで体を白く輝かせるクリスを、

「待ってよ、クリス！」

と止めた後、僕は思い切ってお願いをしてみた。

「あのね。キミ、僕らと一緒に、シャルルのところまで、来てくれないかな？」

「なに？」

黒い影は、僕の言葉に目を瞬かせた。目が閉じた瞬間は、赤い口しか顔に無い。

「はあ？ おいおい、お姫様。シャルルまで巻き込むつもりか？」

「それはいい考えだな、ディア。親切と見せかけて、労せず面倒な女を殺せるわけだ」

クリスが手を叩いた。……って、どんだけ腹黒いの、クリス？ どっちが悪魔か分からないよ。それに、面倒な女って思ってたんだ、シャルルのこと。

「そんな願いでいいのか？」

悪魔は少しだけ首を傾げ、確認してきた。結構良心的な悪魔だ。

「うん。あ、着いてきて欲しいのはそうなんだけど、本当の願いはそこからだよ。僕がシャルルの願いを聞くからさ、キミには僕からその願いをしたいたんだ」

「な！ 馬鹿か、ディア！ それではお前は、シャルルの願いの為に、自分の命を！」

「うん。あげようと思う」

声を張り上げるクリスに、僕はこくりと頷いた。

「はあああああ？ マジかよ、お姫様？ こりやおもしれえ！ グフアフアフアフア！」

「笑い事ではない、ウィンザレオ！ もういい！ こんなたわけた魔物など、私が吹き飛ばして粉微塵にしてくれる！」

ぶあ、とクリスの背中に純白の翼が広がった。

不思議なことに、翼は白い外套（ガウン）を突き抜けているけど、それを破っていなかった。

「やめてよ、クリス！」

僕は慌てて悪魔を庇った。

「どけ、ディア！ 大体お前は、自分の命をなんだと思っているのだ！ お前が死ねば、私がどれほど……いや、お前の自由を願って死んでいったケイオスに、すまないとは思わないのかっ！」

「うっ」

僕は言葉に詰まった。

そうだ。

僕の今の自由は、ケイオスが自分を犠牲にして与えてくれたものなんだ。

悪魔を背に両手を広げたまま固まっていると、

「もめているようだな。ともかくそのシャルルという者の所へ行き、それから考えてはどうだ？ 願いを叶える対価も、そこで話し合おうではないか」

「え？ あ、うん」

意外なほどに常識的な提案が、影の悪魔から出された。振り向いて見た影の顔。赤くて丸い目が、ぱちぱちと規則的に瞬きをし、開いた口はまるで動かない。

……意外とユーモラスに見えてきた。

僕は影の悪魔に、そんな印象を抱き出していた。

と、いうわけで。

僕らは今、シャルルの家へと続く道を、再び歩き続けている。山道に入り結構歩いたと思う。そろそろ日が傾き始めている。道は九十九折となり、幅は馬車が入れないほど細くなった。あちこちから木の根が飛び出し、大きな石もごろごろと転がっているので、油断すると蹴躓く。

疲れてきた。ずっと上りだもんね。

僕、こんなに歩いたことないや、そういえば。

クリスとウィンザレオは障害物をひよいひよいと飛び越え、軽やかに足を運んでいる。

ウィンザレオなんて一番荷物が多いのに。さすがは戦士だなあ。

悪魔は？

振り返ると、影のような悪魔は、黙々と後ろについてきている。

足が動いてない。この悪魔、少し浮いてる。

ずるい。これなら、あんまり疲れないよ、きっと。

「ね、ねえ。キミ、名前はなんていうの？」

みんなにへばっていることを隠そうと、僕は悪魔に語りかけた。

「名前？ いや、私にそういうのは無い」

悪魔は僕の質問をさも意外そうに受け取ると、当然のようにそう答えた。

「ええっ？ 名前が無い？ うそでしょ？」

「そんなことで嘘をつく理由はない。私はずっと一人だから、名前など必要ない。呼ぶ者がいないのだから」

「あ」

なるほど。そうかも。でも。

「それ、寂しい理由だね」

僕はなんだか切なくなってそう言った。

「そうか？ 人は良く“寂しい”と思うことがあるらしいな。だが、私はそれがどういうものか、良く分からない。それを感じるとどうなるんだ？」

「どうって。そうだなあ。悲しくなって、涙が出るかな。なんにも出来なくなるくらい、気持ちが暗くなっていくんじゃないかな」

僕はケイオスを思ってそう答えた。クリスに教えてもらった最初の気持ちだ。

「分からない。悲しいというの知らない。しかし、何も出来なくなるのは困る。そんな気持ちは知りたくないものだ」

悪魔は真っ赤な目をぱちぱちとしてコウモリのような翼を振った。

ちょっとした風が起こり、辺りの落ち葉を舞い上がらせた。

「大事な者がいなければ、知ることの無い感情だからな。一人でいるというのも、幸せなことなのかも知れないな」

話を聞いていたらしく、クリスが口を挟んできた。悪魔を横目で見ると

リスには、いつもの高圧的な雰囲気が無い。クリスは悪魔を憐れんだり馬鹿にしたりしているわけじゃないみたいだ。

「グファ。最初っから知らなければそうだろうな。でも、知っちゃったらもうどうしようもねえ。その悪魔にも、あんまり深く関わらないこった」

先頭のウィンザレオが、前を向いたままそう言った。荒地を歩いているせいで、背中の剣や腰の装備ががちゃがちゃとうるさく鳴っている。僕はウィンザレオの言い方が少し気になった。

「その悪魔に“も”？ “も”ってどういうこと、ウィンザレオ？」

「ん？ ああ、なんでもねえ。深い意味はねえから、気にすんな」

ひらひらと振られるウィンザレオの大きな手が、「この話はお終いだ」と言っているように見えた。

強引だなあ。ま、いいか。

そこで僕はいいことを思いついた。

「そうだ！ 僕がキミに名前を付けてあげる！ どう？ 欲しいでしょ、名前！」

「私に、名前を？」

振り返って正面で手を打ち鳴らした僕に、悪魔は赤い瞳をぱちくりとさせている。

びっくりしてる。やった。

「は一。おいおい、お姫様。俺の話し、聞いてたか？ 聞いてても、理解出来たのか？」

ウィンザレオが盛大な溜め息をついて振り向いた。

ちょっと怒ってる？ なんで？

「いいではないか、ウィンザレオ。ペットに名前を付けるのと同じだろう」

「そういう例えはやめてよ、クリス！」

僕もちょっとそう思ってたけど、はっきり言ったら悪魔が気を悪くするじゃないか！

「ふーむ。面白い。では、名前を付けてくれ」

しかし、悪魔は気にしていなかった。

心が広いのかな？

「僕が付けていいの？」

「任せよう」

悪魔はこくりと頷いた。

「そんなの、不便なら『十字路の悪魔』でいいだろ？ 世間じゃそう呼ばれてんだから」

「どうしたの、ウィンザレオ？ 気に入らないの？ 悪魔に名前を付けるのが」

「そうじゃねえ。……もういい。勝手にしろ」

ウィンザレオはぷいっと前に向き直った。

「どうしたんだろ、ウィンザレオ？」

「さあな……」

クリスは意味ありげに青い目を逸らした。

銀の髪がさら、と鳴った。

「よし。じゃあね。キミの名前は……『ハッピー』だ！」

僕は悪魔に指を突きつけてそう叫んだ。

「かっこわるっ！ それ、犬の名前じゃないか！ やっぱりペットにする気か、ディア！」

「グファファファ！ ネーミングセンス、最悪だな、お姫様は！ グファファファ！」

クリスとウィンザレオが僕のネーミングを全否定した。

「な、何がおかしいの!? いいじゃないか、願いを叶えてくれるんだから！ それってハッピーでしょ？」

「はあっはっはっはっは！ そんな禍々しい姿のどこが『ハッピー』なんだ！ 見かけも考慮しないか、ディア！」

「違いねえ！ グファファファファファ！」

僕の抗議で、二人は更に笑い出す。

「ふむ。いい名だな。私は気に入った」

十字路の悪魔は赤い目を細めて何度も頷いている。

「でしょ？ いい名前だよね！」

僕は悪魔の肯定的な態度に勇気を得て、拳を小さく握り締めた。

やった！ 喜んでくれてる！

「「……マジで？」」

そんな悪魔を、二人は呆然と見つめていた。

奇妙な道連れを得た僕らは、ほどなく一軒の小さな家に辿り着いた。

赤い陶器の板が並べられた屋根と、白い土塀が印象的なその家は、周りに小さなお花がたくさん植えられていて、なんだか可愛らしい。

「着いたぜ。ここが、シャルルの家だ」

今まで登ってきた小高い山の頂上を少し越えた所が、こじんまりとした平地になっている。僕らは頂上からシャルルの家を見下ろしていた。

夕日に染まるシャルルの家。

あと二、三十歩も歩けば、辿り着ける所にある。

僕はついにここまで来たという感慨に耽り、言葉を無くしていた。

「ほれ、お姫様。その『カイロスの盾』を寄こしな。俺が届けてきてやるよ」

ウィンザレオは剣タコだらけの無骨な手をにゅ、と僕の眼前に突き出した。

「え？ いいよ。自分で渡すから」

僕は腰に後ろ向きでくくってあるカイロスの盾を外しにかかった。

「……会わねえ方がいい。シャルルも、それを望んでる」

「なんでそんな事が分かるの？」

決め付けるようなウィンザレオの物言いに、僕はちょっとむっとした。
「なんだ、ウィンザレオ？ 貴様、ここまで来て、実は全然違う家だったのを誤魔化そうとしているのではないだろうな？」

クリスも不機嫌になったみたいだ。

ここまで飛んでくるのに、ヘトヘトになってたもんね。

これで嘘だったなんて分かったら、たまんないよ。

「そうじゃねえ。ち。俺が信用出来ないってんなら、勝手にすればいい。別に俺は困らないからな」

ウィンザレオが面倒臭そうに頭の後ろをガリガリと搔いた。

「ウィンザレオは困らないの？ じゃあ、僕らが困るってこと？」

「まあな。シャルルだって困るはずだ」

「……僕らやシャルルの為に？ あは。ウィンザレオって、優しいね」

なんだか嬉しくなってそう言った。

クリスは「ほう」とウィンザレオを興味深そうに眺めている。

「ば！ 馬鹿言ってるじゃねえ！ オメーらなんざ、どうなっても知ったことかっ！ ああ、もう、どうでもいいか！ 行くぞ、オメーら！」

ウィンザレオは勢い良く踵を返して山を下りだした。

そこで、ハッピーが声をかけた。

「待て。私はいいのか？」

ウィンザレオは「ああん？」と仏頂面をして振り向くと、

「来たければ来ればいい」

そう言い放ってずんずんと歩き出した。

ゴンゴン。ゴンゴン。

ウィンザレオは青く塗られた板張りの玄関ドアに付いている真鍮製のノッカーを乱暴に叩いた。

「うおーい、シャルル。俺だー！ ウィンザレオだー！」

そして、とても乱暴に呼びかけた。

シャルルって女の子でしょ？

勇者ウィルの妹なんだから、へたしたら幼女って呼ばれるくらい小さいかも知れないのに。

怖すぎるんじゃないかなあ、それ？

そんな僕の心配は不要なものだった。

「えっ？ ウィンザレオ？ 本当にウィンザレオなのっ？」

ばん、と開け放たれたドアから、弾むような声を発して飛び出して来た女の子。

「ウィンザレオー！」

「おっとと。グファファファ。久しぶりだな、シャルル。グファファファ」

ウィルそっくりな赤い髪を靡かせた女の子は、一目散にウィンザレオの胸に飛び込むと、そのまま抱き上げられてくるくると振り回されている。

凄く嬉しそうで、見ているこちらまで幸せな気持ちになる。

ウィンザレオも満更ではないみたいだ。精悍だった顔が、にやけてる。

「もー！ 一ヶ月に一度はあたしに会いに来るって、約束したでしょ！」

どこに行ったたのよ、ウィンザレオ！」

「はあ？ んな約束したっけな？」

一転して怒り出した少女に、ウィンザレオはとんでもない返答をしていた。

うわあ。覚えてないんだ、ウィンザレオ。ひどいなあ。

「したわよ、ばかっ！ 半年も来ないで、もうっ！ 臭いし汚いし貧乏臭いし、とにかく上がってお風呂入りなさいよ！」

「わ、ととと。ちょ、ちょっと待て、シャルル。俺の他にも客がいるんだ」

シャルルは真っ赤な飾り気のないワンピースを波打たせながらウィンザレオの後ろに回り、背中をぐいぐい押している。

怒ってるけど、嬉しいんだ。

どっちも同じくらいなんだなあ、きっと。

そう思って見ていた僕だったが、ウィンザレオから「客」がいると聞かされた直後、シャルルの様子が一変した。

「客？ お客様？ 誰か連れてきたの、ウィンザレオ？」

それは冷たい声だった。

拒絶。

その言葉には他者を拒む気持ちが溢れていた。

賢者は、生きられるだけ生きるのではなく、
生きなければならないだけ生きる。

(ミシェル・ド・モンテーニュ)



「帰ってもらって、ウィンザレオ」

「出て来いよ、シャルル。こいつら、お前にどうしても会いたいんだってよ」

僕らがいる事に気が付いたシャルルは、すぐに家に閉じ籠ってしまっていた。ウィンザレオがノッカーをゴンゴン鳴らして呼びかけているけど、出てきそうな気配は今のところ見られない。

僕はウィンザレオに問いかけた。

「ねえ、ウィンザレオ。どうしてシャルルは僕らに会ってくれないの？」

次いで、クリスも訊ねた。

「うむ。どうやら我われだからというわけではなく、誰とも会いたくないようだが。なぜだ、ウィンザレオ？」

「シャルルに訊けよ。俺からは言いたくねえ」

ウィンザレオはぶっきらぼうに答えると、またノッカーを叩いた。

「そのシャルルが出て来ないのだ。これでは『鶏と卵』だろう」

僕らの少し後ろで静観していたハッピーが、開けたままの真っ赤な口を、少しも動かさずにそう言った。

どうなってるんだろう、ハッピーの口って？

それより。

「鶏と卵？ ねえ、ハッピー。どういうこと、それ？」

「鶏と卵。どちらが先にあったのか、という話しだ」

「えっ？ 卵でしょ？ 鶏は卵から生まれるんだから」

「では、その卵はどこから生まれる？」

「それはもちろん、鶏から……あっ」

「そういうことだ」

僕が一つの考えに行き当たったのを察してか、ハッピーがゆっくりと頷いた。

「くだらん話しをしている場合か、ディア」

クリスがそんな僕らを見て溜め息をついた。

むっ。なに、その態度？

「くだらない？ じゃあ、クリスにはどっちが先か分かっているの？」

「もちろんだ。私は天界にいたんだぞ」

絶対に分からないと思っていた僕の予想に反して、クリスは自信満々に胸を張った。そうすると、クリスの胸の大きさが良く分かる。

なんでクリスの胸って、こんなに膨らんでいるんだろう？ 何か入ってるのかな？

「グファファ！ そりゃ本当か？ 面白い！ どっちだ、天使ちゃん？」

シャルルに呼びかけていたウィンザレオも手を止めて、クリスをニヤニヤしながら見つめている。

「ちょっと、ウィンザレオ！ なんでこっちの話しに入ってくるの？ シャルルを呼んでよ！」

「ああ？ いいじゃねえか、ちっとくらい。シャルルはどこにも逃げねえよ」

「そういう問題じゃないよ！ 不真面目に思われるじゃないか！」

「んじゃ、おめーが呼べよ、お姫様。俺はクリスの答えが聞きたいんだ」

「僕だって知りたいもん！ あ、そうだ！ ハッピーに！」

頑として言う事を聞いてくれそうにないウィンザレオを諦め、僕はハッピーに目を向けた。

「断る。私も知りたいからだ。第一、そんな願いでいいのか？」

「うっ。……よく、ない……」

さくっと断るハッピーに、僕はあっさり弾かれた。

うーん。命懸けでするお願いでもないしなあ。ちょっと勿体無いよね。

「なんだなんだ。困ったやつらだな。仕方が無い、すぐに結論を教えてやろう。このままでは、本当にシャルルが出てきてくれなくなる」

揉める僕たちを、クリスは呆れ果てたように手を腰に置いて見回した。

「そうだね。早くお願い、クリス」

「グファ。ちやちやっとな」

「押さないでくれ。私は重さがないのだ」

クリスに向かって身を乗り出す僕とウィンザレオに、ハッピーが押し潰されそうになっている。

意外な感触。ちゃんと触れるし、なんだか少し温かい。黒猫って感じ。

僕は初めて触れたハッピーに、そんな感想を抱いていた。

クリスは一旦息を大きく吸い込むと、その薄い唇を開いた。

「鶏と卵。どちらが先かというと……」

僕はごくりと唾を飲み込んだ。

その時、後ろから小さな金属音がした。

「グファ！ つーかまーえたっ！」

「きゃあああ！ 放しなさいよ、ウィンザレオ！」

「えっ？ シャルルの声？」

突然大声を上げたウィンザレオとシャルルの悲鳴に驚いた僕は、何事かと振り返った。そこには、黒い布で目隠しをされたシャルルが、ウィンザレオに抱き上げられてジタバタしている姿があった。

「グファファ！ シャルルもその話が気になるってよ！ グファファ！」

「き、気になんかなってない！ いいから放して、ウィンザレオ！」

どうやらシャルルもクリスの答えが気になっていたらしい。聞き耳を立てようと扉を開けたところを、ウィンザレオに捕まったようだ。

それはいいけど。

「ねえ、ウィンザレオ。どうしてシャルルは目隠ししてるの？ 誰がやったの、それ？」

宙に浮かされて手足をばたばたとさせているシャルルのワンピースは、あちこちがめくれ上がり、あんまり直視しちや悪い気がした。後ろから腰を両手で持たれているんだから、シャルルの手は自由だ。

なんでシャルルは目隠しを取らないんだろう？ 自分でやったんだろうか？

「あの目隠しはウィンザレオがやったものだ、ディア。シャルルをドアの向こうから引きずり出すと同時に、目隠しまでしていた。凄まじいスピードだな」

「ええっ？ 凄いね、それ」

クリスは家の方を向いていたから、ウィンザレオの行動が確認出来たみたいだ。

「まあな」とウィンクするウィンザレオの目尻に寄るシワが、かわいく感じた。

「さ、シャルル。これなら大丈夫だろ？ こいつらの話を聞いてやれよ。こいつら、ウィルに頼まれてここまで来てんだからよ」

「えっ？ お兄さまに？」

とん、と地面に下ろされたシャルルが、目隠しされたまま、ウィンザレオを見上げた。

声のする方に向いただけだよ。見えるわけないし。

こうしてゆっくりシャルルを見ると、ウィルの面影は髪くらいかな、と僕は思った。髪は赤い滝みたいに真っ直ぐ肩まで伸びている。全体的に丸い顔の輪郭はほっぺたの膨らみがまだ目立つくらいに幼く、十二、三歳かな、と僕に予想させた。ふわりとした赤いワンピースを着ているのに、華奢な印象を与える体格は、小さくて頼りなくて儂げだ。

僕らは黙ってシャルルの答えを待った。

「……そう。ウィンザレオが連れて来る人たちに、間違いも無いでしょう。これなら顔も見ずに済むし。いいわ。入ってちょうだい。おもてなしは出来ないけれど」

やがて、シャルルは観念したようにそう言った。

ウィンザレオ、随分信頼されてるなあ。部下を見殺しにするような人なんだけど。でも、僕らの世話は焼いてくれているし。ウィンザレオって、良く分からない人だな。

そんな事を考えながら、僕らはシャルルの手を引くウィンザレオに続いて家に入った。

あ。

結局、鶏と卵は、どっちが先か聞いてない。

これからもっと大事な話をしなければならぬというのに、僕の気は散っていた。

ウィンザレオが開けたドアから、まずはシャルルが家に入る。ウィンザレオはシャルルの手を引き、誘導している。荒々しい見かけにはそぐわない優しいエスコートに、僕は少し感心していた。

板張りの床にブーツがゴツゴツと音を立てる。部屋は全体的に薄い緑に塗られていて、壁にはタマネギやじゃがいもがぶら下がっていた。部屋の中はなんだか甘い匂いがした。

「いい香りがするな。ポプリか」

クリスが壁にある額縁を見て呟いた。

乾燥させた花々が木枠に張り付けられている。その下に、小さな麻の袋がぶら下がり、揺れていた。香りはそこから来ているらしい。こじんまりとした部屋の中央には四人掛けの丸いテーブルセットが一揃い。その奥に土間があり、赤レンガで丸く組み上げられた薪窯があった。

きちんと整頓された家だ。

明るくて優しい雰囲気にも包まれている気がする。

僕は素朴なこの家にいい印象を抱いた。

「ほれ。座れよ、シャルル」

ウィンザレオが椅子を引いてシャルルを座らせた。

「ありがとう、ウィンザレオ」

シャルルはきちんとお礼を言って席に着いた。

「んじゃ、みんなテキトーに座れ。俺は飲み物でも用意してくるからよ」

「あ、うん」

勝手に土間の方へ行き、ごそごとと棚を漁るウィンザレオ。

シャルルにそれを気にしている様子は無い。

なんだかシャルルの本当のお兄ちゃんみたいだな、ウィンザレオ。

……あれ？　僕は普通の兄妹がどんな風かなんて、知らないはずだけど……？

僕はそう思いながら椅子に腰掛けた。

「待たせたな」

お盆に五つのティーカップを載せてウィンザレオが戻ってきたのは、たっぷり三十分以上も経ってからだった。

その間僕らは目隠しをしたシャルルとテーブルに着いていたわけだけれども。

……凄く、気まずかった。

誰も何も話さないし。僕から話しだす勇気もないし。

いきなり「ウィル、死んじゃったんだ」なんて言えないよ。僕には。

コトリと目の前にカップが置かれると、シャルルが口を開いた。

「いい香り。さすがはウィンザレオね。紅茶の淹れ方が上手だわ」

すう、と息を吸い込んだシャルルの口元は上がっていた。

「そうか？ お前んとこの茶葉、相変わらずいいもん置いてんなーって思ってたな。いくら俺でも、いい加減には淹れられなかったぜ。グファファ」

ウィンザレオはにやりと笑うと、僕らの前にもカップを次々置いていく。僕はシャルルに習って息を吸い込んだ。けど、何が特別なのか、僕には分からなかった。

「うーん。素晴らしい。色も濃すぎず申し分ない。カップしか持って来なかったのは照れ隠しかな、ウィンザレオ？ これだけの香りを出すには、ポットも事前に温めておかなければならないだろう？ 短い時間で一気に抽出しなければ、こうはならないはずだ」

「は？」

「なに？」

「グファ？」

僕とクリスとウィンザレオが、思わぬ紅茶評を突然に始めた者を見つめた。

それは先の尖った真っ黒な手で取っ手を持ち、カップを顔の前に掲げているハッピーだった。

「失礼していただくとしよう。……うん。やはりおいしい。これは茶葉の新鮮さもさることながら、水自体がおいしいからだ。私は紅茶を飲む度に、ここに住んでいて良かったと思う」

呆然と見守る僕らに頓着せず、ハッピーは真っ赤な目を細めて紅茶を啜った。

「あら？ 詳しい方がみえるのね。口調に気品を感じますし、高貴な方なのかしら？」

シャルルの声が明るくなった。

「いえいえ。私はどうってことのない、ただの悪魔にすぎない」

「悪魔？ うふふふふ。冗談もお上手なのね。ふふふふふ」

僕とクリスとウィンザレオが目を見合わせた。

ウィンザレオは苦笑いをしている。

どうしよう。

シャルル、思いっきり勘違いしちゃったみたいだ。

目隠しを取ったら冗談でもなんでもないことが分かると思うけど、ショックを受けたりしないかな？

また一つ心配事が増えた。

「茶葉は毎日お城から我が家に届けてもらっているの。別に頼んでいるわけじゃないけれど。裏庭に湧き水があるので、おいしいお水にも不自由しないのよ」

「ほう。それは羨ましい。そんな家に住んでいれば、人生の半分は幸せなことだろう」

「それは言えるかもしれないわ。うふふふふふ」

「はははははは」

その後も産地がどこかとか製法がどうしたとか盛り上がる二人を横目に、僕らは複雑な気持ちでお茶を啜った。

ところで。

ハッピー、紅茶飲んでても口が開いたままだけど。

なんでこぼれないんだろう？

僕は紅茶を口の中で転がした。

あ。本当においしいな、これ。

ウィンザレオってなんでも出来るんだなあ。

でも、この紅茶。飲みなれた味がするのはなぜだろう？

「本当においしい紅茶だね、ウィンザレオ。こんな事とは無縁そうなのに、どこで淹れ方なんて学んだの？」

この何気ない質問の答えは、僕にとって衝撃的なものだった。

「ありがとよ。この淹れ方はな。ケイオスに習ったんだ」

「……ケイオス？」

僕は訊き返した。

同名の別人、かな？

「魔王なら知ってんだろ？ 魔軍参謀のケイオスさ」

「も、もちろん知ってるけど。なんで？ なんでウィンザレオが？」

びっくりしすぎて声を上擦らせる僕を、クリスは冷静に見つめていた。

「毎年一度か二度、俺はあいつと遊んでた。遊びだったって、剣を使った真剣勝負だけだな。そんな時に、紅茶の淹れ方も教えてもらったのさ。グファファファ」

「ええええっ！ そうなの？ でも、二人ともちゃんと生きてるじゃない？」

「ケイオスは俺を殺す寸前で、いつも戦いを終わらせてくれたからな。強かったなあ、あいつ。この俺様が、全然敵わなかったぜ。グファファファ」

ウィンザレオは懐かしそうにケイオスとの思い出を語ってくれた。

戦ったあと、二人で紅茶を楽しんだこと。

酒を勧めるとケイオスが嫌がったこと。

珍しい果物を持っていくと、無表情だったケイオスが飛び上がって喜んでいたこと。

ウィンザレオは、僕の知らないケイオスを知っていた。

たくさん。たくさん。

「……あいつは、いいヤツだった。でも、もう会えないんだろう？」

「えっ？ ……うん。多分……」

ウィンザレオが僕の頬に手を伸ばす。

その指が僕の中から流れ出たものを拭きとった。

気付かないうちに泣いていた。

知らなかったケイオスが頭の中で微笑んでいたからだ。

クリス是一言も発さずに紅茶をこくりと飲んでいて。

「でも、そっかあ。ケイオスってやっぱり強かったんだね。そのケイオスに勝ちやっったウィルは、もっと強かったんだなあ」

あれ？ でも、ウィンザレオはウィルのこと、「弱いくせに」って言ったな？

「……昔は、な。ケイオスのやつ、年々弱ってやがったから……。ウィルと

戦った時にはどうなったのか……。ある程度、予想はつくけどな」

ウィンザレオは目を伏せて紅茶を口に運んだ。肘は行儀悪くテーブルについている。

「ケイオスが、弱ってた？」

記憶を漁ってみる。

けど、ケイオスのそんな素振りは見つからなかった。

クリス？

クリスに訊こうと目を向ける。クリスは腕を組んで眉間に皺を刻み、ティーカップを睨んでいた。

「……ちょっと待って。あなた、今、なんて言ったの？」

「え？ 僕？」

不意にシャルルに話しかけられ、僕の思考は停滞した。

シャルルの声はまた厳しいものになっている。

ケイオスのことは気になるけど……。後でまた訊こう。

「ディア。大丈夫か？ ちゃんと話せるのか？」

横からクリスが僕の肩に手を置いた。

「うん。大丈夫」

僕はしっかりと頷いた。

「実は……」

僕は意を決して話を始めた。

「待って」

「へ？」

が、すぐに出鼻を挫かれた。

「あなた」

「私か？」

クリスがシャルルに呼ばれ、自分を指差す。

て、目隠ししているシャルルには見えないけど。

何を言い出すんだろう？

僕は息を詰めて二人を交互に見つめた。

「結局、卵と鶏はどっちが先なの？」

「は？」

と、クリスが間抜けな声を出した。

えええっ!? このタイミングでその話なの!? 僕は椅子から軽くずり落ちた。

シャルルに向かって「聞いてみれば面白くもない話だぞ」と前置きし、「鶏だ」

クリスは力強く断言した。

「ええっ？ なぜ？」

シャルルは高い声で驚きを表わしている。

「鶏にしか、卵が作れないからだ。卵が無くば、鶏は生まれない。卵の始点は鶏だが、鶏の始点は違うところにある。だから、鶏が先なのだ」(注：2010、イギリス：シェフィールド大学、ワーウィック大学の共同研究結果)

僕らはクリスの話をふんふんと頷いて聞いた。

僕もうんうんと頷いてはみたけれど。

どうしよう。

全然クリスの言っている意味が分からない。

他のみんなは「なるほど」とか「そうか」とか言っているから分かっているみたいだ。

もっと詳しく訊きたいけれど……。

まあ、いいか。

こんなこと分からなくっても、別に問題ないもんね。

僕は大きく頷いた。自分に。

「……さて。では、すっきりとしたところで。ご用件は？」

シャルルが僕の方へくりっと首を向けた。

「ん？」

さっき言い出しかけた僕の方向を覚えてるんだ。

「あ、ああ。そうそう。あ、あのね、シャルル」

まずい。

出鼻を挫かれた上に、鶏と卵が引っかかって、なんだか頭がごちゃごちゃしてる。

焦りが出たのか、声がどもった。

「シャルル？ わたし、あなたにそんな風に呼ばれる筋合いないけれど」

「う」

冷たい。ハッピーとはあんなに打ち解けていたのに、僕には随分よそよそしい。当たり前なんだけど、なんだか悲しい。でも、そう思ったら返って頭がすっきりした。どうせもう嫌われているのなら、僕に失うものは何も無い。思い切って話してみよう。まずは挨拶。名乗らなくっちゃ。

「初めまして。僕は、ディア」

僕は席を立てて手を胸に腰を折った。

シャルルには見えないだろうけど、こういうのって雰囲気伝わって来るものだよ。

「ディア。初めまして。わたしはシャルル。シャルル・ハーバーライト。お

兄さまの働きにより、今は士爵をいただいている、一応貴族です」

すると、シャルルも席を立ち上がり、スカートの裾をつまんで可愛らしく屈んだ。

僕はその振る舞いに感心した。

しっかりした子だなあ。見た目は完全に子どもなのに。

やっぱり貴族ともなると、礼儀作法が身につくのかな？

「一応？ 貴族に一応とかあるの？」

ちょっと気になった。

「……ものを知らない人なのね。失礼だわ」

「えっ？」

僕の質問が気に入らなかつたらしい。

シャルルはどかっと椅子に座った。

僕、どんどん嫌われていくみたいだ。

その様子を見かねたのか気を遣ってくれたのか考えがないのか、ウィンザレオは一気に核心に迫ることを言い放った。

「グファファ。そう怒るなよ、シャルル。しゃーねーだろ。コイツ、ついこの間まで“魔王”だったんだから」

「ウ、ウィンザレオ！」

僕はあたふたうろたえた。

「魔王？」

シャルルはきよとんとして鸚鵡返しに呟いた。

まだまだ嫌われていきそうだ。

そんな予感がして、僕の頬に汗が伝った。

「そうだ。ここにいるディアは、魔王としてこの地上、いや『第二世界』に君臨する全てのモノの王なのだ。本来なら貴様のような小娘がそのような無礼な口を利ける相手ではない。そのつもりで話すことだな」

「ク、クリス！　なんでそんなに怖い言い方するの!？」

「お前が言わないから私が言っただけのこと。そもそも、お前がもっとしっかりしていれば、こんな小娘になめられることもないのだ。私にこんなことを言わせたくなければ、お前がちゃんと話すんだな」

「うぐうー」

と唸ることしか出来ない。

ぽかんとしているシャルルを睨み、クリスは言いたい放題だ。でも、僕には何も言い返せなかった。クリスはもとより、僕がどんな立場なのかも分からないからだ。僕は改めて自分の存在を不思議に思った。

「……意味が分からない。二人ほど、凄く気に障る人がいるわ。ウィンザレオ。悪いけど、この二人を追い出して」

「ええっ!？」

見れば、シャルルは腕を組んでぷくー、とほっぺを膨らましている。

気が強い子だなあ、シャルルって。

「グフアファ。知らねーよ、んなこたあ。俺はこいつらをここに連れて来るって契約をしたただけだからな。追い出したきゃ、自分でやりな」

「そんなの自分勝手だわ、ウィンザレオ！」

「そうさ。俺は自分勝手なヤツなのさ。知ってんだろ、んなこたあ。グフアファファ」

豪快に笑うウィンザレオに、シャルルは「く」と呻いて唇を噛んだ。

ウィンザレオ……こんな小さな子にも、容赦ないなあ。鬼だ。

なんか話がこじれそう。なんとかしなくちゃ！

「あ、ええっと、ごめんね、シャルル……いや、ハーバーライトさん。違うか。シャルル卿？」

「士爵を持つのはお兄さま。わたしは単なるその家人。卿など付けて呼ばれる人間ではないわ。大体、わたしは女の子なんだし。もう。シャルルで結構」

「そ、そうなんだ。じゃあ、失礼してシャルルって呼ばせてもらうよ」

「ふん。好きにすれば」

シャルルはぷいっと横を向いて答えた。

つ、疲れる。この子、凄く疲れるよう。

ちら、とクリスを見ると、イライラと足を揺すっている。

わあああ！ また何か言い出しそう！ こっちも疲れる！

ウィンザレオは「ぷぷぷ」とか含み笑いしてる。面白がってるな、絶対。

ハッピーは相変わらずまんまるな赤い目をぱちぱちと瞬かせ、大きく裂けた口を開けたままに紅茶を楽しんでいる。

ほ。ハッピーだけが、僕の心のオアシスだよ。

よし。話を続けよう。

ハッピーに癒された僕は、シャルルに顔を向けた。

「えっと。僕が魔王っていうのは、どうやら本当らしくて。昨日まで、《ギルトサバスの城》で、勇者ウィルが来るのを待ちわびていたんだけど」

そこまで言うとシャルルは「はあ？」と首を捻った。

「なんで自分を倒しに来るお兄さまを待ちわびるの？ あなた、頭おかしいでしょ？」

ひどい。とうとう頭を疑われ出しちゃった。

いや。挫けちゃだめだ。

「う、うん。そうだよ。僕、そんなこと知らなくて。魔水晶って物を

使ってずっとウィルたちを見てただけど、そんなの全然分からなくて。
昨日、ウィルが僕の部屋に来るまで、ウィルに『お前を殺す』って言われるまで……何も、知らなかったんだ……」

思い出したら悲しくなった。
話すことで状況の理解が深まった。
それが余計に悲しさを加速させた。

「……うそよ」

シャルルは隣に座るウィンザレオの手をぎゅ、と握った。

ウィンザレオは無言でその手を握り返した。

ウィンザレオに、もう笑みはなかった。

表情の無いウィンザレオを見るのは初めてだ。

ずき、と胸が痛んだ。

シャルルはそれがどういうことか、理解しているみたいだ。

でも、きっと。

認めたくは、ない、と思う。

もう、話すのをやめようか？

……だめだ。きっと、僕が話さなくっても、誰かが事実を告げに来る。

その“誰か”は、ただの結果しか知らないはずだ。

ちゃんと全てを教えてあげたい。

ウィルがどれだけ頑張ったかを、シャルルに伝えてあげたい。

これは僕にしか出来ない。

これは、僕の役割だ！

肩をふるふると震わせ出したシャルルを、僕はしっかりと見つめた。

「それでね。ウィルに、キミのことを、頼むっ、て……『頼む』って言われたんだ。だから、僕らはここに来た。シャルルに会いに。シャルルに……ウィルの、“最期の言葉”を、伝える、ため、に……」

言い終わるか終わらないかで、テーブルがバン、と激しい音を立てた。

「うそよっ！」

シャルルがテーブルを叩いて立ち上がっていた。もう片方の手はウィンザレオの手に爪を食い込ませている。そこから少し血が滲んでいる。でも、ウィンザレオは眉一つ動かさず、それに耐えていた。

その爪は、僕の心にも突き刺さった。

痛い。こころが、痛い。

「うそだわ！ だって、意味が分からないもの！ どうして倒しに行った魔王に、わたしのことを頼んだりするのっ!? そんなことはあり得ないでしょうっ!？」

「落ち着け、シャルル。あり得ないって言うんなら、その魔王がこんなことをしに来る理由も無いだろう？ こんなうそを吐いて、こいつに何の得がある？」

「ウィンザレオ！ でもっ！ でもっ……！」

取り乱したシャルルから、僕は聞くのも辛い言葉を浴びた。

「だって！ だって魔王は“悪”なのよ！ だからお兄さまは倒しに行った！ みんなの為に、命を懸けて！ その魔王がわたしのために？ お兄さまの頼みを聞いて？ そんないいことをする魔王なんて、魔王じゃないわ！ それじゃあ、お兄さまは何のためにっ……一体、何の、ためにっ……！」

僕はぎゅっと目を閉じた。食い縛った歯がぎり、と鳴った。

本当にそうだ。僕は、“悪”でいるべきだったのかも知れない。

そうだったなら、僕もこんなに……悲しまなくて、済んだのに……。

僕は取り外しておいた『カイロスの盾』を、ごとりとテーブルに置いた。

「ウィルから預かって来た『カイロスの盾』だよ。目隠ししてるけど、分かる？」

僕はテーブルを叩き付けたままになっているシャルルの手をそっと取り上げ、カイロスの盾に誘導した。シャルルは震える手で盾を撫でた。その手は何度も盾の上を、端から端まで確認する。縁や中央にある浮き彫りの細工を、シャルルの小さな指がなぞる。

目隠しの下から、涙が一筋二筋と流れていった。

「お兄さまっ……」

小さな銀色の盾を胸に抱き締め、シャルルはその場に膝をついた。

「ひっ、ひっ」という苦しげなシャルルの呼吸が僕の耳を責める。

苦しい。辛い。そして、痛い。

でも、この姿を見なくっちゃ。
これが僕の存在した結果だ。この“セカイ”に存在する、僕の“業”なんだ。

いっそ死んでしまいたい。ここから消えて無くなりたい。

でも、それは出来ない。

クリスが、僕を助けてくれたから。

ケイオスが、僕を生かしてくれたから。

僕はこの“痛み”を抱え、生きてゆく。

何が出来るか分からない。

でも。

一人でも多くの人を幸せにしたい。

それが僕の“贖罪”だ。

僕はこの“セカイ”で生きてゆく。

いつか、心から笑える日を迎えるために――

シャルルの嗚咽とむせび泣く声だけがしんと静まり返った部屋に響いている。僕はかける言葉を見つけられず、ただシャルルを見ていた。クリスは厳しい表情でシャルルを睨みつけている。ハッピーは普通だ。どうもシャルルの気持ちが分かっていないみたいだ。

ウィンザレオがシャルルの頭に手を乗せた。

「しっかりしろよ、シャルル。分かっていたことだろう？」

「……分かっていたって……分かっていたって！ 悲しいものは悲しいのっ！」

シャルルは激しくかぶりを振った。振り落とされた涙が、ぽとぽとと床を叩いた。

僕はその会話に驚き、席を離れてウィンザレオの腕に手を置いた。

「それ、どういうこと、ウィンザレオ？ 分かってた？」

「まあな。ウィルが死ぬことは知っていた。なんとか出来ねえかと思って《ギルトサバスの城》の周りをちよろちよろしてたんだが……。結局、アーク公国の正騎士どもに邪魔されてな。チャンスが掴めなかった」

ウィンザレオはそう言うと自虐的な微笑を浮かべた。

「そうか。貴様は魔王討伐軍に選ばれず、やむなくあそこにいたんだったな。選ばれなかったのは、その飛び抜けた強さゆえ、だな。はっ。全く、人間とはつくづく馬鹿な生き物だ」

クリスはウィンザレオの立場を即座に理解したみたいだ。

「グフア。俺もそう思うぜ。俺が行きゃあ、手柄を全部取られちゃうとでも思ったんだろ。俺はそんなものに興味はなかったんだがな」

太い銀色の眉を下げたウィンザレオの顔には、“諦め”が滲んでいた。

「素直に正騎士団の言いなりになるとは、キミらしくないように思うが。強引に乗り込めば良かったのではないかな？」

ハッピーはカップを置くと、ウィンザレオに首を傾げて問いかけた。

「なんだか優雅な動きだ。」

「うるせえな、この悪魔は。そんなこた、どうだっていいだろう」

ウィンザレオはむっとしてハッピーを睨む。

「ははあ。シャルルか。この小娘が心配で、無茶できなかつたんだな。おそらくはウィルを騎士団に取り込む際、二人を《アルクDESTA》で庇護する旨の契約がなされたのだろう？ でなければ、領主がこんな小娘一人のご機嫌を取る理由がない」

そんなウィンザレオの心を見抜いたのか、クリスが語り始めた。

「ご機嫌取り？ 毎日紅茶を届けたり、ってことかな？」

「正騎士団が貴様を反逆者と見なせば、ウィルも貴様を討たねばならなくなるはずだ。助けるつもりが敵になっては仕方がない。なるほど、いくら力があるとも、それでは動けまい。馬鹿過ぎる。本当に、人間とは馬鹿

過ぎる生き物だ」

「おいっ！ てめえ、それをシャルルの前で言うなあっ！」

「ウィンザレオ！」

目にも留まらぬスピードで、クリスの胸倉を片手で掴んで持ち上げるウィンザレオ。僕は一言だけ発するのがやっとだった。ウィンザレオは本気で怒っているみたいだ。宙吊りにされたクリスは「く」と呻いて自分を掴むウィンザレオの腕に爪を立てている。

でも、そうか。そんなことを聞かされれば、シャルルは「自分のせいで」って思いつめるかも知れない。これは、クリスが悪い。分かっても、言っちゃダメなことだってあるんだ！

「ぐ……無礼な“ケダモノ”め。私は第一世界の天使長、クリス・クロスなのだ。今すぐその汚い手を離せ。さもなくば……」

クリスの背中から、ぶわ、と白い翼が広がった。

まずい！ 白い羽を撃ち出すつもりだ！

「ダメだよ、クリス！　今のはクリスが悪いよ！」

「ディア？」

真っ白に輝き出した翼を僕は後ろからぎゅ、とまとめて抱き締めた。

「ウィンザレオ！　手を離して！　クリスを許してあげて！」

そして僕はウィンザレオに向かって叫んだ。

ダメだ！　二人が本気で戦えば、この家だって吹き飛んじやう！

「お姫様……に、言われちゃ、しゃーねえか。大丈夫だ。そんな泣きそうな顔、すんじゃねえよ。グフアファ」

ぱ、とウィンザレオが手を離す。

クリスはどすん、と椅子に腰を落とした。

「あう」

僕はどて、と床に尻餅をついた。

「ありがとう、ウィンザレオ。ごめんね」

ほ、と胸を撫で下ろし、僕は力ない笑顔を作った。

「げほ。ち。運のいいやつめ。ディアが止めねば、殺してやるものを」

クリスは喉をさすりながら首を振った。

クリス、全然自分が悪いとか思っていないなあ。もう。

「ウィンザレオ……」

「ああ、いる。ここにいるぜ」

シャルルは立ち上がってよたよたとウィンザレオを捜している。

目隠しされたままのシャルルを、ウィンザレオが抱き締めた。

どうしよう。ウィルの最期の言葉も伝えたいけど……。一呼吸、置いた方がいいかな？

そう考え、僕はシャルルに対する一番の疑問を口にした。

「ねえ、シャルル。訊いてもいいかな？　ウィルが、その、死ぬ、って、どうして分かっていたの？　それは、ウィンザレオが教えてくれないキミのことと、何か関係があるの？　その目隠しとも……？」

「……………」

シャルルはウィンザレオの腰に手を回したまま、しばらく無言で動きを止めた。

そして、小声で答えた。

「……そうよ。あなたはものを知らないみたいだけど、悪い人ではないみたいね。魔王のくせに、おかしい話ね」

シャルルはくす、と一瞬笑った。

「教えてあげてもいいけれど……。わたしの質問に、正直に答えて」

ウィンザレオから体を離したシャルルは僕に向かうと、また冷たい口調になった。

「うん。正直に答えるよ」

僕は頷いた。

シャルルがどういう子かを知りたい。

ウィルに『頼む』って言われたんだ。

助けたいし、力になりたい。

でも、何も知らない今のままじゃ、どうしていいかも分からない。

僕はそう考えた。

シャルルは僕の答えに満足したように口元を緩める。

でも、それはすぐに引き締められた。

直後、訊かれたくはなかった事柄が、シャルルから投げ掛けられた。

「お兄さまを殺したのは、誰？ あなたは優しい。魔王なのに、優しいわ。本当に、あなたがお兄さまを殺したの？ もしそうなら、どんな状況でそうなったの？ わたしは、それが知りたい。お願い。正直に。真実を。わたしに、教えて……」

ぴん、とした空気が部屋に張り詰めた。

「そうだよ。僕がウィルを殺したんだ」

僕は迷うことなくそう答えた。

クリスががばっと僕に顔を向けたけど、無視する。

シャルルは全く動かない。傍らに立つウィンザレオの手を握ったままだ。

「ウィルは先頭を切って僕の部屋まで辿り着いた。ウィルは僕を倒すって、剣を振り上げた。だから、僕はその剣を受けた。強かった。ウィルは、とっても強かったよ……」

シャルルもウィンザレオもクリスもハッピーも、僕の話をも黙って聞いてくれた。

クリスが何か言いたそうにしたけど、僕はそれを目で制した。

いいんだ。うそは言っていないから。本当のことだから。

クリスがウィルを殺したのは、僕を助けるためだった。

僕がウィルとちゃんと戦っていれば、もしかしたら死ななくて済んだかも知れない。

僕があんなに強かったウィルを相手にして、勝てたかどうかは分からないけど。

僕が抵抗しなかったせいでウィルは死んだ。

だから、僕が殺したも同然なんだ。

僕はそう思うようになっていた。

「……そう。お兄さまは、勇敢だったのね？」

シャルルは俯いている。

「うん。ウィルは仲間の死にも負けなかった。凄く、勇敢だったよ。それで、最期にこう言ったんだ。『ごめん』って。シャルルに、『先に逝ってしまっごめん』って。そして、『お前は、元気で、幸せになってくれ』って。そう、言ってた……」

最後まで言い切ると、胸のつかえが取れた気がした。

少し、楽になれた気がした。

でも。

それは、僕の自己満足だった。

直後、僕はそれを思い知る。

シャルルが顔を上げ、ウィンザレオから手を離れた。

「分かったわ。分かった。お兄さまは、わたしを心配してくれていたのね」

シャルルは両手を頭の後ろに回した。

「シャルル！」

ウィンザレオが叫んだ。

「あなたは、そんなお兄さまを、わたしから奪ったのね。わたしの唯一の肉親。最愛のお兄さまを」

ぱら、と黒い布がほどけ、床に落ちた。

露になったシャルルの目は閉じられている。

「むっ！ なんだ、このでたらめな魔力は!?!」

クリスが椅子から腰を浮かせた。

「許さない。わたしは、あなたを許さない！」

かっつとシャルルの碧眼が見開かれた。

青い炎を宿したその瞳には、僕が映っている。

「わたしはあなたに宣告する。『死』の時を教えてあげる！」

「やめねえか、シャルル！ そいつは魔王なんだぞ！」

ウィンザレオの反応が遅れた。目を塞ごうと伸びた手は、間に合わなかった。

「ディアーツ！」

クリスの翼が部屋一杯に広がった。けど、それも間に合いそうにない。
「いいえ。絶対に止めないわ。時を映せ、我が瞳！ 『クロノ・リード』！」
「うわ！ うわあああああ！」
シャルルの瞳から青い光の奔流が湧き起こり、僕を飲み込んでゆく。
な、なんだ、これ!? 体が動かない！ 感覚が曖昧になってゆく！
落ちる！
直後、自分がシャルルと溶け合うように感じて――
僕は、意識を手放した。

「う……」

目を開けると、灰色の空が広がっていた。

「ここは……？」

寝転んでいたらしい。僕は立ち上がって辺りを見回した。

鬱蒼と茂る木々の間から、遠くにある山々の稜線が連なっているのが見えた。僕はかなり見晴らしのいい所にいるようだ。

でも、本来なら緑に覆われているはずの木々や山々は、全てグレーに塗り潰されている。

僕は振り返って後ろを見た。

「これは！ シャルルの家だ……」

さっきまで中でみんなと話していたシャルルの家が、僕の背後に建っている。

でも、素朴でかわいらしいその家も、周りに咲く小さな花々も、全部色が失われていた。

「色の無い、セカイ……？」

そこに“命”の気配は無かった。

形は同じはずなのに、色が無いだけでこんなにも寂寥感があるなんて。

寒々とした灰色の光景に、僕は心細さを感じずにはいられなかった。

無意識に自分の体を抱き締めた時、天空から声が降りてきた。

「ここは、わたしのセカイ。わたしの、心のセカイ」

「シャルル!? その声は、シャルルだね? どこにいるのっ？」

「すぐに行くわ。……あら? あなた、本当に魔王なの? 間違えて、関係ない女の子を連れて来ちゃったのかしら? 覚えた声を頼りにして魔法を発動させる間際、『え?』とは思ったけど……」

やはりシャルルの姿はない。声しかしない。

でも、魔法? これはシャルルの魔法? シャルルは、魔法が使えたのか!

僕はその事実に驚きながら、シャルルの不安を取り除こうと返事をした。

「そ、そうだよ。僕が、『魔王』。ディアボロって呼ばれていた、魔王なんだ。本当の名前はディアっていうらしいけど」

「……? 意味が分からないわ。でも、魔王ならそれでいい」

声が近くなったように感じ、僕は素早く首を巡らせた。

「ここよ」

「シャルル……っ！」

すうっと空間から浮き出るように姿を現したシャルルにも色が無い。

でも、一つだけ色を持つものがあつた。

それはシャルルの頭上に浮いている。僕はそれを見上げた。

「槍？」

それは槍だった。でも、普通の槍じゃない。

銀色に輝くその槍は、とにかく長い。太く、大きい。

《アルクデスタ》の街に城まで伸びていたメインストリートがあったけど、あれぐらいは優にある。

そして、両端は畳んだ傘のように尖っていて、普通の槍にあるはずの“柄尻”が、“石突”が無かった。

「なに、これ……？」

シャルルの瞳が静かに細くなり、僕を見据えた。

「この槍は『対極の槍』、というの。これは狙いを定めた対象の“矛盾”を突き刺し、抉り、破壊する。“対象”ってなんだと思う？ 破壊されるとどうなると思う？」

表情の無いシャルルの説明に合わせるかのように、槍はゆっくりと上空で回転を始めた。

僕はシャルルを視界に収めたまま、首を左右に振った。

「“対象”は、あなたの“心”。そして、破壊されれば“精神”が“死ぬ”わ」

「“精神”が、“死ぬ”……？」

僕にはシャルルの言っている意味が分からなかった。

「人はね。“肉体”と“魂”、そして“精神”から成り立っているわ。このうちの、どれか一つが欠けても、もう人としては生きられない」

「えっ……？」

僕はこの話を聞いた事があった。

ケイオスから、聞いていた。

『いいですか、ディアボロ様。船に例えるならば、肉体は船体、魂は帆。そして、精神は舵です。船体はそれだけでも水に浮き、帆はそれだけでも風を受けることが出来ます。しかし、舵はそれだけでは役に立たない。舵は二つをコントロールする事でしか、価値を得られないのです』

じゃあ、精神を壊されるって？

色の無いシャルルの腕が、ゆっくりと上がってゆく。ぴんと立てられた人差し指が、頭上の巨大な槍を指す。

ふと背後に気配を感じ振り返る。

真後ろに、僕の五倍はありそうな、真っ白な十字架が立っていた。

「あなたの精神は肉体とも魂とも切り離され、わたしのセカイに囚われたわ。知ってる？ 精神は意思であり、それ自体にはなんの力も無いの。ここでは、何も出来ないわ。ただ、わたしに貫かれ……死ぬしかないのよ！」

シャルルの腕が僕に向けられた。人差し指は真っ直ぐ僕を捉えている。

刹那、

「うあああああああッ！」

僕の体は巨大な槍に貫かれ、背後の十字架に激突した。槍は僕ごと十字架を貫通し、動きを止めた。

「あ、うあ、ああ……」

僕は十字架の真ん中で、槍に縫い取られた。

腹部から伸びる銀の槍は、遥か向こうまで伸びている。切っ先が、鋭い光を放った。

激痛が全身を駆け巡る。

痛い。いた、い。

震える手を、お腹から生えたような槍にぺたりと置く。

ひんやりとした感触と共に、ずしりとした重厚感を得て、僕ははっきりと理解した。

これは、僕の手では抜けない、と。

「痛い？ 痛いでしょう？ それがわたしの心の痛み。お兄さまを失った、わたしの痛み。あなたはそれを味わって、自分が何をしたのかを、ゆっくりと理解すればいいわ」

どこからか吹き始めた風に赤いはずの髪を揺らし、シャルルが口角を吊り上げた。

満足そう、だ。

僕が苦しむ姿を見て、シャルルは欲求を満たしている。

この感じは、知っている。ウィルたちが僕を切り刻んだときと……同じ、だ。

気付けば周りには何も無くなっていた。

シャルルの家も、花も、山々も。

一面灰色のセカイの中、僕と、僕を縫い付けた十字架と槍。そして、グレーのシャルルだけが存在している。

どれぐらいそうしていたのか分からない。痛みは時間を遅く感じさせるから。

そのうち、ぴくぴくと蠢く僕に、シャルルが声をかけてきた。

「……やっぱり、これぐらいでは壊れないのね。さすがは魔王、と言ったところかしら？」

シャルルは腰に手を当てて、溜め息混じりにそう言った。

「もうやめて」と言おうとして、僕は口を開き……すぐに閉じた。

これがシャルルの悲しみだから。

これは僕が与えた悲しみだから。

このままだとどうなるのか、僕には分からないけれど。

このまま。

シャルルの為に、痛みを受けよう。

僕はそう思った。

ただ、涙が流れた。

これは、シャルルのためのもの？

それとも、自分のためのもの……？

「何か言いかけたわね？ 助けを求めても無駄よ。わたしはもちろん、外にいる人も、誰もあなたを助けはしないわ。物理的な力では、この『セカイ』は壊せない。現実世界で、わたしとあなたの肉体は、力を失くして倒れているわ。外では、きっと必死でわたしたちを目覚めさせようとしているでしょうけど……。無駄よ。それはわたしの意思でしか出来ないわ」

「そう。分かったよ、シャルル」

そう言おうとしたけど、痛くて声が出せなかった。代わりに、僕は小さく頷いた。

「まだ考える力があるようね？ ふふふ。でも、もうそれも出来なくなるわ。ここからがわたしの本当の『力』。『対極の槍』が持つ能力『クロノ・リード』の、真骨頂なんですもの」

だらりと垂れた自分の頭。

大きな十字架に磔にされて、見下ろす霞んだ視界に、シャルルが笑っているのを確認出来た。

直後、お腹から伸びている槍が更に輝きを強めた。

凄まじい魔力を感じる。ウィルからも魔力を感じたけど……。こんなに強くはなかった。

シャルルは何をするつもりなんだろう？

こんなに膨大な魔力を、全て僕に向けるんだろうか？

こんなの、とてもじゃないけど、無事でいられる気がしない。

怖い――

僕はシャルルに恐怖した。

「行くわよ」

シャルルが槍に手をかざした。

「う、あああああつ！」

槍は一気に膨らんで、僕を内部から——お腹から、引き裂いた。

「ぎやあああああつ！」

自分がばらばらになる痛みに、気が遠くなる。

——でも、それはすぐに収まり、

「あ。あれ？」

僕は、真っ白な石壁に囲まれた空間にちょこんとへたり込んでいた。

手を見る。足を見る。ちゃんと体に繋がっている。

でも、何かがおかしい。

僕は僕の座り込んでいる姿を、上から見ていた。

自分がいる。

僕は自分を見下ろしていた。

「——あれは、あなた。過去のあなたよ」

「シャ、シャルル!? どこ? どこにいるの？」

見回すけど、姿はなかった。それどころか、自分の存在さえ曖昧だ。

また? どうなってるの、これ?

「これから、あなたは自分が何をしてきたのか、そして、これからどうなるのかを見ることになるわ」

シャルルの声は、抑揚無くそう告げた。

「誰もが、過去に罪を持っている。そして、未来には死の運命が待っている。わたしは精神のみで時間を自在に行き来して、それを対象に見せられる。それが『クロノ・リード』の力なの」

「クロノ・リードの、『力』……」

「そうよ。今までは制御出来ずに、いろいろな人の過去と未来を、無意識に覗いてしまったわ。その度、わたしは深い悲しみに襲われた。この『セカイ』の残酷さを知ったから。でも、今日は違う。あなたへの“怒り”が、この恐ろしい力を、わたしに制御させているんだわ」

僕は自我の境界も認識できないまま、シャルルの言葉を理解しようとした。

でも、どう考えても分からない。

これが、何だっていうんだろう?

ただ、ウィンザレオがシャルルの事を教えてくれなかったり、目隠しをした理由は、きつとこれなんだと思った。

「人は何かを守るため、誰かを守るために、何かを壊し、誰かを殺して生きているわ。個人的には正義でも、全体的には悪を為してしか生きられない。それでも人は生を願い、幸せを求めるの。それがいかに残酷で間違っ

ているか。はっきりと目の当たりにし、精神を保っていられる者はいないのよ」

「シャルル……」

僕は考える。

これが、こんな小さな女の子の言う事だろうか？

シャルルは、今までに何をその目で見て来たんだらうか？

『なんつーか。シャルルには、何も無い。何も無い者には、何も必要ないだらう？』

いつかウィンザレオの言っていたことが脳裏に蘇った。

瞬間、僕は理解出来た気がした。

シャルルは、絶望しているんじゃないだらうか？

このセカイに。

このセカイの人々に。

そして、自分を置いて死ぬ事を知ってしまった、ウィルに――

「見なさい。自分の姿を。見なさい。自分の罪を。そして知るのよ。その果てに、どんな死が待っているかを」

「僕の、罪？ 僕の……死……？」

眼下で、“僕”が動き出した。

僕は白い石組みで形作られた、神殿のような建物の一室にいる。

「うっ！」

瞬間、脳内が真っ白にフラッシュバックした。

突然、今まで思い出せなかった記憶が蘇った。

僕はここを知っている。

ここは、僕の生まれ育ったところ。

ここは。“天界”だ！

アーチ型の出入り口が四方にある。正面の入口から、カツン、コツンという足音が近付いてきた。

昔の“僕”が、そちらを見やる。

「――本当に行くのか、ディア？」

やがて顔を出したのは、クリスだった。

《ギルトサバスの城》で初めて現れた時と同じ、ゆったりとした優雅な白い布が、胸と腰だけを隠している。

背中には真っ白な翼が、神秘的な光を放っていた。

表情は暗い。何かを心配しているみたい。

その時の僕が、クリスに答えた。

「——うん。僕がやらなくっちゃいけないんだ。誰にも出来ない事だもん。そうでしょ、クリス？」

にっこりと笑う僕の頭に、角は無い。

クリスと同じような白い布を片方の肩だけから垂れ下がらせて、裾を床に引き摺りながら歩く僕。

体は全体的に淡い光を放っている。髪は銀色。今の僕は、金色の髪なのに。

それよりなにより。

僕の背中にも、翼があった。

クリスと同じ、輝く白い翼が！

「ディアツ……！ 確かに、これはお前で無くば不可能だが……くそっ！

何が『魔王』だ！ 何が『第二世界』の平和のためだっ！ クソジジイめっ！ なぜ、人間などにあれほど肩入れするのだっ！」

下から覗き込む僕に向かって、クリスが毒づいた。

かなり怒っているらしい。

「こら、クリス。そんなことを言うんじゃない」

「ケイオスか。ち。何を偉そうに」

右手の入口から余裕を感じさせる足取りでこの部屋に入り、クリスに注意をしたのはケイオスだった。

でも。

ケイオスは僕と同じような服装で。

角も無ければ、髪も水色じゃなくって。

長い爪もないし、背中には翼もある。

クリスにそっくりだ。

見下ろす”現在”の僕は、驚きを隠せなかった。

シャルルは何も言わない。

気配はあるけど、ただ見ているだけのつもりかな？

「ふん。ケイオスはディアと一緒に『第二世界』に降り立つから、そんな事が言えるのだ。残される私の気持ちも考えてみる。どれだけ心配になるか、分かるはずだ」

クリスは唇を突き出し、ケイオスを恨めしそうに睨んでいる。

え？ クリスは、ここに残る予定だったの？

じゃ、なんで？ なんで、“現在”、僕と一緒にいるんだろう？

いや、なぜ《ギルトサバスの城》にいたんだろう？

「ふふん。それはお気の毒様だな。私はディアについていくよう、『主神』直々に命じられたんだ。お前は指名されなかった。それは普段の行いの差だ。恨むなら、自分を恨むことだな」

「ちょ、ちょっと、ケイオス」

クリスに向かって舌を出すケイオスに、僕は後ろから抱き締められた。
「あ！ こらあつ、ケイオス！ 私のディアに、気安く触るんじゃないっ！」
「ちょ、クリスツ……むぐう！」
僕はケイオスの懐から剥ぎ取られ、クリスの胸に抱き寄せられた。
苦しい！ 顔が胸に埋まっちゃったよ！ 息が出来ない！
僕はクリスを突き飛ばした。
「……ぷはっ！ 苦しいじゃないか、クリス！ 僕を殺すつもり!?!」
「あう。そ、そんなつもりは！ 怒らないでくれ、ディア」
僕に怒られ、情け無い顔をするクリス。
「はあっはっはっは！ そら見ろ！ お前はそんな風だから、指名されな
かったんだ！ はっはっはっはっは！」
そんなクリスを指差して、大笑いするケイオス。
「あは。そうかもね。あはははは」
僕もつられて笑った。
温かい。ここの空気は、優しくって心地いい。
これが三人で一緒に笑った最後の日だった。
僕はこの次の日、ケイオスを伴って、『第二世界』へと降りていった――

——到着した《ギルトサバスの城》は、暗かった。
天空から舞い降りた僕たちは、城に入って驚愕した。
中には、夥しい数の“死体”が並んでいたからだ。
人のような形をしているけど、それらは間違いなく人じゃない。
ましてや、僕らのような翼もない。
真っ黒で角が飛び出していて醜くて。

腐りかけた肉が放つ異臭の立ち込めた城内で、僕らはしばらく、言葉をなくして、ただ立ち尽くしていた。

ケイオスが掠れた声で話した。

「——これが、お前の選んだ道だ。いずれ、我われもこうなるだろう。人間たちの『闇』を吸収し続ける、この《ギルトサバスの城》で——我われは、こうして力尽きるまで、『闇』を取り込み続けるのだ……」

ぎゅ、とケイオスの拳が握られている。

やっぱり、納得がいかないんだろう。

なぜ、僕らがこんな役目を与えられたのか？

なぜ、人間たちの為に、自分が犠牲にならなければならないのか？

放置しておけば『セカイ』に満ち、カオスを招く大罪たち。

人々の、暴食、色欲、強欲、憂鬱、憤怒、怠惰、虚飾、傲慢……ありとあらゆる『罪』を飲み込み、僕らは『セカイ』を守るんだ。

この体が朽ちるまで。この心が腐るまで。

僕らは。

主神『アトウム』に従い、この命を燃やすんだ——

「——これが……僕が『魔王』になった、理由……？」

僕はこの空間に溶け込んでいるらしい。意識だけの状態で、自分の過去を見続けた。

「人間の、ため……？ 『魔王』は、人間のセカイのために、神に遣わされた者、なの……？」

シャルルの動揺している声が聞こえた。やっぱり姿は見えない。

——過去の僕たちが、すぐにお城の掃除を開始した。

僕とケイオスはなんだか良く分からない力を使って、みるみる城を片付ける。

死者を吊い、一息ついたところで、ケイオスが天界から運んできた荷物の中に、不審な物を発見した。

「ん？ こんな物を入れた記憶は無いが？」

「どうしたの、ケイオス？」

城のエントランスホールで、冷たい石床に置かれた、一抱えに出来るよ

うな小さな木箱。

ケイオスはそこから食器や衣類など、次々と取り出していた。

出てきた分で、もう木箱よりも大きな山になっている。木箱は見た目どおりの容量じゃない。

そんな木箱から出てきた水晶球を光にかざし、ケイオスは首を捻っていた。

でも、それが何か、僕にはすぐに分かった。

「……クリス。まさか、勝手についてきちゃったの？」

「クリス？ まさか！」

ケイオスがぎよっとして水晶珠を覗き込んだ。

すると水晶は光を発し、

「ばれたか。やるな、ディア」

と偉そうなことを言いながら、クリスへと姿を変えた。

「ク、クリス！ お前、なぜこんな所にいる!？」

ケイオスの顔面から血の気が引いている。錯覚か、縦線が見えるような気がした。

僕もかなり硬直している。

そりゃそうだよ。

十二神でも話の分かる『軍神マルス』様のような方の旗下ならばともかく。

クリスは十二神最高の恐怖と言っても過言ではない、あの『戦女神ヴァルキュリア』様の旗下なんだ。

こんな勝手がばれたら、きっと間違いなく殺されるよ！

そんな僕らの心配など一切気にする風もなく、クリスは涼しげに答えた。「なぜこんな所にいるか、だと？ 天界を抜け出してきたからに決まっている。そんな事も分からないのか、ケイオス」

「お、おま、お前っ……」

ケイオスがかくかくと震えている。

無理も無いよ。

ヴァルキュリア様って、物凄く直情傾向の強いお方だから。

へたしたら、問答無用で僕らごとクリスを抹殺しかねないもん！

「まあまあ、落ち着け、ケイオス。私はディアの側にいられば、それでいいのだ。ここにいる間は、ずっと水晶珠のふりをする。ヴァルキュリア様は探査が苦手だから、これなら絶対にばれないはずだ」

「ええええええええ！」

自信満々に言い放つクリスに、僕とケイオスは溢れ出る感情を抑えることが出来ず、ただ叫んだのだった。

それから、僕らの《ギルトサバスの城》での生活が始まった。

心配していたヴァルキュリア様からのお咎めもなく、僕らは胸を撫で下ろした。

僕は城の最上階にある玉座の間に、ずうっと籠りきり。

豪華だけど、暗くて重厚で息苦しい、玉座の間に。

毎日毎日、ただ玉座に座り続ける。恐ろしいデザインが施された玉座に。

それが僕の、『魔王』としての仕事だ。

退屈な毎日に、ケイオスとクリスの存在は、本当にありがたかった。

そして、百年も過ぎた頃——僕とケイオスの身に、異変が起き始めた。

「ディア……角、が……。翼も、とうとう消えてしまった……」

「うん。でも、仕方がないよ」

心配そうなケイオスに、僕は出来るだけ明るく答えた。

突然だった。

僕とケイオスの姿が、変貌した。

全体から淡く放っていた光もとうに消えて、僕らはくすんだ色になっていった。

「……『闇』だ。体が『闇』に侵食され始めた。なんてことだっ……なんて……」

水晶珠としてこの部屋の隅に鎮座しているクリスが、悲しげに呟いた。

「クリス。お前はそのままの姿でいるんだ。体組織を物質的に変化させているその状態なら、我われほど『闇』の干渉は受けないだろうからな」

「ケイオス……」

ケイオスに優しくそう諭されて、クリスは声を詰まらせた。

ケイオスはバルコニーに出て、外の世界を見渡した。

僕は玉座から悲壯感の漂うケイオスの背中を見つめた。

「……この《ギルトサバスの城》で『闇』を取り込むのが間に合わなくなってきたようだ。外界には、『魔物』が発現し出している」

遠くを見つめるケイオス。その手はバルコニーの手すりを握り締め、震えている。

「予定より早い。人間たちの発する『闇』が、想像以上に膨れ上がっているからだ」

僕はケイオスの言葉を黙って聞いた。

「前任の『魔王』は、五百年在位した。このペースでは……ディアは、あと二百年も、もたないかも知れないな……」

ケイオスの悲観的な予測に、僕は悲しくなった。

ケイオスの予想は良く当たる。だから、余計に悲しいんだ。

「はっ。人間どもめ。近頃、戦争を正当化する詭弁を使い始めたようだからな。『フェーデ』とか言ったか？ なんだかんだと言いがかりをつけ、正当な『決闘』として他領地に攻め込む騎士どもが横行し出したようだ。やられる都市側は身代金を払い、これを回避するのに必死だ。はははっ。全く、人間とは本当に愚かな生き物だ」

「そうなんだ……」

クリスから聞く話も、僕にとっては凄く悲しいものだった。

人々の負の感情から生まれる『闇』は、やがてセカイの全てを覆い、なにもかもを無に帰すだろう。

僕らはそれを阻止したくて、こうして地上に降りてきた。

前任がそろそろ限界だという話を聞いた時、僕は『魔王』を引き継ごうと決心した。

僕は、人間が好きだった。

天界からたまに覗くと、地上で生きる人々は、みんな一生懸命で。畑を耕し、魚を捕り、ものを作り、諸国を渡り歩いて商いし。凄く大変そうなのに、自分の夢や、大切な人のため、みんな必死で頑張っていた。

僕はといえば、平和でのんびりとした天界で、毎日ケイオスやクリスと一緒に過ごして。

あの人たちの役に立ちたい。

少しでも、助けてあげたい。

だから僕は魔王になろうって思った。

天使長の中では、僕が一番大きな力を有していたから、なろうと思えば簡単だって分かった。

主神アトゥム様に「僕に魔王をやらせてください」って頼んだら、思ったとおり、快諾されて。

それを知ったケイオスも、従者役を買って出てくれて。

これで、僕は自分の“存在意義”を得たと思っていた。

なのに。

現実には、残酷だった。

魔物はどんどん数を増やし、頻繁に人間を襲うようになった。

当然だよ。

魔物は人間たちの『罪』だから。

人間を恨んで当然の『生』だから。

限りない怒りや妬みを秘めたまま、自然に朽ちることもない魔物たち。

彼らの願いは、一つだけだ。

『消してくれ』

そう願い、人間たちを襲うんだ――

僕が絶望を深める中、ケイオスは立ち上がった。

「魔王軍を編成する。魔物を討伐する、魔王直属の軍勢を！」

「それはいい考えだね、ケイオス！ 僕、賛成するよ！」

僕はケイオスのプランを実現すべく、出し惜しみせず『力』を使った。

ケイオスと協力して作り出した『魔王軍』の戦士は、強かった。

この城の門番には『ヘカトンケイル（百腕巨人）』、外界をうろつく魔物の討伐には『キュクロプス（一つ目巨人）』、そして、ヴァルキュリア様の私兵を参考にした『アマゾーネス（女戦士）』たちを送り出した。

これらはケイオスの『命』そのものを使い、僕が作り出した軍隊だ。

でも、人間には区別がつかない。

どちらも『魔物』としてしか見てくれない。

だから、魔王軍は人間とも望まない戦いをするはめになった。

魔王軍の戦士たちは、大切な戦力だ。倒されても、また作り出すほどの

魔力は使えない。

僕らには『魔王』としての義務がある。

僕の後任が現れるまでは、石に齧りついてでも頑張らなくっちゃならないんだ。

魔物に敗れて消耗するならともかく、人間に消されるのは悲しすぎる。

ケイオスは魔王軍を操り、極力犠牲を出さないように努めた。

やがてケイオスは『魔軍参謀』と、人間に呼ばれるようになった。

もちろん、僕らは人間たちに「危害を加えるつもりはない」って伝えている。

でも、人間は信じてくれなかった。

「そんな禍々しい姿で、何を言う」と。

確かに、そうだ。

ある日、日に日に凶悪な姿になってゆく自分に、僕は……耐え切れなくなった。

「ケイオス。僕を……殺してくれないかな？」

そんな事を口走ってしまうほどに。

「そんなこと、出来るはずがないだろう」

ケイオスは僕の願いを一蹴した。

分かっている。そんなの、分かっているんだ、僕だって。

だから、僕は。

「じゃあ、僕の記憶を消して」

「なに？」

「僕……人間を、嫌いになりたくないんだ……。僕が生きている意味を……自分で、否定したくないんだ……」

「ディアツ……！」

僕の背はケイオスを追い越していた。

長い角が頭から伸び、髪は金に染まり、口からは牙が突き出している。

ケイオスも、背は相変わらずだったけど、すっかり姿を変えていた。

ケイオスは僕の胸に顔を埋め、そして。

「分かった。私はこれより、お前をディアボロと呼ぼう。記憶の蘇ることのないように。そして、臣下のごとく振る舞おう。私が、『ディア』を忘れるために」

静かに。

僕の頭に手をかざした。

「これが、『魔王』の、真実……」

「シャルル？」

気が付くと、僕はまた白の十字架に磔にされた状態で、シャルルを見下ろしていた。

シャルルは地面らしきところに座り込み、なにかぶつぶつと呟いている。あの灰色の空間と同じく、周りには何も無い。

でも、色が変わっていた。

辺りは、一面うす赤く染まっていた。

僕は、何もかもを思い出していた。

《ギルトサバス》を出てから、知らないはずの事を理解出来たりしていたのは、ケイオスが僕を侵食していた『闇』を吸収すると同時に、記憶の封印を欠損させたせいだ。

僕はそう思った。

シャルルがゆらりと立ち上がり、顔を上げた。

「そう。あなたは、自ら『魔王』となることを望んだくせに、ケイオスに逃げ道を求めたわけね。何も知らない自分になることで、辛い記憶と『使命』から逃げ出した……」

シャルルはぞっとするような冷笑を湛えて、僕を見つめた。

「ひどい話だわ。あなたはそれで楽になれるでしょう。でも、あなたの為にとついてきたケイオスはどうなるのかしら？ 彼と、クリスという天使。二人は、あなたの苦しみまでも引き受けなければならなくなっただんじやないかしら？ あなたに二度と辛い思いをさせないように。極力、外界とあなたとの関係を悟られないようにしなければならなくなっただ。……自分勝手なあなたを守るために！」

「うっ！ ……あ？ わあああああああっ！」

シャルルが僕を指差すと、『対極の槍』はさらに大きくなった。

それにつれ、貫かれたお腹が引き伸ばされ、酷い激痛が僕を襲った。

「ううっ！ ぐううっ！ あああっ！」

間断なく続く激痛に、僕は悲鳴を上げ、体を振る。

「見なさい。『対極の槍』が反応しているわ。あなたの『矛盾』に。あなたの『罪』に！」

シャルルは天を仰いで両手を掲げた。

「その痛みは、あなたへの『罰』！ 受け入れ、気が狂うまで苦しみなさい！ 心が粉々に砕けるまで！」

そうか。そうだね。シャルルの、言う、とおり、だよ。

「その様子だと、『未来』に訪れる、死の瞬間を見せてあげるまでもなさそうね！ さあ、このまま消えなさい！ このセカイから、永遠に！」

これは、僕の『罪』なんだ。だから、『罰』を受けるんだ。

僕、一生懸命にやってきたつもりだったけど。頑張ってきたつもりだったけど……。

全然、ダメな魔王だったんだなあ……。

でも。せめて。一度でもいい。一度で、良かったんだ。

「ありがとう」

そう、言って欲しかった。

誰でもいい。そう、言って、欲しかった……。

「ごめんね、ケイオス。ごめんね。クリス……」

最後の力を振り絞り、呟いた。

きっと届かないだろうけど。

僕には、もう、これぐらいしか出来ないから――

『死』を身近に感じる。

「おやおや。これは素晴らしい力だ」

その時、僕ら以外、誰もいないはずの空間に、第三者の音が響いた。

「う……？」

閉じかけていたまぶたを持ち上げ、僕は声の主を探した。

「誰っ!？」

シャルルが振り向いている。

その先には。

「このまま死なれては困るな、ディア。私はまだ、キミの望みを聞いていない」

「……ハッ、ピー……？」

そこには飄々とした雰囲気纏い、ハッピーが、本当に普通に立っていた。

黒い体。黒い顔。角とコウモリのような翼が黒く痩せこけたシルエットから突き出している。

ぱちぱちと瞬くまん丸な赤い瞳と、開けっ放しの裂けた口。

見間違えようもない。

これは、間違いなくハッピーだ！

「シャルル。まさか、キミが『ホルダー』だとは。さすがの私も、ちょっと気付かなかった」

「何者？ って、どこからどう見ても『悪魔』の類いね」

シャルルがハッピーを警戒し、身構えている。

腰を落としたその姿が、勇者ウィルに重なった。

「そうか。目隠しをしていたので、シャルルは私の姿を見ていないな。では、自己紹介からはじめよう」

ハッピーは胸に指の尖った手を当てて、優雅に腰を折った。

「私は、ハッピー。『十字路の悪魔』と呼ばれる者。人々の願いを叶え、代償を得て生きる者。キミとの紅茶談義、大変愉快だった。お礼を言う。あんなに楽しい時を過ごしたのは、何十年ぶりだったろう。ははははは」

「えっ？ えええええっ？ その声、その語り口……。これが、あの高貴な方なのっ!? わたし、こんなモノと楽しくお喋りしていたのっ!？」

うわあ。シャルル、やっぱりショック受けちゃった。

激痛があるにも関わらず、僕の頬が少しだけ緩んだ。

「……そうか。あなた、『ナイトメア』みたいな、『精神感応系』の悪魔なのね。だから、ここに入ってこられた……」

「ご明察だ。いかにもその通り」

シャルルの指摘に、ハッピーは満足そうに頷いた。

「さて。そこな『魔王』の成り立ちは、私も一部始終見せてもらった。結果、『対極の槍』とは、『罪』の判断の曇った“なまくら”である。と、私は断ずる」

「なんですって？」

ぴく、とシャルルの眉が吊りあがった。

「選ばれた者に宿る『アーティファクト（神器）』、『対極の槍』。それは時間を飛び越え、見えざるものを見、中立公正に裁きを下すが本懐だ。だが、『オーナー』の意思が強すぎれば、その判断に支障をきたすも止む無きこと。世に完璧な物などない、非常に良い見本と言える。いや、それも幼さゆえか。まだまだ『対極の槍』を使いこなすには無理がある」

僕はぼかんと口を開けたまま、ハッピーの語る言葉に聞き入った。

これがハッピー？ なんてそんなこと知ってるの？

何者なの、ハッピーって!？」

「結局、あなたもわたしを不愉快にさせるのね。偉そうなことばかり」

シャルルはぐ、と唇を噛み締め、ハッピーを睨んでいる。

「そうかね？ 私はそんなつもりなどないが。それより、私はここに『力』をも持ち込んでいる。これがどういう意味か、分かるだろう？」

「……ええ。あなたは、“ここ”でも戦える。そういうことでしょう？」

「その通り。キミは賢い。褒めてあげよう」

ハッピーの口がさらに大きく裂けた。

どういう意味の笑みなのかな？ 分かりにくいよ、ハッピー。

対して、シャルルには焦りが窺える。直接戦うなんて、経験が無いんだろう。

「どうするつもり？ その魔王を助け出し、わたしを倒すつもりなの？」

「いや。やろうと思えば簡単だが、私はそれをよしとはしない。第一、そうしてしまうと、キミの精神に多大な負荷が発生する。そんなこと、ここにいるディアは望まないだろう？」

ハッピーに目を向けられ、僕はこくりと頷いた。

絶対ダメだ。僕はシャルルを傷つけるために来たんじゃない。

シャルルはそんな僕を見て、目を丸くしている。

「と、いうわけだ。なので、私は話し合いをしたいと思う。本当に悪いのは誰なのか？ 本当にディアに罪があるのか？ キミは私怨でその槍を振るっているようなので、私が真実を教えてあげよう。そうすれば、ディアを攻撃するのが無意味であると、分かるはずだ」

「馬鹿なことを！」

シャルルは髪を振り乱して叫んだ。真っ赤なセカイに、シャルルの声がどこにも反響せず吸い込まれてゆく。

「馬鹿なことなどない。キミだって、もう分かっているんだろう？」

「分からないわ！」

シャルルは耳を塞いだ。

「いや。キミは賢い。分からないと思ひ込みただけだ。その調子では、ゆっくりと話など出来まい。だから単刀直入に、はっきり言おう。間違っているのはこの『セカイ』であり、罪は全ての人間にある、と」

「聞きたくない！ 聞きたくないわっ！」

シャルルは耳を押さえたまま、地面に座り込んだ。

いやいやと首を振るたび、髪が勢い良く広がった。

「そもそも全ての人間が正しく助け合い、愛し合っていれば、『闇』など生まれ出ることはない」

「そんなの無理よ！ 全ての人が互いに愛し合うなんて、不可能だわ！」

シャルルの声は、もう悲鳴に近い。甲高い音波が僕の鼓膜を叩いた。

そんなシャルルにも動じず、ハッピーはなおも話を続ける。

「そして、そんな『闇』が具現化するこの『セカイ』が異常なのだ。では、このセカイは誰が作り上げたのだ？ 人は？ 魔物は？ 魔王は？ 真に罪を持つ者は、これらを作り上げた者」

「えっ……？」

なんだって？

僕はハッピーの論理に激しい焦燥感を覚え、顔を上げた。

「『神』だ。このセカイを構成する全ては、天界の主神『アトゥム』の作り出したモノ。我われは『神』の作り出した『セカイ』の中で……ただ、翻

弄されているにすぎない」

シャルルが耳を塞いでいた手を下ろし、ハッピーを見つめた。
「『神』……？ 主神、『アトウム』……？」

あり得ない。

なぜ、ハッピーがアトウム様のことを知っているの？

それは、天界の者しか知らないはずだ！

「だから、人々に罪は無い。もちろん、魔王にだって罪はない。罪は、このセカイをこのように作り上げた神にある」

ハッピーがシャルルの前に膝を付き、優しく語りかけた。

「わたしたちに、罪は無い……？ 魔王にも、魔物にも……？」

「そうだ。だから、そんなに自分を責めなくていい。責めなくていいのだ」

ハッピーがシャルルの頭を愛しげに撫でた。

赤い瞳は両端を下げて細くなり……ハッピーなりの“笑顔”を表現していた。

「我われ地上に生きる者は、ただひたむきに生きている。それが罪であるはずがない。そうだろう？ 魔王ディアボロ。いや、第一世界の天使長、ディアよ」

「ハッピー……」

そうだね、とは言えなかった。

僕らが絶対的な君として仕えてきたアトウム様を否定されたからだ。

アトウム様が、間違っている？

『このセカイは、間違っている！ もー、我慢ならんのだ！』

いつか、クリスが叫んでいた言葉が去来し、僕の胸を締め付けた。

刹那、赤いセカイが地平の彼方から差し込む真っ白な光に満たされて。

シャルルが『クロノ・リード』と呼んでいた、今、僕たちのいるセカイが……溶けていった――

「――あ……」

薄く開けた視界に、青空が飛び込んでくる。

眩しくて、僕はそのまましてばらく薄目で空を見ていた。

「――おおおおっ！」

「――あああああっ！」

少し離れた所から、猛獣のような叫び声と耳に突き刺さるような雄叫びが聞こえてくる。

なんだろうと思いつつも、なんだか凄く心が重くて、僕はそのまま寝転んでいた。

片腕で顔を隠し、日の光を遮る。さわさわと心地いい風が頬を撫で、僕の金色の髪を優しく揺らす。

「――目覚めたか？」

耳元で囁かれ、僕は反射的に頷いた。

「そうか。どこもおかしなところはないかな？」

僕はそれにも少しだけ顎を引いて答えた。

「良かった。あちらでシャルルも目覚めた、というか、戻ってきたようだ」
シャルル？

僕は……シャルルの精神世界で……体を貫かれて……。

そこで、意識がはっきりした。

そうだ！ 寝てる場合じゃなかったんだ！

「シャルル！」

がぼっと上体を起こして急いで首を巡らせる。

すぐに傍らで膝を付いているハッピーと、少し離れて座っているシャルルが目に入った。

シャルルは板張りの地面に揃えた足を横に投げ出して、なにやら呆然としている。

床に突いた右手がカクカクしてる。

どうしたんだろう？

待てよ。そういえば、僕らはシャルルの家の、居間にいたはず。

青空が見えるなんておかしくない？ もし外なら、地面が板張りってのも変だよな？

どこだろ、ここ？

まあいいや。とにかくシャルルが心配だよ。

僕はシャルルの側へと四つん這いで這い寄り、なんとなくもじもじとしながら話しかけた。

「シャ、シャルル？ えっと。あの。だ、大丈夫、だった？」

シャルルは目だけを横にずらして僕を見た。動きが緩慢だ。

大丈夫じゃないのかな？

「……あなたこそ、わたしにあれだけの事をされて、よくそんなに平気でいられるわね」

「え？ 全く平気ってわけでもないけど……うん。とりあえず大丈夫みたい」

シャルルの言葉自体はそっけないけど、嫌味でもないみたい。

僕は思ったままを口にした。

「シャルルは？」

気遣ったつもりが逆に心配されたことに気が付いて、僕は再度問いかけた。

怪我もないし、普通に返事があったから大丈夫だろうと思っただけだった。

「あなたには、これが大丈夫に見えるの？」

「えっ？ ど、どこか痛むの？」

でも、そうじゃない答えが返ってきて、僕はちよっとうろたえる。

「酷いわ。本当に、酷いことになったわ……」

シャルルは顔を膝に埋めて悲しげに呟いた。

「ええっ!? ハ、ハッピー！ どういうこと!? シャルルを傷つけないよ

うについて、言ったじゃない！」

シャルル、凄く落ち込んでる！

あせった僕は、側に立つハッピーの肩を掴んで揺さぶった。

「おや。私に対する第一声がそれとは。私はきっと、まずはお礼を言ってもらえるものだと思っていたが」

「は」

そうだった。ハッピーは、僕を助けてくれたんだった。

「ご、ごめんよ、ハッピー。助かったよ。本当にありがとう。で、でも、シャルルが！」

「大丈夫だ。私はシャルルに酷いことなどしていない。シャルルが言っているのは、きっとあれのことだろう」

「あれ？」

ハッピーの尖った指が指し示す方に目を向ける。

そこには。

「あああああっ！ な、何してるの、クリス！ ウィンザレオ！」

ここよりかなり下った山の斜面で、激しい戦いを繰り広げるクリスとウィンザレオがいた。

「はあっ！ 喰らえ！ 『フェザー・エッジ』！」

「グファ！ んなもん喰らうかよ！ 『フット・アクセル』！」

クリスの翼から繰り出される、鋭利な無数の羽を、ウィンザレオが残像の出来るほどのスピードで回避している。

「とうりゃ！ 『アーム・アクセル』！」

クリスの飛ばす羽の間をすり抜けて、ウィンザレオの拳がクリスを目指す。

え？ 腕が百本以上あるように見えるけど！

「はっ！ 『ディフェンシブ・ウィング』！」

それをクリスの猛烈な勢いで広がる翼が弾き返した。

うわっ！ 翼が鋼鉄みたいになってる！

二人の戦う周囲には砂塵が渦巻き、辺りの木々を巻き込んで薙ぎ倒している。

木が飛ぶ岩が飛ぶ空気が逆巻く。

まるでこの世の終わりみたいな光景だ！

僕は震える声でハッピーに訊ねた。

「ね、ねえ、ハッピー。あの二人、一体、なに、しているの……？」

「ん？ ご覧の通り。戦っている。ガチで」

ガチでって。

僕はぽかんと口を開け、二人の戦いを見つめた。

「……あの二人のせいね。わたしの家が、ほぼ全壊しているのは……」

はあ、とシャルルが溜め息を吐きながら顔を上げた。

「全壊？ あ？ ああっ！」

言われてみれば。

もう、僕らのいる床しか残っていないけど。

ここって、シャルルの家だあ！

良く見回してみれば、辺りの林に屋根だの窓だの、カーテンや衣服の類まで、ものの見事に散乱している。

「なんで……？」

僕はふらりと立ち上がる。

どうしていいのか分からないけど、とりあえず座ったままじゃられないよ、これ！

「ふむ。私に任せて欲しいと言ったのだが……どうやら、待ちきれなくなったのだろう」

「待ち切れなかった？ 誰が？」

ひょい、と隣に並んだハッピーにまた訊ねる。

「クリスだ。ディアを心配するあまり、シャルルを殺そうとしたクリスを、ウィンザレオが止めた。結果、あのような激しいバトルにまで発展した。と、私は推理するが」

「ええええっ!? それ、どういうこと!?!」

「覚えていないのかね？ シャルルがキミに『クロノ・リード』を仕掛けた時、もう外は夕闇が迫っていた。今、頭上に広がっているのは青空だ」

「あっ！ じゃあ、あれから一日経ってるの？」

「いや。三日だ」

「三日!?!」

めまいがした。

気の短いクリスが、そんなに待てるはずないよ！

「そう。あの魔法は、対象の人生を見るから。長く生きている人だと、その分時間がかかるのよ」

シャルルが無表情に捕捉の説明をしてくれた。

「そういうことだ。ディアが何百年生きているのか知らないが。こんなに長く『クロノ・リード』を使い続けた相手など、初めてじゃないかな、シャルル？ はははははは」

「……いいえ。ウィンザレオの時は、これ以上だったわ。まあ、彼の時には、未来まで見ているけれど」

「ほう」

ハッピーが驚いている。

もちろん、僕も驚いた。

そんな馬鹿な。

じゃあ。

ウィンザレオって、一体何歳なの!?

「興味深い話だ。そもそも『対極の槍』とは、精神世界で用いるような『神器』ではない。『クロノ・リード』の『ホルダー』が、『神器』の『オーナー』でもあると、組み合わせでこんなに面白い『力』が発現するのだね」

手を顎に、ハッピーはふむふむと頷いている。

記憶が戻った今、僕にもそれが理解出来た。

魂や肉体に『魔力回路』を刻み、奇跡の『力』を起こす者を、『ホルダー(保持者)』という。

そして、神やそれに準ずる者の作り出した『神器(アーティファクト)』を保有する者を、『オーナー(所有者)』という。

魔力回路は強い願いにより刻まれ、神器は選ばれた者が然るべき時に与えられる。

神器はエーテル(霊的物質)で構成され、オーナーの意志で自在に出現させられる。

太古の昔に地上から失われた『魔法』は、今やこの『ホルダー』と、『オーナー』にしか行使出来ない。

シャルルは、その両方を持っている。

凄い奇跡だ、と僕は思った。

と同時に、一つの疑問、いや、興味が湧いた。

シャルルに『神器』を与えたのは、誰だろう――?

「——はあ。感心している場合なの？ そろそろ止めないと、あの二人、本気で殺し合いを始めるわ」

「あ！ そうだった！」

シャルルの言葉で、はっと我に返った。

て、「本気」で？ あれでまだ本気じゃないの、あの二人？

確かにクリスはまだ力を隠している。

でも、まさかウィンザレオもそうだなって！

それが本当なら、ウィンザレオは僕ら『天使』にも匹敵する力を持っているってことになる！

地上に、そんな者が？

「……セカイは、僕の思っているより、全然広い、ってことか……」

ぶる、と体が震えた。

「はあ？ 何を嬉しそうな顔をしているの？ さっさと止めてきなさいよ」

「あ。うん」

体内の血が熱くなった所を、シャルルの命令に冷まされた。

なんだろう、この自然な命令口調。

こんな風に命令されるの、初めてだ。

ま、いいや。とにかく止めなくっちゃ。

僕は斜面を下って、二人の元へと向かった。

近付かなくても、二人の怒鳴りあいはいは良く聞こえた。

「ちっ！ なかなかやるな、獣人風情が！」

これはクリス。

「グファファ！ てめーこそ、思った以上に出来るじゃねえか！」

これはウィンザレオ。

二人の所までは、まだかなりの距離がある。

なのに、顔に吹き付ける風は目を開けていられないほどだ。

「はあっはっはっは！ 良く言う！ そろそろ本気を出したらどうだ、ケダモノめ！ 『獣人化』すれば、爆発的に力が上がるだろう！ それより前に、まずは、その背にある大剣を抜くべきだな！」

「余計なお世話だぜ！ そう言うおめーはどうなんだ！ まだ奥の手があるだろう？ 分かるんだぜ、俺にはな！ グファファ！」

がんがん飛んでくる木や岩をなんとか避けて、斜面を必死に下る僕。

怖いよ、これ！ こんなのが一発でも当たったら、痛いじゃ済まないよ、きつと！

ていうか、なんでそんなに楽しそうに戦ってんの、二人とも？

僕には理解出来ないよ！

挑発しあう二人の力が益々強くなり、それにつれて飛んでくる物も増えてきた。

だめだ、これ以上近づけない！　ちょっと遠いけど、ここから呼びかけよう！

「クリスーッ！　ウィンザレオーッ！　もう止めて！　僕はここにいるよーっ！」

風に負けないよう、声を絞り出す。

今の僕の声って高いから、きっと良く通るはず。これなら聞こえるはずだ。

直後、ちゃんと声が届いたことが分かった。

でも、その反応は信じられないものだった。

「ディアか？　ちょっと待っている！　今すぐこのバカを片付けて、その後シャルルを撲殺し、きっとお前を助け出してみせるからな！」

「撲殺っ!?　いや、僕、ここにいるってば！」

戦いに夢中になってるんだ、クリス！　こうなると、クリスに話しは通じない！

じゃあ、ウィンザレオは？

「グファファファ！　させっかよ！　大体、シャルルのあんな貧弱な精神攻撃にすら耐えられないようなヤツあ、死んじまってもかまわねえだろーが！」

「ええええええ！　それ、割り切りすぎだよ、ウィンザレオ！」

ウィンザレオらしいといえぼらしいけど。

それ、ちょっとひどくない!?

僕の的確な突っ込みにも、二人の動きは鈍らない。それどころか、鋭く速くなっている。

「うわわ。二人とも、熱くなって僕への呼びかけが届かない……。うわっ！」

どごん、という重低音がして、僕の頭上を飛び越えた巨岩が斜面にのめり込んだ。

バカッと割れた岩の破片が、そこら中に拡散する。

「わあああ！　いたたたた！」

破片のいくつかが僕の頭にこんこんとぶつかった。

あああ！　角を隠すための真っ白な帽子が汚れちゃう！

「いたー！　うう。し、しょうがない。こうなったら……」

僕は心を決め、凄まじい攻防を繰り広げる二人を見下ろした。

「もう、力づくで止めるしかない！」

ぼう、と僕の体が青白い光に包まれた。

ウィンザレオは力の底がまだ見えない。けど、クリスの力は分かってる。

ごめんね、クリス。

「クリスの『力』、借りるね！　出でよ！　『レプリカント・サーヴァント』！」

ぼぼぼぼぼ、と僕の体の後ろから、発光体が飛び出した。

それらは一瞬直上に飛んだ後、すぐに降下を開始。

クリスとウィンザレオを猛スピードで目指してゆく。

「むっ！　これは！」

クリスが膨大な魔力に反応し、発光体へと目を向けた。

「な！　なんだ、こりゃあっ！」

ウィンザレオもほぼ同時に確認し、叫びで驚愕を表わした。

「これは、ディア！　ディアの『魔力回路』、『レプリカント・サーヴァント』か！」

さすがはクリス。て、知ってるんだから当然か。

そう、これが僕の能力。

本物と同じ『力』を持つ『僕(しもべ)』を作り出し、操るのが僕の『力』！

「うおおおおいっ！　こんなの卑怯じゃねえのかあっ！」

ウィンザレオが背中の中の剣に手をかけた。

「バカが！　勘違いするな！　これは私であって私ではない！　これは、これは！」

クリスが翼を最大にまで広げ、無数の羽を周囲に浮遊させて、防御の陣を展開した。

「これは！　ディアの複製した『私』！　私と同じ『力』を持つ、幻影だ！」

クリスとウィンザレオに迫っているのは、僕の作り出した『クリスたち』だ。

本当はもっと出せるけど、とりあえず五体のクリスを作ってみた。

僕の操る五人のクリス対、一人のクリスとウィンザレオ。

これなら、絶対止められるよね！

「さあ、行け！　僕の『サーヴァント』たち！　二人を拘束して、戦いを止めさせるんだ！」

僕は二人に向けて手を振り下ろした。

目的は戦いを止めること。二人を倒すことじゃあない。

クリスの本気モードでサーヴァントを使役することも出来るけど、それじゃあ二人とも殺してしまいかねない。

だから、僕は。

「サーヴァントたち！　『鎖翼(さよく)』展開！　二人を拘束せよ！」

そう命じ、五体のサーヴァントを二人の頭上で旋回させた。

五人のクリスがそれぞれ真横に翼を広げると、その下側の羽が全て急速に伸び、ザクザクザクザクと地面に突き立つ。

五人を頂点として、ドーム状になった翼の結界が出来上がった。

これで『翼の檻』の完成だ。二人は、もう逃げられない。

「グファファ！　何をしてきやがるんだ、こりゃあ？　グファファ」

ウィンザレオは背中の大剣を引き抜くと、両手で構えてサーヴァントたちを見上げた。

「バ、バカか、貴様は！　見ろ！　もう、ディアはこちらに無事戻ってきている！　戦う理由などないだろうが！」

クリスは翼で自分の周りを囲い、防御の姿勢を取っている。

クリスの魔力回路は『マター・アルティレーション』。

自分の全てを自由に、望むままに変質させることが出来る。

魔水晶になっていたのも、この力によるものだ。

本物のクリスは翼を鋼鉄に変質させて、僕の攻撃に備えている。

良かった。正気に戻ったのなら、攻撃しなくて済むもんね。

問題は、ウィンザレオか。こっちの方は厄介だなあ。

ウィンザレオ、こうなってむしろ嬉しそうだもん。

僕の『力』が知りたいんだね、きっと。

その気持ち。戦いが嫌いな僕でも、さ。

僕でも、なんとなく分かるよ、ウィンザレオ！

『『チュールの鎖』、発動！ ウィンザレオを巻き取れ、サーヴァント！』

僕はサーヴァントを動かした。

「うお、おおおおおっ!？」

ウィンザレオが見上げたままに雄叫びを上げる。

僕のサーヴァントたちの翼から、羽を変化させて作り出された鎖が、ウィンザレオに向かって、じゃらららららと、何本も何本も高速で伸びてゆく。

「ぬおおおおおっ！」

ウィンザレオの剣が唸りを上げた。

は、速いっ！ 動きが全然追えないよ！

見えない壁があるかのように、ウィンザレオの周りで弾かれてゆく『チュールの鎖』たち。

この銀色の鎖は天界にしか存在しない『オリハルコン』を輪状に作り、繋げたものだ。

地上で一番硬い、成型可能な物質は鋼鉄。剣はこれで出来ている。

「驚いたな。でも、それだけじゃあ、『チュールの鎖』は、防げないよ！」

剣の動きはみるみる遅くなっていった。鎖が徐々に絡みつきつつあるからだ。

ウィンザレオの肉厚で幅広、僕の身長ほどある大剣は、その刀身を巻きついた鎖で隠していった。

「ちいっ！ なんだ、この鎖!? 切れやしねえ！」

ぱ、とウィンザレオは剣を手放し膝を曲げて腰を落とした。

そして、宙に浮かぶ五人のクリスに向けて跳び上がる。

ごう、とウィンザレオがクリスたちの一体に迫る。

大人しくなった本物のクリスは手で顔を隠して「あーあ」と溜め息をついていた。

「ぐ、えっ！」

ウィンザレオが空中で苦しそうに呻き声を上げた。

ぴた、と宙で静止したウィンザレオは動かない。

ウィンザレオの体は鎖で出来たミノムシのようになっていた。

当然だね。

下より、上の方が。

鎖の密度、高く出来るもん。

ウィンザレオは、ものの見事に僕の戦術にはまってくれた。

まずは上から攻撃。通用しない場合、敵が上がってくるのを待つ。空が

見えるようにしたのはこの為だ。

『囲師は周するべからず』。

相手の動きをコントロールするには、常に選択肢を一つだけ与えるもの
なんだよね。

「……おい。息は出来ているか、ウィンザレオ？」

五体のサーヴァントの冷たい瞳に見下ろされる、宙ぶらりんとなったミノムシ型ウィンザレオに、クリスが同情の籠った声をかけた。

「……一応な。グファ。魔王って、強えんだな……」

鎖の隙間から、ウィンザレオの意気消沈した声が漏れ聞こえた。

「良かった。ウィンザレオも、もう戦う気がなくなったみたいだね」

少し離れた斜面から、僕は満面の笑顔を二人に向けた。

ウィンザレオとクリスを大人しくさせることに成功し、僕らはシャルルの家へ……いや、シャルルの家だった場所へと戻った。

『クロノ・リード』発動中、シャルルと僕が倒れていたと思われる、床だけしか残っていないシャルルの家。

その床で、クリスとウィンザレオが正座している。

シャルルとハッピーは僕の後ろでそんな二人を見下ろしている。

僕はすうっと息を吸い込み、二人へと声をかけた。

「さ、じゃあ、シャルルに謝ってよ、二人とも」

「なんでだよ？ 俺あ、シャルルをこの暴虐な天使ちゃんから守っただけだぜ」

「誰が暴虐だ、ウィンザレオッ！ そして、なぜ謝らなければならないのだ、ディア？ 私はそのちんちくりんな小娘から、お前を助けようとしただけだ」

僕が謝罪を求めるも、二人はあっさり拒絶した。

「ちんちくりん、ですって？」

ぴく、とシャルルの眉が跳ね上がった。

確かにシャルルは僕より小さい。本人も気にしているみたいだ。

「もう、クリス。理由は分かるし僕は感謝してるけど、シャルルの家を壊しちゃったのは事実でしょ？ ウィンザレオだって、クリスを止める為にやむを得なかったかも知れないけど、あの様子だとそれを楽しんでいたんでしょ？」

「む。それはそうだが……」

「グファファ。まあな。途中から、この天使ちゃんの相手が楽しくなったのは確かだな」

クリスは納得がいかないらしく、顔を背けて唇を尖らせた。なんかぶつぶつ言っている。

ウィンザレオに至っては、もう言い訳する気もなさそうだ。

「はあ。分かってるんじゃないか。だったら潔く謝ろうよ。他のことは置いて、家を壊したことだけは間違いなく悪いんだ。そこだけは謝ろう。ね？」

僕は二人の、主にクリスの顔を覗きこんで出来るだけ優しく促した。

ウィンザレオは多分、「潔く」に反応する。

でも、クリスには気を遣わなくっちゃならないから、ちょっと面倒臭いなあ。

「分かった。ディアの願いを私が聞かないわけにはいかないからな」

クリスが険しい顔をシャルルに向けた。

まだ言い訳するんだ、クリス。僕のお願いになっちゃってるし。往生際が悪いというか、素直じゃないというか。

「うし。潔くないと思われるのは気に入らねえ。俺もずばっと謝るぜ」

ウィンザレオはにやりと笑ってシャルルにウィンク。

それが謝る態度なの？

二人とも、謝る理由がおかしいよ。

シャルルはそんな二人を見てどう思ったのか、黙って静かに立っている。

まず、クリスが口を開いた。

「悪かったな、小娘っ！ 謝ってやるからありがたく思うがいいっ！」

「えええええ！ それ、謝ってないよね、クリス!?!」

僕は激しく突っ込んだ。

なんで胸を張ってるの、クリス!?

「悪かったぜ、シャルル！ でもまあ、家なんざまた建てればいいこった。

あんまりクヨクヨすんじゃねえ！ グフアフアフアフア！」

「えええええ！ なんでそんなに偉そうなの、ウィンザレオ!?!」

こっちにも猛烈な突っ込みを入れた僕。

入れずにはられないよ、これ！

「……あ、あんたたちはっ……」

シャルルが拳を握り締めて肩をわななかせた。

「はっはっはっはっは。これはいかにもお二方らしい。はっはっはっはっは」

ハッピーが体を折り曲げて笑い出した。

心の底からおかしそうだね、ハッピー。

「ご、ごめんね、シャルル。後で僕が良く言ってきかせるから！ とりあえず、ここは二人を許してあげて！ ね？ ね？」

「……うー……」

僕は必死でフォローした。おろおろとする僕に、シャルルは犬のように唸っている。

なんで僕がこんなに気を遣わなくちゃならないの？

シャルルはしばらく僕の目をじいっと見つめ、

「まあ、いいわ。それより、あなたって、本当に魔王なのね。ウィンザレオをあんなに簡単に止めちゃうなんて。……ねえ。『魔王』って、一体なんなの？」

と、興味の矛先を変化させた。

「え？ う、うん。『魔王』ってね、この地上に溢れ出た『闇』を吸い込んで、きれいにして返すのが役目なんだ。これぐらいの『力』がないと、務まらないから」

シャルルの機嫌が多少なりとも良くなったようなので、僕はほっとした反動から素直に話していた。

「そう。凄いのね、魔王って……。それが、まさかこんなにかわいい女の子だなんて。とても信じられない気もするけれど……」

すると、シャルルは僕のことを、上から下までじろじろと眺め始めた。

あ。そうだ。

今の僕って、頭にはきのこみみたいな、角を隠すための白い帽子。体はワンピースにベストを羽織って、足には短いブーツを履いているんだ。

僕、女の子にしか見えない姿なんだった！

誤解されてる！ 訂正しとかなくっちゃ！

「わ？ わわっ？」

でも、「僕は男だよ」って言うことは出来なかった。

シャルルが、僕に抱きついてきたから。

なななな、なんで？ どうして？

クリスとケイオスにしかされたことのない抱擁に、僕は激しく動揺した。

「な！ 私のディアに、一体何をしているのだ、このちんちくりんっ！」

「まあまあ。いいじゃねーか。グファファファ」

腕を振り上げるクリスを、ウィンザレオが羽交い絞めにした。

クリスは「離せ！ 離せえっ！」と怒鳴っている。

「……魔王が何か、知らなかったからって、わたしのしたことはやっぱり酷いと思うわ。だから、家を壊されても仕方がない……。ごめんなさい、魔王……いえ、ディア」

意外だった。

シャルルは、僕に謝罪したかったんだ。

僕の過去を見たから？

それしか考えられないけど。

「い、いいんだよ、シャルル。僕だって、今まで忘れていたんだから。思い出せたのはキミのお陰だよ。記憶が戻って、自分の能力も前みたいに使えるようになったし。ありがとう。そして、ごめんね。嫌なもの、見せちゃって」

何か言わなくちゃと思って出た言葉だった。

でも、シャルルはそれを聞くと、びくっとしながら僕から体を離れた。

青く大きな瞳が見開かれ、きらきらと輝いている。

きれいな子だな、と僕は思った。

同時に、いつかの疑問がまた湧いた。

シャルルには、何も無い？

一体、どういうことだろう？

でも。

シャルルは、きっといい子だ。

僕はそう確信していた。

「優しい魔王、か……。変なの」

くす、と笑い、シャルルはまた僕の胸に顔を埋めた。

そして、

「あなたも胸が小さい、ていうか、ないのね。わたしと同じだわ。うふふつ」

と、笑い声を漏らした。

あ、と。そうだ。「僕は男だよ」って言わなくちゃ。

「ははははは。一件落着、かな？ ディア」

が、ハッピーの楽しげな笑いに阻止された。

「で、あなたは？ 何者なの、あなたは？」

僕の胸から顔をぐりんと横に向け、シャルルがハッピーに訊ねた。

それは僕も気になるな。

「それはまだ明かせない。時が来れば、いやでも知ることになるだろう」

でも、ハッピーは答えない。

気になるなあ、もう。

でも、いい人、ていうか、いい悪魔なのは分かった。

そうだ！

「ねえ、ハッピー。願い事、訊いてくれる？」

僕はハッピーに願いたいことを思いつき、シャルルの頭に手を置いて訊

ねた。

「ほう？ 願いが決まったのかね？ いいとも。なんなりと言ってごらん」

ハッピーは大きく頷き、快諾。

「な！ バカ、ディア！ お前の命が！」

「お？ また面白そうなことになってきた」

クリスがウィンザレオに捕らえられたまま、じたばたともがいている。

心配ないよ、クリス。

僕はクリスに目でそう伝えた。

けど、あんまり分かってくれてないみたいだ。

ま、いいか。

僕は願いを、素直な思いを言葉に乗せて。

ハッピーへ伝えようと口を開いた。

叶えて、ハッピー。

僕の、願いを！

「ハッピー」

「うむ」

「僕の、友達になってよ」

「なに？」

ハッピーは目を大きくして僕を見た。逆に、口は完全に閉じた。

ハッピーの口が閉じたの、初めて見た。

真っ黒な顔が、目だけになっちゃった。

「それが願いか？」

「うん」

「そんな願いでいいのか？」

「うん」

僕の願いを、ハッピーは何度も確認した。そして、完全に動きを止めた。

僕はハッピーの答えを待った。

ちよっと経ってから、ハッピーの口がまた開いた。

「……なぜだ？ なぜ、私を友達に？」

えっ？ 質問されるとは思わなかった。

僕は空を見上げて答えを探した。そして。

「なりたいから。僕、ハッピーが好きだもん。これからも、側にいてくれたら嬉しいんだ」

と、答えた。

「……“なりたいから”？……。私が、“好き”……？」

物凄く驚いているらしく、ハッピーは僕の答えを復唱した。

意味を吟味しているみたいだ。

おかしいな。そんなに難しいこと、言ってないと思うけど？

そう思った直後、

「う！ うお、うあ、ああああ！」

「ハッピーッ！」

ハッピーが苦しみ出した。

頭を抱え、ふらふらと後ずさる。今にも倒れそうな足取りだ。

「な、なに？ どうしたの？」

僕から突き放されたシャルルが、突然の事態に呆然とした。

「なんだ？」

「グファ？」

クリスとウィンザレオも動きを止めて、ハッピーを見据えている。

僕はハッピーに駆け寄った。

「ハッピー!? どうしたの、ハッピーッ！」

倒れる寸前で、僕はハッピーを抱きとめた。

軽い！ てゆーか、重さを感じない！

「うわあああああああ！」

「ハッピーーーーーツ！」

眩しい！

ハッピーの体がひび割れ、隙間から眩い光を放ち出した。

一筋、二筋、三筋とひび割れの数に比例して増える光のライン。

爆発する!? ハッピーが、粉々になっちゃう!?

いやだ！ そんなの！

「いやだあっ！」

僕はハッピーを抱き締めた。力の限り。これ以上、壊れないように。

でも、ひび割れは増える速度を上げてゆく。辺りは光に飲み込まれる。

「ディアーツ！」

クリスの叫び声が聞こえた。

光の洪水が収まり始めた。

僕にはまだハッピーを抱き締めている感触がある。

眩しくて目が開けていられなかったから見えないけど、ハッピーはまだここにいる。

ここにいるんだ！ 爆発なんて、してないんだ！

自分にそう言い聞かせつつ、僕は恐る恐る目を開いた。

そこには。

「やったにやーん！ やっと本来の姿に戻れたにやーん！」

「えっ？ ええっ？ えええええええっっ？？」

僕の腕の中に、嬉しそうに笑う少女がいた。

眩しい笑顔。真っ直ぐに切り揃えられた前髪と後ろ髪。色は鮮やかにすら感じられる黒。

そして。

頭からネコのような耳が生えていた。

「誰っ!？」

てか、何コレ？ ハッピーなの？

僕は慌てて手を放して飛び退いた。

「か、かわいい……」

シャルルが手を組んで目を輝かせている。シャルルにはコレがかわいく見えるらしい。

「女、か？」

クリスが迷っている。

多分、この少女が僕とひっついてたことを妬いていいのかどうか考えているんだろう。

「あいつ、にやんにやん言ってねえか？ やべえな。俺、そういうの、イラっときちまうんだが」

ウィンザレオのこめかみに、ピキッと青い筋が浮かんだ。

「嬉しいにやん嬉しいにやん！ 元の姿に戻れたにやん！ はあああ、良

かった髪もさらさらだしおばあちゃんにもなっていないにやーん！　美しいまま、ボクは復活を果たしたにやあーん！　ふっかあーっ！　にやはははは！」

「……………」

嬉しさを全身で表わして、ハッピーらしき少女はそこら中を飛び跳ねている。

それはいいけど。

彼女を見ていると湧き上がる、この気持ちはなんだろう？

お腹がムカムカしてくるし、衝動的に攻撃系の魔法を繰り出しそうになる。

手がぶるぶると震え始めたところで、クリスが僕の肩に手を置いた。

「クリス？」

クリスは「ふ」と優しく笑い、頷いた。そして、こう言った。

「それはな、『殺意』というのだ、ディア」

「これが、『殺意』、か……。て、いやいや、そんな馬鹿な！」

危うく納得するところだったよ！

なんで僕を優しく諭してんの、クリス！

僕、そんなに暴力的じゃない！　……はずだ。

「それにしても、変わった格好をしているな。あんな服は、アーク公国はもとより、この大陸中のどこの国でも見たことがない」

「そう言われればそうだね。あの子、どこから来たんだろう？」

飛び跳ねている少女は全身にぴっちり張り付くような黒い服を着ていた。

体のラインがはっきり出ているのも凄いけど（そんな精密な寸法取りを必要とする服はどこでも作られていないから）、少しごつごつとした手袋と、体の割には大きすぎる黒いブーツとの境目が見当たらない。

その黒い服は、すべてが繋がっているように見える。

もうここでおかしいのが分かる。

どうやって着るのか？ どうやって脱ぐのか？

僕らには、それすら想像出来ない服だからだ。

「さて、と」

ガチャ、と音がした方を見ると、ウィンザレオが背中の大剣を抜いていた。

「ちょ、ウィンザレオ？ なにするの？」

「ん？ ああ、なに。すぐ済むから、心配すんな。ちっとあいつ、斬ってくるだけだからよ」

「えええっ！ やめなよ！」

僕は慌ててウィンザレオの腰に腕を回し、動きを封じた。

「なんで止めるんだよ？ おめーだって、かなりイラっときてんだろ？」

「き、きてない！ イライラなんて、してないよ！」

僕は首をふるふる振った。ちよつと必死で否定しすぎかも。

ウィンザレオの腰の向こうに、シャルルがとててて、と走る姿が見えた。

ハッピーまっしぐらだ。

「ねえ、あなた、あの悪魔なの？ どうしてそんな姿に変わったの？」

シャルルの目がキラキラとした星を飛ばしている。

これ以上ないくらいに分かりやすい、興味津々な様子だ。

「にゃーん？ そう！ ボクね、悪魔の姿にされてたにゃん。呪われていたんだにゃーん」

やっぱりハッピーなんだ、アレ。あ、“アレ”とか思っちゃった。

でも、『呪われていた』って、どういうこと？

「呪われて？ 誰に？」

シャルルも同じ疑問を抱いたようだ。

ハッピーは僕とクリスをちら、ちら、と一度ずつ横目で見て、

「それは言えないにゃん」

と答えた。

「うぐうっ！」

「ウィンザレオ！」

苦しそうに地に膝を付いたウィンザレオに、僕も引っ張られてぺたんと座る。

「ど、どうしたの、ウィンザレオ？」

心配になったので訊いてみた。

「あの野郎っ……！ ただでさえイライラする喋りなのに、『言えないにやん』とか……。ぐうっ！ 胃が、胃が痛いつ……！」

「あ。そういうことか」

お腹を押さえて蹲るウィンザレオに、僕は激しく同情した。

それにしても凄いな、ハッピー。このウィンザレオに、言葉だけでダメージを与えるなんて。

そう思いつつ顔を上げると、いつの間にか目の前にハッピーが立っていた。

それに気付いたウィンザレオは「がは」と呻いて吐血した。

どんだけダメージ受けてんの、ウィンザレオ!?

「ありがとにやん、ディア。あなたのお陰で、ボクは元に戻れたにやん」

「えっ？」

ウィンザレオの背中をさする僕は、頬を赤らめながらお礼を言うハッピーにびっくりし、手を止めた。

「どういうこと？」

僕は素直に訊ねた。

「うーん。詳しくはまだ言えないんにやけど」

にやけどって不自然でしょ。無理してない、それ？

もじもじと言いよどむハッピーに、僕は心の中で突っ込んだ。

「ボクの呪いは、人々の『願い』を通じてしか解けないものだったにやん。その上で、『ボク自身を必要としてくれる人』に出会わなければ、解けないものだったにやん。そういう呪いをかけられたのにやん……」

ふ、とハッピーが目を悲しげに伏せた。

「ハッピー？」

僕はなんとなく感じていた。

ハッピーは、真剣に話そうとしていると。

「ひどいわ。こんなにかわいい姿を封印されて、そんなことを！ そんなの無理よ！」

ハッピーの後ろでぴよこぴよことしていたシャルルが突然憤慨しだした。

「えっ？ なんで？」

僕はシャルルの怒っている理由が分からなかった。

「なるほどな。考えてもみろ、ディア。あんな怖そうな悪魔を、『悪魔自身』を、誰が必要とするんだ？ 人々は、きっとハッピーの願いを叶える『力』

のみを必要としたに違いない。それはハッピーじゃなくてもいいことだ。
その『力』さえあれば、誰だろうが関係ないと思ったはずだ」

「クリス」

首を捻る僕に、クリスが説明してくれた。

ハッピーは唇を引き結び、体を硬直させている。

いやな事を思い出しているのかも知れない。

「な、なんの為に、そんないじわるなことを？」

僕はクリスに訊ねた。

「はっ。大方、人間どもの『汚さ』を、こいつに思い知らせる為の呪いだ
ろう。 どれだけ尽くそうと、どれだけ好意的に近付こうと……人間に、
それは『通じない』と悟らせようとした。それが術者の思惑だと推察でき
る。 そうでなければ、こんないやらしい呪いをかける理由の説明がつか
ない」

「ひどい！ ひどいわっ！」

シャルルが腕を振り回して叫んでいる。

ハッピーはそんなシャルルに、「ははは、にゃん」と困ったように笑っ
ている。

「……確かにひどいね。でも、一体、誰がそんなことを……？」

分からない。

誰だか知らないけど、こんなことをするなんて、きっと『悪意』の塊のような人に違いない。

「……誰か、か。多分、“あいつ”だろう。だから、ハッピーは誰にやられたのか、はっきり答えないのだ」

「分かるの、クリス？ 誰？ 誰なの？」

凄いなあ、クリス。僕はクリスを尊敬した。

「……聞くな、ディア。私の予想が正しければ、きっと」

「きっと？」

クリスはそこで言葉を区切り、僕を見た。

躊躇ってるの、クリス？

「きっと、我われにとっても大変なことになる。多分、この問題の根は、お前の想像している以上に、遥かに深い。ハッピーの呪いの真相を聞いた時……お前がどうなるのか、私には分からない。だから……聞くな、ディア。お願いだから……」

「クリス……」

クリスは僕を胸に抱き寄せ、そのまま何も言わなくなった。

クリスの体が震えている。

クリスは、何かに恐怖している。

それがなんなのか分からない僕には、どうにもしてあげられなかった。

だから。

クリスの後ろにそっと回した僕の手で、背中をぽんぽんと叩いてあげた。

怖くない。怖くないよ、クリス。

僕が側にいるから。僕が、クリスを守るから。

シャルルはハッピーの手を握り、ずっと顔を見つめている。

うるうるとした瞳は、「もう大丈夫！ わたしがここにいるんだから」と訴えかけているようだ。

見た目が変わったから？ いや。そうじゃない。と、思いたい。

僕がクリスを宥めている横で、ウィンザレオが立ち上がった。

手をかざして遠くを見るウィンザレオの表情は、口元に笑みが残っているものの、目は真剣になっている。

「……とうとう来やがったな。やっぱ、家は潰しといっても問題なかったらしいぜ。グファファファ」

「来た？ 誰が来たの、ウィンザレオ？」

ウィンザレオの視線を辿ると、僕らがやってきた道を下ってくる身なりの立派な人間に突き当たった。

細身で上品なスーツを着こなすその人物の左右には、騎士風な男が二人

いる。

護衛？ だとしたら、結構いい身分の人なのかもしれない。靴も普通の革靴だし、こんな山奥に来るような格好じゃない。

「おお。これはどうしたことですか、シャルル様？ ご自宅が損壊しておられるようですが。ここにだけ、台風でもきたのですかな？ ほっほっほ」

後ろ手にしていた右手を軽く挙げ、朗らかに笑う細身の紳士。

鼻の下にたくわえた白い髭は左右に真っ直ぐ、剣のように伸びている。

瞬間、僕は「この人、おかしい」と感じた。

だって。この惨状を見て笑って挨拶してくるなんて、おかしいよね。

それはシャルルも思ったらしい。

「ええ、そうね。ちょっと小型で猛烈な台風が通ったの。で、なんの御用かしら、デーネ卿。今、我が家の異変に気が付いたということは、昨日、おとといはここを訪れなかったということでしょう？」

ハッピーを自分の後ろに隠し、そう言うシャルルの口調は、明らかに棘がある。

シャルルはこのデーネとかいう男の人に、いい印象はないみたいだ。

「お？ ほっほっほ。いかにもその通りです。さすがはシャルル様ですな。ほっほっほ」

「簡単に認めるのね。あなたの役目はわたしの家に、毎日紅茶と必要な物資を届けることでしょうか？ それを二日も怠って、なぜ笑っていられるのかしら？」

シャルルはデーネを非難した。ウィンザレオはぶすっとした表情だ。

二日？ ああ、そうか。僕ら、三日前の夕方から『クロノ・リード』の精神世界にいたんだっけ。

じゃあ、このデーネという紳士は、毎日、夕方前までには来るってことだね。

「んっふっふ。役目を怠っていたわけではありません。ガードナー伯のご指示によるものですからな。本日こちらに伺ったのも、もちろん指示の元、ですが」

髭を片手で引っ張って、デーネは余裕ありげに笑ってみせた。

いやな感じ。皮肉屋さんだな、この人。

ところで、ガードナーって、誰だっけ？

聞いたことがあるような……。あ！ この街に入る時、ウィンザレオが僕らのことを「ガードナー卿への貢物だ」って言ってたっけ。

じゃあ、ここの領主のことか。

「そう。見たところ、従者は何も持ってなさそうね。何しに来たのかしら？」

毅然と立つシャルルを、ウィンザレオは複雑な表情を浮かべて見ている。

「今日の荷物はこれだけですからな。こんな物、私でも運べます」

「それは？」

デーが懐から鉄で出来た筒を取り出した。

上部は鷹を象った飾りが乗っていて、筒全体が金色に輝いている。なんだか威厳を感じる筒だ。

「土爵剥奪の知らせが入った書簡です」

デーは口を歪めて冷たく言い放った。

「な！」

シャルルはそれを聞いて絶句した。

「……だよな」

ウィンザレオが肩を落とした。

「一応説明しておきますと、ハーバーライト家は騎士に叙任されたウィルにより、士爵に封じられました。が、そのウィル殿が戦死してしまった以上、位は返していただかねばなりません。おわかりですね、シャルル様？」
「う……」

シャルルは俯いて唇を噛んだ。

困ってるのかな、シャルル？ その『士爵』っていうのが無くなると、どうなるんだろう？

ウィル戦死の情報は、もうここまで届いてるんだ。あれから三日経つんだから、当たり前かも知れないけど。

何か言った方がいいのか考えていると、ウィンザレオが前に出た。

「おい、ちょっと待てよ。シャルルは士爵の俸禄しか収入がねえんだ。それを止めるってのは、シャルルに“死ね”って言うてるようなもんだぜ？ あんなに頑張ったウィルの家人に対して、随分な仕打ちじゃねえか？」

「えっ？ そんなんだ？ そんなのひどいよ！」

びっくりした僕は白髭の紳士を睨んだ。

「おお。久しぶりだな、ウィンザレオ。元気そうでなによりだ」

デーンは口元だけで笑顔を作り、ウィンザレオに鋭い視線を向け、
「それはハーバーライト家の事情であり、ガードナー伯の関知するところではありません。無論、一般的な士爵家であれば、配下の騎士の生活もあるんで禄を止めることはありません。ですが、こちらはウィル殿一人で持っていた。こうなることは、事前に予測出来たはずですよ」

と、つらつらと淀みなく答えた。

「正論だな。戦いに身を置く以上、いつ死んでもおかしくはない。備えをしておくのが常識だろう」

クリスは腕を組んで頷いた。デーンの意見を認めている。

シャルルはますます俯いた。ウィンザレオも押し黙ってしまった。論戦には弱そうだ。

「そ、そんな！ そんなの、絶対おかしいよ！ だって、ウィルはみんなの為に戦って、それで命を落としたんだよっ!? なのに、死んだら終わりなんて、おかしいよ！」

黙っていられなかった。

おかしい！ そんなのおかしいよ！

「なんだ、この女は？ 無礼な。シビリアンでもない者が、私に向かってそんな言葉使いは許されんぞ」

「う」

左右の騎士がデーンの前に出て、僕に剣を突きつけた。銀色の刃がざらりと光を弾いている。

でも、僕にはそんなの目に入らない。それぐらい、この男の言うことに

反感があった。

「無礼でもなんでも、おかしいものはおかしいよ！ ウイルが戦ったのは、シャルルのためだ！ シャルルがいなくちゃ、ウイルスは頑張れなかったはずだ！ だから、ウイルスの爵位だって、シャルルがいなくちゃ貰えなかったはずなんだ！」

「黙れ！」

二人の騎士の剣がクロスして、僕の首に押し当てられた。

「ディア……」

シャルルが泣きそうな顔を上げた。

「いやだ！ 僕は、黙らない！ そんなウイルスを見送るシャルルがどんな気持ちだったか、考えてあげてよ！ きっと、心配で寂しくて悲しくて、何度も何度も泣いていたに違いないよ！なのに、ウイルスが死んだらそれまでなのっ!? シャルルは、なんの役にも立っていなかったって言うのっ!? そんなの、間違ってる！ 誰がなんと言おうとも、絶対間違っているんだよっ！」

「……この、ガキがっ……！」

デーンは書簡を握り締め、ぶるぶると肩を震わせ出した。顔は真っ赤になっている。

「かまわん！ そのガキは首を刎ねろ！」

デーンは手を横に振り払った。

「ははっ」

首にあった騎士の剣が一旦引かれ、再び僕に向かってくる。

「っ！」

僕は思わず目を閉じた。

「やめときな」

「むっ！ 邪魔をするか、ウィンザレオ！」

でも、その剣はウィンザレオの剣に阻まれ、止まっていた。

交差する二本の剣の間に、ウィンザレオの大剣がぶつかり、ぎりぎりと言を立てている。

騎士二人は両手で剣を握って押している。

でも、ウィンザレオは大きな剣を片手で支え、涼しげな顔で二本の剣を止めている。

凄い。びくともしてないよ。怪力だなあ、ウィンザレオ。

「ふ。ウィンザレオの魔力回路は最高の身体能力強化を誇る『モンスター』だ。『闇属性』だろうから、全力で力を解放すれば、『獣人』になってしまうがな」

「あ。そうだったね」

クリスの説明に、僕は納得して頷いた。

普通の人間じゃ、ウィンザレオの相手にならないよ、これ。

「おい、お姫様。おめー、ちっと無防備すぎじゃねえのか？ ほっときゃホ

ントに首がなかったぜ、今のは」

騎士の剣を止めたまま、僕に呆れたように言うウィンザレオ。

「あ、ご、ごめんね。僕、スピードはないから。ああいう突然の攻撃は、防御が間に合わないんだ」

「今の攻撃の、どこが突然だよ。まったく、強えんだか、弱いんだか」

ウィンザレオは肩をすくめた。大きな背中が頼もしい。やっぱり、ウィンザレオはかっこいい。

「おい、貴様。今、ディアを殺すように命じたな？」

ずいっと前に出たクリスの、銀の瞳がデーンを睨んだ。

まずい！ めちゃめちゃ殺気を放ってる！

「な、なんだ、貴様は！ 私に向かって、貴様だどっ!？」

「貴様こそ、私に向かって貴様とは、いい度胸だな」

ぶわ、と白い翼が広がった。

「わわわわわ！ クリス、殺しちゃダメだよ！」

「なにい？ 面倒だ。領主ごと、皆殺しにすればいいだろう？ 生活に必要な物など、そのついでに略取すればいいだけだ。これで全て解決だ」

「グファファファファ！ そりゃあいいな！ アルクデスタの守備兵は五百ってどこか。ガードナーも、さぞや腰を抜かすだろうぜ！ グファファファファ！」

「えええええ！ ウィンザレオ！ キミまでそんなこと言うのっ!?!」

この二人なら、それぐらいホントに簡単にやってのけるよ、きっと！
でも、こんなの！

「き、貴様らっ！ それは反乱の意思あり、ということかっ!? そんなことをしてみろ！ アーク公国本国からも増援が来るであろうし、我らの支配が及ぶうちでは、もう二度と人間らしい暮らしは出来んぞ！」

だよね。僕らはともかく、シャルルが困るよ、それ！

「んじゃあ、国を全て乗っ取るか。それなら文句ねえだろう？ グファファファ！」

「ほほう。それは面白い。こんな小娘どうでもいいが、ディアを舐められたままでは引込めん。一つ、私も力を貸そう」

なんでノリノリなの、クリス!?! 話がでっかくなってるよ！

雪だるま式に大きくなってゆく話におろおろとしていると、今まで黙って成り行きを傍観していたシャルルが口を開いた。

「やめて。もういいわ」

それは、穏やかな口調だった。

「シャルルにゃん？」

ぎゅっと握られた手にもう片方の手を添えて、ハッピーがシャルルの顔を覗きこむ。

ウィンザレオが「ぐ」と苦しげな声を出し、騎士の剣に少し押された。ハッピーの一言にダメージを受けたようだ。

意外な弱点だなあ、ウィンザレオ。

「も、もういいだって？ こいつら、ウィルを都合よく使ったあげく、捨てるつもりなんだぜ？ それが許せるのかよ、シャルルッ！」

でも、ウィンザレオは頑張った。ハッピーの声にもめげず、シャルルに真意を問い質す。

「同感だな。こんなやつらがのさばっているから、ディアが苦しまねばならなかったのだ。いっそ全てぶち壊し、私が理想郷を築いてやってもいいのだぞ」

そうか。クリスはこういう人間が『闇』を生み出す元凶だと思っているんだ。

確かにそうかも知れないけど……本当にそうなのかな？

シャルルはクリスとウィンザレオを見比べると、また同じ言葉を繰り返した。

「いいのよ。いいの」

そんなシャルルの纏う空気に、僕は背筋を凍らせた。

クリスとハッピーは気付いていない。でも、ウィンザレオは僕と同じように、何かを感じているみたいだ。

「クリス。ウィンザレオ」

僕は二人に気を静めるよう促した。

「ふん。ディアが止めろと言うなら、従うしかないな」

「グファ。シャルルがいいって言うんなら、ただのじゃばりか。つまらねえぜ」

しゅしゅとクリスが翼を引っ込め、ウィンザレオが剣を引く。

「……ふん。出来もせんことを。勢いだけで生きている馬鹿どもめ。シャルルに感謝するがいい。自殺行為を止めてもらえて、良かったではないか？ ほっほっほっほっほ！」

デーンが調子付いて毒舌を振るった。

シャルルはそれでも表情を変えていない。

我慢強い？ いや、そうじゃないね。

何を考えているの、シャルル……？

「では、これを」

「ええ。今までどうもありがとう。ご苦労様、デーン男爵」

デーンから差し出された書簡を、シャルルはうやうやしく受け取った。

男爵だったのか、この紳士。

「これで、シャルル様……いや、シャルルはただのイノセント（平民）である。以後、城下街に入るにはシビリアン（文民）の資格を得るか、商用の通行証が必要となるので、そのつもりで。行くぞ」

「ははっ」

言いたい事を言った後、デーンはくるりと身を翻して去っていった。

「……なんで？ どうして一言もなく帰したの、シャルル？」

僕はデーンを見送るシャルルの、小さな背中に向かって訊ねた。

隣では、まだハッピーが手を繋いで立っている。

結局、シャルルはなんの抗議もしなかった。一番怒りたいのは、シャルルのはずなのに。僕にはそれが腑に落ちなかった。

「シャルルには、見えているからさ。だろ？ シャルル」

答えたのはウィンザレオだった。シャルルは道の先に消えてゆくデーンを見つめたままだ。

「ウィンザレオ？ 見えているって、何が？」

「それはな」

「ウィンザレオ。余計なことは言わないで」

言いかけたウィンザレオを、シャルルがぴしゃりと制した。

ウィンザレオは「分かったよ」と言って苦笑いを浮かべた。

「そうか、にゃん。シャルルにゃんは……」

「ハッピー？」

ハッピーが何かを思いついたように呟いた。頭の上で、ネコ耳がびくびく動いている。

その耳、本物だったんだ。

「あーあ。これでわたしは明日の食べ物にも満足にありつけない身の上になってしまったわ。困ったものだわ」

手を後ろに振り返ったシャルルは、舌を出して笑っている。

あんまり困っているように見えないけど、これはきっと虚勢だろう。

兄を亡くし、一人ぼっちになったところへ、働いたこともなさそうなシャルルは、唯一の収入源を失ったんだ。

笑っていられるわけがない。笑っていられる、はずがない、よ……。

「ふーむ。まずは生活をどうにかしないと」

ウィンザレオが無精髭の生えた顎をさすり、辺りを面目なさそうに見回した。

「生活、かあ……」

と言っても、家すら床しか残っていない。

新生活は、完全にゼロからの出発だよ、これ。

「どうした？ 生活なんぞ、なんとでもなるだろう？ 悩むことなど何もない。はっはっはっはっは」

クリスが能天気には笑っている。

場を和ませるためかと思ったけど、多分、いや、絶対そうじゃない。

僕もそうだけど、クリスに人間の生活感覚なんかあるはずないもの。

「おかしいな？ 『カイロスの盾』だけ渡して終わるはずだったのが、なんでこんなことになってんだ？ グフアファ」

ウィンザレオも笑い出した。けど、これはただのごまかしだよ、ね？

「はあ」

とシャルルが溜め息した。それを見て、胸が詰まった。

「大丈夫だよ、シャルル！ 僕らがきつと、なんとかするから！」

気付けば、僕はそう断言してしまっていた。

「「僕”ら”？」」にゃん？」

クリスとウィンザレオとハッピーが、同時に声を上げた。

～ 第二巻に

続く ～

男の娘魔王のクロニクル
<http://p.booklog.jp/book/60798>

著者：峯みると

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/minemiruto/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/60798>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/60798>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ